

Title	汉语位移表述中路径成分研究
Author(s)	李, 梓嫣
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/88126">https://doi.org/10.18910/88126</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

博 士 論 文

題目 汉语位移表述中路径成分研究

提出年月 2021 年 12 月

言語文化研究科 言語社会専攻

氏名 李梓嫣

## 日本語論文要旨

本研究では、現代中国語における移動表現の経路を対象に、認知意味論の視点から考察を行う。Talmy (1975) の定義によれば、経路 (Path) とは「移動または存現事件における、ある物体が他の物体に対して移動する際に従うルートや占める位置であり、その占める位置は存現事件を移動事件の極端な状況と見なすことができる」である。これまでの中国語移動表現の研究において、移動動詞の意味・移動方向や結果を表す動補構造 (「動詞+補語」構造) ・方向を示す前置詞・後置詞構造の構成と意味に注目した研究は多く見られるが、移動経路の特徴や表現については未だ十分な研究はなされていない。本研究では、現代中国語移動表現における移動経路の構成・特徴及び表現方法 (第2章)、移動動詞の意味及び文法的特徴 (第3章)、移動動詞と動補構造の組み合わせパターンと動補構造の経路 (第4章)、移動に関する前置詞構造 (後置詞構造も含む) の意味と特徴及び前置詞構造と動補構造との異同 (第5章) に着目し、言語成分の置換と比較という研究方法を通して考察する。

本論文は全6章で構成されており、各章の概要は以下の通りである。

第1章では、本研究の研究動機及び研究内容を明らかにし、これまでの研究成果を整理する。

第2章では、先行研究に基づいて、中国語移動経路の構成を分析し、経路の表現方法をまとめる。中国語の移動経路は、主に原点・終点・方向の3つの要素で構成され、原点と終点は「基準点」とも呼ばれる。人の認知によって捉えられる物事は「最初の状態」を原点として認知されるため、起点に関する情報は提示しなくてもよい状況が多く、終点と方向の2つの要素のうちいずれかを認識することで、経路を構成できる。原点 (ある時は認知上の「最初の状態」) と終点の両方で構成される経路は「離散的な経路」と呼ばれ、1つの基準点 (原点または終点) と方向で構成される経路は「連続的な経路」と呼ばれる。終点の有無は事件が自然に成り立つかどうかで決まるため、この2種類の経路の間には「有界」と「無界」の対立関係が見られる。中国語では、移動経路を表現する際、経路移動動詞、経路補語、経路前置詞構造 (後置詞構造も含む)、名詞性成分の4つの方法が使用され、この4つの方法にはそれぞれの適用範囲や文法的特徴がある。経路動詞は主に文の主動詞として位置付けられ、その経路の類型は動詞の意味で決まる。経路補語は動補構造の補語であり、通常は離散的な経路を

示しているが、“来・去”のような直示動詞と共起する際には、連続的な経路を表現する場合もある。前置詞構造は、文の主動詞の前にも後にも置くことができ、一般的に連続的な経路を表す。なお、原点を提起する場合は、前置詞構造しか使用することができない。名詞性成分で経路を表す時、その名詞が指し示すものは、認知上線形であるか、習慣上移動の終点であることが必要である。

第3章では、移動動詞の意味的・統語的特徴について考察する。移動動詞は、経路の種類によって、経路無し移動動詞（I 類移動動詞）、連続的な経路を含む動詞（II 類移動動詞）、離散的な経路を含む移動動詞（III 類移動動詞）、直示的な経路を含む移動動詞（IV 類移動動詞）の4つに分けられる。それぞれの移動動詞は、構文における位置や組み合わせ方法などによって特徴が異なる。I 類移動動詞は「様態移動動詞」とも呼ばれ、経路を含む移動動詞の補語と組み合わせなければ移動事件を表すことはできない。II 類移動動詞は経路を含むとは言え、単独で経路が表せるのは“上・下・登・爬”の僅かな単音節語と“提高・下降”のような二音節語に限る。III 類移動動詞は単独でも、他の移動動詞（III 類移動動詞も含む）の補語としても、移動の経路を表すことができる。IV 類移動動詞は普通“来・去”を指し、その経路の類型は III 類移動動詞と似ている。但し、移動表現文で目的語の後にも使用できるというのが IV 類移動動詞の特徴である。なお、「到+NP<sub>L</sub>（方処名詞性成分）」の構文において、NP<sub>L</sub>の方向詞（“上・下・前・后・中・里”など）の使用は、名詞の意味上の特徴と移動事件の性質に関連しているという現象が発見された。「V+到/在+N」構造において、“到”と“在”の互換性については、動詞Vの意味と構造が示す事件の性質に影響される。

第4章では、動補構造を巡り、各種類の移動動詞と動補構造との組み合わせや動補構造全体の経路とその構成要素の経路との関係について分析し、説明する。移動動詞を動補構造と組み合わせる際には、一定のルールに従わなければならない。I 類移動動詞は、動補構造 V1-V2 と組み合わせられる際、V1 の位置にしか入れない。I 類移動動詞が V1 となっている時、II、III、IV 類移動動詞はいずれも V2 に置くことができる。しかし II 類移動動詞は少し制限があり、“上”と“下”の2つのみ V2 に置くことができる。II 類移動動詞は、V1 と V2 のいずれにもなることができるが、I 類移動動詞と同様に、V2 に入るのは“上”と“下”に限定され、その時、V1 に置くことができるのは II 類移動動詞の“上”と“下”以外のものまたは I 類移動動詞のみである。

また、II 類移動動詞が V1 に入る場合、V2 には III 類移動動詞も IV 類移動動詞（特定の条件を満たす時）も使用できる。III 類移動動詞と IV 類移動動詞は、V1 と V2 のいずれにも入れるが、V1 として使う場合、一般的には、その補語の V2 も III 類移動動詞または IV 類移動動詞であることが要求される。IV 類移動動詞の意味構成は、単独で使用する場合は「直示経路＋一般経路（非直示経路）＋移動対照物」であり、「一般経路」は離散的な経路の特徴を表す。この時、移動対照物の情報が含まれているので、“来・去”は方処成分と組み合わせる必要がない。IV 類移動動詞を動補構造の補語として使用する場合、その意味構成は「直示経路＋一般経路＋移動対照物」となる。V1 が I 類移動動詞であれば、「一般経路」は離散的な経路として表現され、V1 が II 類移動動詞または“到”以外の III 類移動動詞の場合、「一般経路」は連続的な経路となる。V1 が“到”の場合、「一般経路」は離散的な経路となる。IV 類移動動詞を V3 として使用する場合、動詞の意味構成は単一の直示経路であり、この IV 類移動動詞は移動事件の客観的な事実に影響せず、移動主体と観測者との間の位置関係を提示するのみである。動補構造全体の経路は、一方的に構成方法や構成要素の経路的特徴の影響を受けるだけでなく、動補構造自体もその構造内の置かれる位置によって異なる動詞の特徴を顕在化させている。最後に、移動表現における“来”と“过来”の共通点と相違点についての考察を行う。主動詞として単独で使われる“来”と“过来”の互換性は、文が停止、禁止、否定の意味を表現しているかどうかと、移動の主体が発言現場に存在するかどうかに影響される。また、“来”と“过来”が補語として使われる場合、その互換性は主動詞の音節数と動詞の意味の影響を受ける。

第 5 章では、移動経路を表す前置詞構造（後置詞構造も含む）に関する問題を取り上げる。前置詞構造で表現される経路は、意味論に基づいて、方向・追従・模写の 3 つに分けられ、その移動経路はいずれも連続的な経路である。前置詞構造中の方処成分は、方向名詞・位置名詞・普通名詞のいずれかである。前置詞構造は通常、文中で前置（主動詞の前に）される。また、“向”や“往”といった方向を示す前置詞構造は、前置される他に、後置される場合もある。方処成分の性質や主動詞の音節数や目的語・補語などの他の補助成分の有無が前置詞構造の後置の可能性に影響を与えらると思われる。経路を表す前置詞構造は、経路を示す他の言語要素と組み合わせることができると言っても、各種類の移動動詞・動補構造と組み合わせる可能性は異なる。具体的に言えば、経路を表す前置詞構文と II 類移動動詞及び IV 類移動動詞との

組み合わせは比較的自由だが、III 類移動動詞との組み合わせは制限され、動補構造との組み合わせは、一般的に、V3 の“来・去”がない（目的語の後には補語がない）ことが要求される。

第6章では、本研究の成果をまとめた上で、今後の課題について述べる。今後は、以下のような分野での研究が期待される。第一に、認知科学の視点から、各経路表現方法の特徴を分析し、各表現方法と認知との対応関係を見出す。第二に、経路動詞のより精緻な分類をした上で、二音節の移動動詞の特徴とその文法的な組み合わせパターンをまとめて、分析する。第三に、経路前置詞項のより詳細な研究を行う。第四に、抽象的な移動事件（Virtual Motion）に対する研究に着目する。

本研究以现代汉语位移表述中的路径成分为对象,从认知语义学的角度对汉语中的路径成分展开研究。根据 Talmy (1975) 的定义,路径(Path)是“位移或定位事件中一个物体相对于另一个物体移动时遵循的路线或占据的位置,占据位置可被视为位移的一种极端情况”。以往的汉语位移表述研究主要以位移动词的词义、表示位移趋势、结果的动补结构以及表示方向的介词结构的构成和语义为研究对象,而路径的特征及其表达方式等方面还有许多值得深入探讨的内容。本研究主要用语言成分替换和对比的研究方法考察现代汉语位移路径的构成、性质与表达方式(第2章)、位移动词的语义成分及语法特征(第3章)、位移动词组合为动补结构的方式及动补结构的路径特征(第4章)、与位移有关的介词结构的语义和性质及其与动补结构的异同(第5章)。

本文共分6个章节。

第1章简要介绍本文的研究动机,明确研究的内容并梳理相关研究成果。

第2章在结合先行研究的基础上分析了汉语路径的构成,归纳了路径的表达方式。汉语的路径主要包括原点、终点和方向三个构成要素,原点信息常常无需被提及,终点和方向两要素只需再具备其一即可构成路径。由原点和终点构成的路径为离散型路径,由原点和终点二者中的一个和方向共同构成的路径为连续型路径,两种路径表现出“有界”和“无界”的对立。汉语表达路径主要用四种方式,路径位移动词、路径补语、路径介词结构和名词性成分,四种方式有各自的适用范围和语法特征。

第3章讨论路径位移动词的语义和语法特征。以语义成分中的路径类型为标准将位移动词分为无路径的位移动词(I类位移动词)、带连续型路径的位移动词(II类位移动词)、带离散型路径的位移动词(III类位移动词)和指示性的位移动词(IV类位移动词)四类。各类位移动词在句法位置和组合规律的方面均表现出不同的特征。此外我们还讨论了“到”后方所成分中方向词使用的问题和“到”、“在”二者互换的问题。

第4章主要研究动补结构,内容包括各类位移动词组合为动补结构的方式以及动补结构中各构成成分的路径与结构整体路径间的关系。位移动词组合为动补结构时需要依照一定规律,动补结构总体的路径特征会受结构的内部构成及结构中各成员的路径特征影响。此外动补结构本身也会凸显其内部不同位置上的动词的不同语义特征。最后我们补充讨论了表位移的“来”和“过来”的异同。

第5章讨论了表示位移路径的介词结构的相关问题。介词结构表示的路径可根据语

义分为方向、跟随和描摹三类，三者均为连续型路径。介词结构中的方所成分可以是方向词、位置词也可以是普通名词。介词结构在句中一般前置（主要动词之前），“向、往”组成的表示方向的介词结构既可前置也可后置，方所成分的性质和主要动词的音节数及宾语、补语等其他附属成分的有无会影响介词结构是否可以后置。路径介词结构可以与其他表示路径的语言成分组合，但和不同类型的位移动词与动补结构组合的能力不同。

第 6 章是本文的总结和研究展望。



# 目录

第一章 研究课题及研究背景 .....	1
1.1 研究目的及研究内容.....	1
1.2 研究背景 .....	2
1.2.1 认知中的位移和语言中的位移表述.....	2
1.2.2 Talmy 的有关位移事件的研究 .....	3
1.2.3 汉语位移表述相关研究 .....	5
1.3 本文的构成 .....	9
第二章 汉语路径的性质及表达方式 .....	10
2.1 路径的构成要素.....	10
2.2 路径的两种类型.....	12
2.2.1 离散型路径和连续型路径 .....	12
2.2.2 两种路径组合关系的异同 .....	15
2.2.3 复合路径.....	19
2.3 路径的表达方式.....	21
2.3.1 表达路径的四种方式 .....	21
2.3.2 四种表达方式的语义和使用条件.....	22
2.4 本章小结 .....	29
第三章 位移动词的分类与性质 .....	31
3.1 位移动词的分类及相关研究.....	31
3.2 汉语位移动词的分类.....	34
3.2.1 无路径位移动词——状态位移动词.....	34
3.2.2 连续型路径位移动词 .....	38
3.2.3 离散型路径位移动词 .....	41
3.2.4 指示路径位移动词“来”和“去” .....	45
3.2.5 小结.....	49
3.3 有关“到”的几个问题 .....	50
3.3.1 “到+N <sub>L</sub> ”结构中方所成分与位置成分的共现问题.....	50

3.3.2 表位移的“到”和“在”的异同 .....	53
第四章 位移动词的组合——动补结构 .....	62
4.1 动补结构的构成及路径特征 .....	62
4.1.1 动补结构中动词的组合 .....	63
4.1.2 动补结构的路径特征 .....	68
4.1.3 小结 .....	72
4.2 动补结构中的 IV 类位移动词 .....	73
4.2.1 IV 类位移动词的位置及路径特征 .....	73
4.2.2 “来”和“过来”的对比 .....	76
4.3 动补结构 V1-V2 中 V1 和 V2 的“时间关系” .....	87
第五章 表示路径的介词结构 .....	91
5.1 介词结构表示路径的方法 .....	91
5.1.1 表示路径的介词结构 .....	91
5.1.2 路径介词结构的构成 .....	92
5.2 前置与后置的介词结构——以“向”为例 .....	95
5.2.1 前置词与后置词 .....	95
5.2.2 影响路径介词结构位置的因素——以“向”为例 .....	97
5.2.3 小结 .....	102
5.3 路径成分的共现 .....	103
第六章 结论和研究展望 .....	107
6.1 结论 .....	107
6.2 研究展望 .....	114
参考文献 .....	116
附录 .....	124
致谢 .....	125

# 第一章 研究课题及研究背景

## 1.1 研究目的及研究内容

位移表示物体所处位置的变化，是基本的认知范畴之一。描述位移事件的语法手段是语法系统的重要组成部分，语言中的位移表述不仅可以用来描述客观世界中的、物理性的位移事件，也可以用来描述一些非物理性的位移事件或可用位移概念理解的非位移现象。汉语中描述事件状态和结果的表达方式和描述位移的表达方式间就具有一定共通性。

不同语言拥有不同的描述位移事件的表达方式，从动词性成分的使用情况来看，英语一般用动词与介词结合的方式，日语一般仅使用动词或动词的连用形式，而汉语则不仅可以单独使用动词，也可以使用动词的连用形式（即动补结构或连动结构），或将动词与介词结构搭配起来使用，且这些表达方式也有其各自的适用范围。此外，物体的位移概念不仅涉及位移动作本身，也涉及物体和空间方所的关系，不同语言的空间方所表达体系又存在一定差异，位移动作和方所成分的组合形式也复杂多样。因此对汉语位移表达方式进行研究不仅有助于我们加深对位移、状态、结果等表达方式的理解，建立更加完善的汉语语法分析和说明系统，也有助于从位移表达方式与人类对位移事件的认识的角度探求人类认知与语言产出间的联系，从更广阔的层面寻求人类语言的普遍规律。同时，对汉语位移表达方式进行系统的分析并归纳其规律也可以为语言对比研究和更好地展开汉语作为外语的教学提供一定参考。

在既有的位移表述相关研究当中，对位移动词及其引申含义的分析与解读在研究课题总数方面占有相当的比重并且已经积累了一系列研究成果，但对位移路径和位移动作与位移场所间关系的研究与之相比还稍显不足。位移的路径是物体进行空间移动时所形成的轨迹，它贯穿位移过程始终，是抽象的位移动作的具象化的反映。

我们的研究以现代汉语位移路径的表达为主要研究对象，以具体的语料为基础，通过对语料中的语言要素进行归纳和成分替换、对比的方法，对路径的性质、不同类型的路径的特征、路径的表达方式、各种路径表达方式的语义、构成和语法规律以及路径表达方式与路径类型的对应关系进行分析。

## 1.2 研究背景

### 1.2.1 认知中的位移和语言中的位移表述

认知语言学认为物体间的能量传递（撞球模型，billiard-ball model）和物体间力的相互作用（力动态，force dynamics）是基本的认知模型，语言中的许多现象，包括描述位移事件的语法结构都和这种认知模型有关（Langacker, 2008; Talmy, 1988）。不同的认知语言学理论从不同的角度对位移事件的概念框架进行了描述。

在众多位移事件概念框架中，以 Fillmore（1968）提出的“源点—途径—目标（Source-Path-Goal）”概念框架影响最为深远。该概念框架认为，位移事件描述的是某一个主体（Theme）从某一源点开始，经过某途径最终到达目标所在位置的过程，因此一个位移事件由源点、途径、目标和位移主体四个要素构成。除了上述四个基本的要素之外，位移事件还可以包括区域（Area）、方式（Manner）、施事或原因（Agent/Cause）等附加成分。Jackendoff（1983, 1990）则用“功能—论元”概念框架解释位移事件，该框架用移动（GO）、状态（STAY）、致使（LET、CAUSE）、源点（FROM）、目标（TO）、途径（VIA）等概念描述位移中出现的事物、状态、行动等范畴。Langacker（1987）对位移事件的阐释较为特殊，在 Langacker 的理论体系中，位移是人类认知的“顺序扫描”的结果，一个位移过程是位移主体在不同的时间点处于不同位置的无数个状态的叠加。Talmy（1985, 2000b）则提出了“位移主体—位移动作—路径—参照物（Figure-Motion-Path-Ground）”的概念框架，一个位移事件也是由位移主体、位移动作、路径和参照物四个要素构成的，有关 Talmy 的这一概念框架我们会在后文详细说明。

上述理论都是从人类认知规律的角度出发解释语言现象，但对语言与人类认知规律之间的关系探讨需要建立在大量语言对比之上，研究中提出的诸理论框架、模型以及概念也需要再回到具体的语言中进行检验。松本（2017）、Matsumoto 等（2020）主持编撰的论文集中收录了数篇从不同语言的视角描述位移事件的论文，其中涉及汉语、日语、英语、法语、德语、泰语等语言，为位移表述的跨语言对比研究提供了重要的参考。田中等（1997）探究了日语位移表述的特征及位移动词的语法化情况，并对日语和英语的位移表述进行了对比研究，研究发现，日语和英语虽然在位移表述的类型及位移动词的词汇化情况方面存在差异，但两种语言的位移表述仍存在许多共性，这一研究为探究各语言间位移表述的普遍规律及人对位移事件的一般理解提供了借鉴。

### 1.2.2 Talmy 的有关位移事件的研究

Talmy (1975, 1985, 1988, 2000a, 2000b) 站在认知语义学的立场上, 从类型学的角度研究了位移事件, 分析了位移事件的语义成分和位移动词词汇化类型, 该理论对此后的位移事件研究产生了极大的影响, 不仅涌现出大量研究者对该理论进行补充和深入的探讨, 而且还有许多研究者使用这一理论分析不同的语言或进行语言间的对比 (Slobin, 1994; Slobin, 1996; Matsumoto, 2003; 李福印, 2013; 李福印, 2017)。

在 Talmy 的理论体系中, 位移事件 (Motion Event) 是宏事件 (macro-event) 的一种。宏事件是位移事件的上层概念, 宏事件中除位移事件外还包括体相事件 (Event of Time Contouring)、状态变化事件 (Event of State Change)、行动关联事件 (Event of Correlation) 和实现事件 (Event of Realization) 四种, 这四种事件属位移事件的隐喻扩展。宏事件由构架事件和次事件构成。构架事件也称“主事件”, 表达事件的语义本质。根据具体的语义, 构架事件可以是位移事件, 也可以是状态变化事件、行动关联事件、实现事件等。次事件也可称为“副事件”, 对构架事件所描述的内容进行补充说明, 一般内容为事件的方式、原因等, 并与构架事件之间构成先发、先决条件、使因、方式、伴随、后发等关系。构架事件包括图形 (Figure)、激活过程 (Activating Process)、联系功能 (Associate Function)、背景 (Ground) 四个要素, 其中“联系功能”和“背景”两个要素共同构成事件的核心结构。核心结构映射到动词上的语言为动词框架语言 (Verb-framed Language, V 语言), 核心结构映射为附加语的语言则是卫星框架语言 (Satellite-framed Language, S 语言)。

构架事件中的四个要素在位移事件中对应以下四种要素:

(1) 位移主体: 发生位移的物体, 即“图形”。为便于理解和行文, 本文将其称为“位移主体”。

(2) 参照物: 位移的参照点, 即与位移相关的场所或作为位移参照物的物体。在认知语言学领域一般称为“背景”, 本文将其称为“参照物”或“位移参照物”。

(3) 位移动作: 即宏事件中的“激活过程”。

(4) 路径: 移动主体 (图形) 与参照物 (背景) 的关系, 即宏事件中的“联系功能”, 也是移动事件的核心结构。

在以往的认知语言学领域的位移表述研究中, 研究者们大多将视线集中在位移主体和参照物两个要素的性质及二者之间的相互关系上, 将路径整体视为位移事件的构成要素之一, 很少进一步探讨其内部构成, 而在 Talmy 的理论体系中, 路径占有非常重要的

位置。Talmy 将路径分为“向量 (Vector, 到达、路过、离开某个参照点)”、“构造 (Conformation, 也叫“维向”, 里、外、上、下)”和“指示 (Deictic, 来、去)”三种 (柯理思, 2003)。

此外, Talmy 还从共时的角度总结了位移动词的三种词汇化类型:

(1) 【位移动作+次事件】run walk float

(这类动词也称“方式位移动词”或“方式动词”, Manner Verb)

(2) 【位移动作+路径】enter exit pass rise

(3) 【位移动作+位移主体】rain snow

上述理论具有较高的完整性, 为我们分析汉语位移事件和位移动词提供了新的思路, 同时它还将位移事件纳入到宏事件的框架中, 建立了位移事件与其他类型事件的联系, 为寻找映射在语言中的更为普遍的认知规律找到了切入点。Talmy (2000) 在根据核心结构的映射情况将语言分为 V 语言和 S 语言时指出, 汉语是一种不典型的 S 语言, 这一主张在汉语研究界引发了强烈的反响。汉语路径的表达方式较为复杂, 位移事件有时可用单个位移动词表达路径 (“上山”), 有时又可用动补结构表达路径 (“上到山顶”), 同时, 在动补结构中作为补语的趋向动词又可单独使用 (“到山顶”), 即动词与补语间的关系较为复杂。此外, 动补结构中“动”与“补”何者为主要动词目前还存在争议。因此, 关于汉语究竟属于哪种语言, 不同的学者有不同的观点。

沈家煊 (2003) 基本认同 Talmy 的观点, 认为汉语是 S 语言, 但并非典型的 S 语言。张亚锋 (2007)、李福印 (2015) 等研究者也持汉语属 S 语言的看法。柯理思 (2003) 认为汉语是混合类型语言, “路径”成分是由主要动词来表达还是由卫星成分来表达受移动事件是自移事件还是致移事件以及移动主体是否“有生”影响。吴建伟 (2009) 则从语言的汉英对比角度出发, 认为汉语属于 V 语言。

但也有学者认为 Talmy 的二分法有一定局限性。Slobin D.I. (2004, 2006) 指出汉、泰等语言中存在难以明确区分主要动词和卫星成分的动词连用式存在, 因此在 V 语言和 S 语言之外应该还存在第三类——“均衡框架语言” (equipollently-framed Language, E 语言), 汉语属于均衡框架语言。此后阚哲华 (2010) 又以实验的方式证明了 Slobin 的观点, 指出汉语属于 E 语言, 但属于广义 E 语言。此外, 也有学者 (罗杏焕, 2008) 认为汉语动趋结构有时第一个动词是主要动词, 有时第二个动词是主要动词, 在承认 V 语言、S 语言和 E 语言的基础上又提出第四种——“并列构架 (parallel-framed) 语言”, 并主张汉语属于该类型。但本质来说“并列构架语言”与“均衡框架语言”具有较高的相似

性，因此从语法解释简明化的角度出发考虑，是否有必要在 V 语言、S 语言和 E 语言之外再分出一种语言类型仍有待商榷，且“汉语动趋结构的主要动词依情况有所不同”这一结论还值得进一步的探讨。

纵观目前汉语位移事件研究领域，将 Talmy 的理论应用于汉语研究领域的大多是运用其位移事件类型学理论分析汉语位移事件表述中的各个语义成分，探讨汉语的类型归属，而参考 Talmy 宏事件理论对汉语位移动词的语义进行分析与对比的研究及汉语中位移表述习得的研究则对较少，具体可参考严辰松（2005）、郝美玲（2015），任龙波 等（2015）、杜静 等（2016）、杜军（2016）等研究者的研究成果。

另外，在位移事件研究领域也还存在一些有待深入挖掘的课题，李福印（2013）指出，现在的研究过于集中在对物理性位移运动事件的研究，但在 Talmy 的理论系统中，物理性位移运动事件仅仅是运动事件的两大组成部分之一，运动事件仅仅是宏事件的五个组成部分之一。因此，我们应当在科学方法论的指导下，解决宏事件中 5 类框架事件中的 50 余个方面的研究问题。

### 1.2.3 汉语位移表述相关研究

#### 1.2.3.1 本体研究

丸尾（2004）对现代汉语的空间位移表述进行了全面而详细的研究，内容不仅涉及位移动词、位移场所词，还涉及“VL”和“V 到 L”、“V+到+L”和“V+在+L”等相近结构的对比。曾传禄（2014）系统讨论了汉语位移事件的语言表达，围绕位移事件的表达模式、类型特点、介词短语的功能展开研究，同时也从认知角度讨论了“来、去”、“过来/过去”、“下来 / 下去”等成对的表示位移的语言单位的语义、用法及对称性相关的问题。但位移表述涉及词汇和语法等不同的语言层面，内部系统较为复杂，进行全面的分析尚具有一定难度，同系统性地对汉语位移表述全貌进行分析与总结相比，围绕位移动词、表示位移的动补结构和表示位移的介词结构等单一语言单位展开的研究取得了更加丰硕的研究成果。下面我们将分动词、动补结构、介词结构、构式四个方面对既有研究进行简单的梳理。

位移动词的语义构成方面，史文磊（2014）从汉语的历时发展角度分析了汉语位移事件词化类型，李天宇（2020）则在认知类型学的基础上提出了判定汉语路径动词类型的标准。而 Liu（2015）则基于动词的语义构成讨论了位移动词组合为动补结构的顺序问题。

位移动词的语法特征方面，方美丽（2004）探究了位移动词与空间名词搭配的问题，将位移动词分为“方向性位移动词”和“不含方向性的位移动词”（也称“样态性位移动词”，如爬、走、逛、跑、上、下、过等）两类，“方向性位移动词”细分为“到达性动词”（去、来、到、出、上、下、回等）、“离开动词”（下、离开）和“出发动词”（出）；又将空间名词分为“地名名词”、“地点名词”、“通路性名词”等8类。对表达离开、经过、到达等不同语义的动词和空间名词的组合情况进行了较为全面的描述，为我们进行位移事件研究提供了重要的参考。邵敬敏（2004）以“进 NP”为例讨论了动宾组合中的制约与反制约关系。

此外，滨口（2018）对趋向复合动词进行了分析，指出趋向复合动词和结果复合动词的差异，认为动补结构有的可以看做复合动词（I型），有的可以看做连动句（II型），以此可在中国语教学（汉语作为第二语言教学）中减少需要说明的语法项目。

在补语语义和句法位置方面，陈昌来（1994）对动词后作补语的“上、下、进、出、起来、下去、上来、出去”的性质、语义和功能的研究进行了梳理。刘月华（1998）将趋向补语的语义分为趋向意义、结果意义、状态意义三类，并对一些趋向动词进行考察，研究中指出，结果意义和状态意义是由趋向意义引申出来的，所有的趋向补语都有趋向意义，但只有部分趋向补语同时拥有结果意义，而拥有状态意义的趋向补语数量较少。杨德峰（2017）用认知语言学特别是认知语言学中意象图式的理论探究现代汉语补语语义的产生及句法分布的理据，对“来/去，上/下，过来/过去，回来/回去”等成对的趋向补语的对称和不对称现象进行了详细的分析。

也有不少研究从单个动补结构或趋向补语的问题出发展开讨论，其中也涉及由补语的趋向义引申出的结果义的相关问题。如李冠华（1985）研究了“上、下、进、出”充当的趋向补语对处所宾语的语义制约。刘月华（1988）将趋向补语分为“上”组、“下”组、“起”组和“开”，分析了各组趋向补语的趋向意义并比较了相关组别的语义差异，此外也由趋向义出发，对各组的结果义进行了讨论。杉村（1991，2000）探究了“掏出来”、“走进来”，高桥（2001a，2001b，2002，2003a，2003b）围绕汉语趋向动词“来”、动补结构“走出来·走进来·走回来”以及趋向动词“去”进行了讨论。陈忠（2007）考察了复合趋向补语“来/去”的句法分布问题。岛村（2017，2019）则分析了趋向补语“起”和“下”的语义网络。丸尾（2012，2014a）对现代汉语“回（来/去）”、“下（来/去）”进行了研究。可以看出，对某一特定的补语或动补结构的研究以表示指示的“来、去”居多，内容不仅涉及趋向补语的位置与搭配、本义与引申义，也涉及“上/下”、“来/去”、“进/出”等存在反



义关系的成对补语的语义和分布的问题。

在补语和宾语的位置关系方面，陆俭明（2002）考察了“动+趋+宾”、“动+宾+趋”、“动+趋<sub>1</sub>+宾+趋<sub>2</sub>”三种结构，发现趋向补语和宾语的位置与动词的性质、动词所带趋向补语的性质、宾语的性质、动词是否带“了”以及具体的语言环境有关。郭春贵（2003）则分析了复合趋向补语和非处所宾语三种位置，即“动词+复合趋向补语+非处所宾语”、“动词+非处所宾语+复合趋向补语”、“动词+趋向补语+非处所宾语+来/去”的使用条件，发现复合趋向补语和非处所宾语的三种位置关系决定于宾语是施事还是受事、有定还是无定以及动作是已然还是未然。杨凯荣（2006）讨论了当趋向补语的宾语为处所时必须放在“来/去”之前而不能放在这两者之后以及趋向补语的宾语为事物时存在三种位置的原因。

除上述研究成果以外，李冠华（1985）、陆俭明（1990）、陈昌来（1994）、刘广和（1999）、王国栓（2005）等学者也分别从趋向补语的性质、语义、补语和宾语的关系等角度进行了深入的研究。这些研究从不同角度丰富了与汉语位移表述相关的研究成果，具有重要的参考价值。但同时，补语这一语法单位在界定、性质、分类以及和动词的关系方面还存在许多值得深入思考的问题。此外还有荒川（2006）、杉村（2012）、岛村（2013）等研究者探究了形如“坐起来”、“站上来”的“逆行型动补结构”中语言成分的排列顺序与客观世界中时间顺序的关系问题。杨旭（2016）从共时和历时的角度对汉语趋向连动式的构式化历程及其机制进行了阐释。

和位移有关的介词结构方面，陈信春（1987，1991）、马贝加（1992，1999）、吴金花（2005）从汉语发展历史的角度探求了汉语介词“在、从、沿、向、到”的来源。范继淹（1982）、邢福义（1980）、俞光中（1987）则分析了“在+处所”、“从……到……”等介词结构。余志鸿（1984）的研究涉及介词结构前置与后置的问题。也有研究者认为，位移表述中动词结构之后的一些语言成分为介词结构，如徐丹（1994）研究“动词+X+地点词”（X=在/到/的）这一结构并认为，当“X”不能轻读、不可取消时，“X”为方位介词，在一些常用的动补结构中作动词的补语；当“X”可以轻化、可有可无时，“X”成分有标记“体”的功能。

此外，在和位移有关的构式方面，沈阳（2015）探究了现代汉语“V+到/在+NP<sub>L</sub>”结构的句法构造及相关问题并指出，现代汉语“V+到/在 NP<sub>L</sub>”结构的形式变化和语义差异是谓语层（VP）动词的“位移特征”和动词后附加语层（PP）介词（到/在）的“功能投射”相互作用的结果，谓语动词位移特征的强弱诱发和制约了动词后介词（到/在）表“方向”

或“存在”的终点投射选择。中根（2008）考察了表示移动事态的“V<sub>x</sub>”和“V到”句的语法意义，认为方向动词和“到”的语义和性质不同，二者涉及不同的空间认知方式和时态特征，因此主张“V<sub>x</sub>”句和“V到”句侧重于表现不同的位移形式，“V<sub>x</sub>”句表现位移动作，“V到”句表现位置变化。杉村（2009）对上述观点进行了进一步的探讨，认为“V<sub>x</sub>”句的成立依然建立在“到达”的基础上，其是将位移过程背景化并进行“对立空间转位”的结果。

### 1.2.3.2 与位移有关的方所成分研究

位移表示的是物体在空间中的位置变化，位移的概念与空间的概念是密不可分的，人类对空间的认知和理解也会影响甚至决定位移的表达方式。方所成分的性质会影响位移表述中动词性成分与方所成分的搭配。同时，不同语言的方所成分表达系统也存在差异，因此方所成分的特征也常常是位移表述研究，特别是位移动词和场所的宾语的搭配情况研究中不可回避的问题。

朱德熙（1982）从处所的角度入手，将处所宾语分为广狭两类，“广义的处所宾语指所有由处所词和处所词组充任的宾语，狭义的处所宾语专指表示趋向或位置的动词性成分后头所带的由处所词或处所词组充任的宾语”，如“我惦记着家里”和“我坐在家里”中的“家里”，虽然同为处所宾语，但性质不同。丸尾（2004b）认为汉语中的场所词存在“事物（モノ）”与“场所（トコロ）”的对立，这种对立关系在语法中有所体现，事物可转化为场所，而方位词又可使场所具象化。

### 1.2.3.3 位移表述的语言对比及语言习得研究

语言对比方面，下地早智子（1997）考察了汉语位置指示词“这儿/那儿”与动作动词“来/去”之间的关系，并将其与日语位置指示词「ここ・そこ・あそこ」和动作动词「来る・行く」进行比较。苞山（2014）对汉日两种语言中位移动词的多义化进程进行了对比。方美丽（2003）比较了汉日两种语言中表示位移方向的介词结构，归纳了汉语“往N”、“朝N”和“向N”三种表示朝向的结构特征和区别，比较了日语“Nへ+V”结构与汉语介词结构“PN+V”以及日语“Nへ+V”与汉语“VA+N”两组具有对应关系的表现形式的异同。

语言习得方面，钱旭菁（1997）以日本留学生对汉语趋向补语的习得顺序为研究对象，研究发现学生自然习得趋向补语及其引申用法遵从动词不带宾语的简单趋向补语、动词不带宾语的复合趋向补语、“起来”表示开始（不带宾语）、动词带一般宾语的趋向补语、动词处所宾语的趋向补语、“出来”表示暴露、“起来”表示评价、“过来”表示回复、“过

去”表示失去、“下来”表示开始、“起来”表示集中、“起来”引申带宾语”的习得顺序。李淑红（2000）、吴丽君等（2002）研究者探究了汉语作为第二语言学习者在习得动趋结构时的偏误问题。杨德峰（2004）则考察了初、中、高不同阶段的日语母语学习者的汉语趋向补语习得情况，研究发现三个阶段的学习者在习得过程中都表现出宾语类推泛化的问题。

总的来说，位移表述的语言对比和习得研究还建立在对某个或某些具体的语言点的讨论之上。由于对位移表述的研究本身即缺乏具有统筹性的理论体系，因此对比与习得研究的着眼点也是较为零散的。

### 1.3 本文的构成

本文共分六个章节。

第一章简要介绍本文的研究动机，明确研究的内容并梳理相关研究成果。

第二章在先行研究的基础上对汉语路径的构成进行分析，并且依照构成的不同将路径分为“离散型路径”和“连续型路径”两个类型，总结了现代汉语表达路径的四种方式，即路径位移动词、路径补语、路径介词结构以及名词性成分，归纳了路径类型和路径表达方式间的对应关系。

第三章从语义成分中的路径类型角度将位移动词分为无路径的位移动词（I类位移动词）、带连续型路径的位移动词（II类位移动词）、带离散型路径的位移动词（III类位移动词）以及指示性的位移动词（IV类位移动词）四类，并分析各类位移动词的语义特征及各类型位移动词之间在句法位置、同方所成分的组合关系等方面的异同。同时还讨论了两个和“到”有关的问题，一是“到”后方所成分中方向词的使用问题，二是表示位移的“到”和“在”互换的问题。

第四章以表示位移的动补结构为研究对象，探究第三章中提到的各类位移动词组合为动补结构的方式以及动补结构中各构成成分的路径与结构整体路径间的关系，分析了表示指示的IV类位移动词在处于不同句法位置时路径特征的差异。

第五章涉及表示位移路径的介词结构的问题，主要讨论介词结构的构成，以“向”字介词结构为例分析前置的介词结构和后置的介词结构间的异同和影响介词结构是否可以后置的因素，并简单讨论了复数个路径共现的问题。

第六章对本文的结论进行总结，并结合笔者个人的研究及理解，对今后的研究课题进行展望。

## 第二章 汉语路径的性质及表达方式

### 2.1 路径的构成要素

在第一章中我们已经指出，以往的和位移有关的研究中，研究者们大多将视线集中在位移主体（Figure，图）和参照物（Ground，地）两个要素的性质及二者之间的相互关系上，而将路径（Path）整体视为位移事件的构成要素之一，很少进一步探讨其内部构成。在 Fillmore（1982）的“源点—途径—目标（Source-Path-Goal）”概念框架中，“途径”（Path）被引入到位移事件的分析中表示“主体移动经过的地方”，并没有完整的定义。此后 Lakoff（1999）等人对“源点—途径—目标”这一概念框架进行补充和发展时将“途径”解释为“从原点到目标的轨迹”，同时增加了“位置”和“方向”两个要素以区分位移事件整体的轨迹和位移过程中某一具体时间点上位移主体的位置和方向，但也并未对表示位移整体轨迹的“途径”的构成和特征进行系统的说明。Langacker（1987）将位移事件视为通过顺序扫描（sequential scanning）操作而产生的认知概念，一个位移事件即是位移主体在不同时间点上占据不同位置的状态的集合，这一理论以认知扫描中的时间要素代替了位移事件中的空间要素，将“位置/方向/路径”等空间概念视为某一时间点上的位置或不同时间点上的无数个位置的集合。

Talmy（2000）则强调路径在位移事件中的重要作用，同时指出，路径并不是一个单纯的结构，而是由矢量（Vector）、构形（Conformation）和指示语（Deictic）三个要素构成。Talmy 将这三个要素定义为：

The Vector comprises the basic types of arrival, traversal, and departure that a Figural schema can execute with respect to a Ground schema. （矢量包括位移主体相对于参照物所执行的到达、穿越和离开的基本类型。）

The Conformation component of the Path is a geometric complex that relates the fundamental Ground schema within a Motion-aspect formula to the schema for a full Ground object. （路径的构型成分是一个几何复合体，它将与运动构造式中的基本参照物图式与完整参照物图式联系起来。）

In languages that include it in their characteristic representation of Motion events, the Deictic component of Path typically has only the two member notions 'toward the speaker' and 'in a direction other than toward the speaker'. (在那些将路径的指示成分纳入运动事件表达的语言中, 指示成分通常只有两个成员概念“朝着说话者”和“朝着说话者以外的方向”。)

也即是说, 路径的矢量要素指位移中最基本的出发、到达等要素, 如从一个位置移动到另一个位置或者进行经过或穿越某位置的移动。构形要素指位移参照物中与位移相关的部分同参照物整体之间关系的几何构形, 如汉语“到”对应的是点状的几何构形, 而“进”对应的是包围的或容器状的几何构形; 指示要素一般指接近说话者或远离说话者, 它可对应汉语中的“来”和“去”, 但指示要素并非在所有语言中都存在。

可以看出, Talmy 对路径构成的分析更加倾向于语义和认知的层面, 但用它分析汉语的位移路径表述却会遇到一些问题, 我们可以参考例(1)中的句子:

(1)

- a. 一个精神封闭的人, 坐在用玻璃封闭的盒子里, 被从住宅运送到办公室, 每天行程 3 英里。(林语堂《吾国与吾民》)
- b. 当她们从宿舍出来的时候, 全换上了游泳衣。(余秋雨《吴江船》)
- c. 走出公园, 瞧着路上的行人, 大车, 马匹, 他有点怕。(老舍《四世同堂》)
- d. 玉亭过了河, 一边从土坡往公路上走, 一边问他: “公社的会完了?” (路遥《平凡的世界》)
- e. 颂莲刚回到屋里, 卓云就风风火火闯进来, 说飞浦和大太太吵起来了。(苏童《妻妾成群》)

根据 Talmy 的定义, “离开”与“到达”均为路径中的矢量要素, 但例(1)中的五个例句却分别用了不同的方式表达这两个要素, (1a)用“从”字介词结构表“离开”, 用动补结构的补语“到”表“到达”; (1b)中的“从”字介词结构和动补结构中充当主要动词的位移动词“出”则均表“离开”。和(1b)相对, (1c)中的“出”也表“离开”的含义, 但它的句法位置却是补语而非(1b)中的主要动词。而例(1d)则是用“从”和“往”两个介词所引导的介词结构分别表达了“离开”和“方向”两种语义, 例(1e)的主要动词“回”和其补语“到”均表“到达”。可见汉语中的矢量要素和句法成分之间的对应是较为复杂的, 因此在探究路径和句法表达的关系时, 我们需要从其他角度对路径的构成进行分析。

Liu (2015) 等在归纳位移动词、介词语义组合规律时将汉语位移动词和介词的语义成分分为方式 (Manner)、轨迹 (Route)、方向 (Direction)、终点 (Endpoint) 和指示 (Deictic) 五种, 其中轨迹、方向和终点三个要素共同构成路径。Liu 对路径的分析基于动词性成分的组合关系, 更加适应分析汉语路径表达方式的需求。

结合上述研究成果, 我们认为汉语中位移事件表述的路径成分可分解为原点 (Starting point)、终点 (Ending point)、方向 (Direction) 三种构成要素和动量 (Momentum)、时量 (Time) 两种附加要素。构成要素是路径的“部件”, 构成路径本身。其中, 原点为位移的初始位置, 终点为位移的最终位置或穿越的点, 二者均可被视为基准点 (Reference), 两个基准点的连线形成位移的轨迹 (Route)。方向是位移的朝向, 不仅包括“上/下/前/后/内/外”等相对方向、“东/南/西/北”等绝对方向, 也包括跟随、遵循等附着方向。动量和时量表示位移的距离、持续时间或位移动作发生的次数, 它们将抽象的路径和具体的时空环境结合在一起, 使位移“事件化”。

## 2.2 路径的两种类型

### 2.2.1 离散型路径和连续型路径

我们在第 2.1 节中分析了路径的构成, 但在实际的位移事件表述中, 这些要素并不一定同时出现, 具体可见下面的例子:

(2)

- a. 几颗泪珠悄然无声地落到井里, 砸破了水面, 金黄的太阳照着他的脸, 他的脸照亮了井水。(莫言《断手》)
- b. 可是短短的时期一过, 许多有形和无形的箭便开始向他射来, 他躲开了一些, 但也有一些射到了他的身上。(巴金《家》)
- c. 每当 s 出去时, n 都跟在他身后远远地看着他。这三个月中, 每晚六点半 n 准时把 s 接到自己家中, 入夜再把他送回家。(王小波《东宫·西宫》)
- d. 三个人顺着脚步儿走, 过了一道石桥, 慢慢一步一步走上山。(张恨水《春明外史》)
- e. 月香迟疑地跟在她后面走了一步, 又站住了。(张爱玲《秧歌》)
- f. 从树上滴下来的水点有黄豆一般大了, 焕之仿佛觉得这才有点儿痛快; 他望了望刚才曾经站满几百个听众现在却织满了雨丝的台前的空间, 然后同冰如和三复回入校内。(叶圣陶《倪焕之》)

例（2）中各小句中路径的构成要素如下表所示（“×”表示未被提及的信息，横线后的数字表示存在多个路径的例句中所指路径的序号）。

表 2-1 例（2）中各位移事件路径的构成要素

	构成要素		
	原点	终点	方向
a	×	到	落
b-1	×	×	向/来
b-2	×	到	×
c-1	×	×	跟
c-2	×	到	×
c-3	×	回	×
d-1	×	×	顺
d-2	×	过	×
d-3	×	上	×
e	×	×	跟
f-1	从	×	下来
f-2	×	回入	×

观察上表可以发现，原点通常可被省略，我们推测这是因为被认知所捕捉到的时空中具体的事物往往存在一个初始的位置或状态，这种初始的位置或状态可作为路径预设的原点，因此在无需特别强调的情况下，具体位移表述中可省略原点信息。除原点或预设的原点外，终点和方向两个构成要素只需再具备其一即可确定一个位移路径，其中由两个基准点（原点+终点）确定的是点状的（我们将“经过点”视为原点与终点重合）或线段形的路径，由一个基准点和方向确定的是射线形的路径。

我们将由两个基准点构成的路径称为“离散型路径”，将由一个基准点和方向构成的路径称为“连续型路径”。例（3）和例（4）分别是包含离散型路径的位移事件和包含连续型路径的位移事件的例子。

(3) 离散型路径

- a. 觉慧笑了笑，把“讪闻”放回到写字台上去，说：“你怎么会以为我要撕烂它？”（巴金《家》）
- b. 那时候她骑着一辆锃亮的自行车，在小城宽广的大道上飞驰，物理教师穿着 99 号运动服跟着自行车飞跑，从金鱼巷十三号跑到“美丽世界”或者从“美丽世界”跑到金鱼巷十三号。（莫言《十三步》）
- c. 我把抹布扔回暖气片上，坐好：什么也不干，没的可干。（王朔《痴人》）

(4) 连续型路径

- a. 迎着松木明子的光亮，看见一个高大的背影，正举着镐头，沉着有力地、不慌不忙地一下一下向石壁刨去。（巍巍《东方》）
- b. 面对这种情况，冒襄的心里，像塞进了一团沉重的铅块，一阵一阵地往下坠。（刘斯奋《白门柳》）
- c. 谈话的大意是：这个池塘是一穴风水宝地，半夜三更时会有一朵奇大的白莲花苞从池塘中升起。（莫言《会唱歌的强》）
- d. 断断续续，带着抑扬节奏的吟咏之声，也随风飘来，婉小姐听出这是和光又在念诗。（茅盾《霜叶红似二月花》）
- e. 沿着石阶往上，可以看到一个精致的六角凉亭，围有护栏。（格非《江南三部曲》）

观察例（3）和例（4）并对其进行比较，我们可以发现如下规律：

① 标记“终点”的离散路径一般由带路径成分的动词表达，这些动词在句中既可以为主要动词，也可以作动补结构的补语。作主要动词的情况如例（1e）中的“回”、例（2d）的“过”、（2f）的“回入”；作补语的情况如例（2c）、（3a）、（3c）中的“回”，例（3a）、（3b）以及例（1a）、（1e）、（2a）-（2c）的“到”。能够充当这类句法成分的词一般是带路径成分的位移动词，如“上、下、入、进”等。位移动词中的路径成分和动补结构表达路径的内容我们分别会在第三章和第四章中进行更详细的说明。

② 标记“起点”的离散型路径一般由介词结构表达，如例（3b）、例（4c）以及例（1a）、（1b）和（1d）中的“从”，在一定语境条件下，“自、由、打”等介词也可用于标记“起点”。此外也存在用“出”、“下”等位移动词充当主要动词或补语以标记“起点”的情况，如例（1b）和（1c）。有关介词结构表达路径的内容我们将在第五章中讨论。

③ 连续型路径一般也由介词结构表达。根据语义，连续型路径又可分为无限接近



某个基准点的“指针连续型路径”和逐渐满足某个条件的“趋势连续型路径”（包括伴随和方向）。前者如例（4a）和例（1d）、（2b）中的“向、往”，后者如例（4b）-（4e）和例（2c）-（2f）中的“升起、下来、跟、随、沿、顺、往”等。相关内容我们也会在第五章中介绍。

两种路径的意象图式分别如图 2-1 和图 2-2 所示。

图 2-1 离散型路径

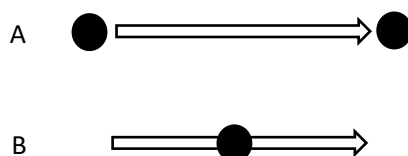


图 2-2 连续型路径



图中的圆形表示基准点，空心圆表示概念上存在但并未包含在位移过程中的基准点，箭头表示位移的轨迹和方向，其中空心箭头表示不确定方向的位移轨迹。图 2-1 表示离散型路径的意象图式，由两个原点构成。其中 A 为离散型路径的基本图式，表达从原点到终点的位移，B 为原点和基准点重合的情况，表达穿越某一点的位移。图 2-2 表示连续型路径的意象图式，其中 A 为指针连续型路径，B 为趋势连续型路径。

## 2.2.2 两种路径组合关系的异同

在 2.2.1 中我们根据路径构成要素的差异将路径分为“离散型路径”和“连续型路径”两种，并发现它们和位移表述中的不同句法成分存在一定对应关系。我们还发现，两种路径除了上文所述的构成要素和句法成分方面的差异之外，在和句中其他成分的组合关系方面也存在一定区别。下面我们将分别讨论两种路径和动量、时量成分和与方所成分组合时表现出的不同特征。

### 2.2.2.1 与动量、时量要素的组合

我们说过，动量和时量成分是路径的附加要素，它们将抽象的位移路径和具体的时

空环境结合起来。在位移事件表述中，动量和时量信息有时并不需要被强调，无需强调的动量、时量要素在语句中可被省略，而当说话人需要特别提供这些信息时，便会将这些信息编入到语句中。

不同语言成分包含的概念信息存在差异，有些成分本身即包含一定动量或时量信息，成分自身属性的差异也会影响语言单位的使用及单位间的组合关系。这样的特征在路径方面也有所体现，如例（5）和例（6）所示：

（5） 路径+动量

- a. 小平同志向码头走了几步，突然又转回来，向李灏说：“你们要搞快一点！”  
（《人民日报》1992年03月31日）
- b. \*小平同志走到码头几步，突然又转回来……（自拟）
- c. 我把配好的药往嘴送一点，感觉还可以，便又壮着胆子多吃了一点。（《人民日报》1985年10月26日）
- d. \*我把配好的药送进嘴一点，感觉还可以，便又壮着胆子多吃了一点。（自拟）

（6） 路径+时量

- a. 老头走了，沿着河岸走了很久，融进暮色之中。（史铁生《构成》）
- b. 他整整跟着母羊走了一天，大失所望，一只发情的母羊也没有。（《人民日报》1961年03月23日）
- c. 1935年到1936年之间，是我的老伴吴文藻在燕京大学教学期满七年的例假，我们到欧美旅游了一年，回到祖国几天后，“七·七”事变就爆发了。（冰心《冰心全集第八卷》）
- d. 进村几天，赵树理就和全村的男女老少混熟了。（《人民日报》1979年01月12日）

例（5）是路径与动量成分结合的情况，其中（5a）和（5c）中的路径为连续型路径，（5b）和（5d）中的路径为离散型路径；例（6）是路径与时量成分结合的情况，其中（6a）、（6b）为连续型路径，（6c）、（6d）为离散型路径。对比（5a）和（5b）以及（5c）和（5d）可发现，动量成分可以和连续型路径组合，但和离散型路径的组合受限。观察例（6）中的例句并比较其语义不难发现，尽管时量成分既能和连续型路径组合又能和离散型路径组合，但两类组合表现出的语义特征不同。例（6a）和（6b）中的“很久”和“一天”均表示位移动作持续的时间，而例（6c）和例（6d）中的“一天”和“几

天”均表示位移动作结束之后经过的时间。

沈家煊（1995）指出，事物和名词及动作和动词都存在“有界”和“无界”的对立，有界的事物或动作没有伸缩性且具有可重复性，无界的事物或动作具有伸缩性但没有可重复性。路径的特征也符合“有界”和“无界”的对应关系，即离散型路径包含终点要素，是“有界”的，没有伸缩性，因此不能和动量成分组合，和时量成分组合时，时量所表示的是位移动作外的时量，与路径的“量”无关；连续型路径不包含终点要素，是“无界”的，因此可以被表示动量和时量的成分修饰。

#### 2.2.2.2 与方所成分的组合

离散型路径和连续型路径与动量、时量成分的组合规律不同是受其“有界”和“无界”特征的影响，而“有界”和“无界”的差异也会影响两类路径和表示位移参照物的方所成分的组合。

我们将例（1）-例（6）中路径与方所成分的组合情况归纳如表 2-2：

表 2-2 路径与方所成分的组合情况

路径类型		方所成分
离散型路径		住宅、办公室、宿舍、公园、土坡、屋里、井里、他、自己家中、家、石桥、山、树上、校内、写字台上、金鱼港十三号（地名）、“美丽世界”（地名）、池塘中、暖气管子上、祖国、村
连续型路径	指针	公路、他、石壁、码头、嘴
	趋势	（跟）他身后、（顺）脚步、（跟）她后面、（往）下、（随）风、（沿）石阶、（沿）河岸、（跟）母羊

我们发现，能和离散型路径组合的方所成分主要有三种：①场所词（“住宅、办公室、宿舍”等）；②普通名词（“他、石桥”等）；③场所词/普通名词+方位词（“屋里、井里、自己家中”等）。连续型路径和方所成分的组合情况还会受其下位类型的影响，指针连续型路径的组合情况同离散型路径相似，但趋势连续型路径表示跟随时一般和指代可移动物体的普通名词（“他身后、风、母羊”等）搭配，表示描摹（顺着、沿着……）时一般和可以被认知为带有线性通路且“无界”的普通名词（“石阶、河岸”以及“绳索、轨道”等）搭配，表示方向时一般和方向词（“下”以及“前、后、东、南、里、外”等）搭配。

值得注意的是，虽然能和指针连续型路径搭配的方所成分与离散型路径相似，但从语义角度来说指针连续型路径所搭配的方所成分未必是位移的终点，该方所成分所指代的位移参照物并没有被包含在位移的过程中，可对比例（7）中的 a 和 b 以及例（8）中的几个例句。

（7）

- a. 飞往纽约的飞机在途中被恐怖分子劫持了。（自拟）
- b. ?? 飞到纽约的飞机在途中被恐怖分子劫持了。（自拟）

（8）

- a. 他聚精会神地观察了一会儿，见山上没有动静，才慢慢地向山脚接近。（魏巍《东方》）
- b. 他见山上没有动静，才慢慢地接近山脚。（自拟）
- c. ?? 他见山上没有动静，才慢慢地接近到山脚。（自拟）

（7a）为离散型路径，（7b）为指针连续型路径。在（7a）中，“纽约”并不在“飞机”实际的位移过程中，而（7b）中“飞机”的位移已经涵盖“纽约”，因此与“在途中”的组合就显得有些不自然。而在例（8）中，“接近”具有“无限趋近”的含义，因此与离散型路径组合受限。

### 2.2.2.3 小结

根据上文内容，我们将离散型路径和连续型路径的异同整理为表 2-3。

表 2-3 离散型路径和连续型路径特征的对比

		构成要素	组合关系		
			动量成分	时量成分	方所成分
离散型路径		基准点+基准点 (表经过时两个基准点重合)	×	外部时量	场所词; 普通名词; 场所词/普通名词+方位词
连续型路径	指针	基准点+方向	内部动量	内部时量	场所词; 普通名词; 场所词/普通名词+方位

					词
	趋势	基准点+方向	内部动量	内部时量	（跟随）表示可移动物的普通名词； （描摹）带线性通路的“无界”普通名词； （方向）方向词

### 2.2.3 复合路径

路径可以按照构成要素分为离散型路径和连续型路径，连续型路径又可根据语义分为指针连续型路径和趋势连续型路径，不同类型的路径表现出各自的特征。但现实中的位移事件通常是复杂的，我们在描述一个位移事件可能会遇到需从多个侧面描述同一个路径的情况，由此便涉及到路径组合的问题。如，“他们由架子车夫带路，步行到周家口，又由周家口向西到漯河市（王火《战争和人》）”中“由周家口向西到漯河市”位移的路径就由一个“由周家口到漯河市”的离散型路径和一个“由周家口向西”的连续型路径复合而成。

路径的组合方式共有四种，分别如例（9）-例（12）所示。

#### （9） 离散型+离散型

这个被民间演绎成传奇的才子，在他二十七岁的那一年，由苏州出发，经运河到杭州，再经富春江到新安江，复由兰溪过龙游至衢州。（《人民日报》2017年02月01日）

例（9）中的一整套位移动作由三个简单的位移事件构成，三个简单位移事件的路径都是由两个离散型路径复合而成的。由于离散型路径是由两个基准点确定一条路径，而在一个简单的位移事件中不会同时存在两个原点和两个终点，因此这类复合路径一般是由“原点+经过点+终点”的方式构成的。其中经过点路径一般由“经、由”等组成的介词结构指示，终点一般由带路径终点的位移动词“到、至”等充任的主要动词或补语指示。

#### （10） 连续型+连续型

- a. 当一个产业的市场需求达到饱和以后，增长速度就会随着需求下降而下降，直至零增长，甚至负增长。（人民日报 2001年01月16日）
- b. 照习惯我是对准日出方向，沿海岸往东走。（沈从文《水云》）

- c. 一次，他和一个同志跟汽车往山上拉沙子。（《人民日报》1969年08月04日）
- d. 与他道别后，我沿着溪流往村里走，水碓声在我身后渐渐消失。（《人民日报》2017年02月15日）
- e. 现在，陈文洪，我命令你率领部队立即向监狱前进！（刘白羽《第二个太阳》）
- f. 夕阳迅速地往地平线落下，透过枝丫，她看见天空一片艳丽的金红色。（巴拉·卡特兰《俏佳人》译本）

两个连续型路径构成复合路径时，形式较为多样，既可以是如例（10a）、（10b）的“趋势+趋势”的形式，如例（10c）、（10d）的“趋势+指针”的形式，也可以是如例（10e）、（10f）的“指针+趋势”的形式，但组合的顺序一般为：（跟随/描摹）趋势 > （向/往）趋势/指针 > （位移动词）趋势。

（11） 离散型+连续型

- a. 只见队伍人数很多，正通过棚户区向西走。（王火《战争和人》）
- b. 红一方面军的一、三军团和四方面军的两个军组成右路军，在毛主席、党中央直接领导下，绕过松潘，通过草地向班佑前进；由红四方面军的主力 and 红一方面军的五、九军团组成的左路军，经草地向阿坝、班佑一带前进，朱德总司令就在这一路。（《人民日报》1977年08月11日）

例（11）是离散型路径置于连续型路径之前的情况，但由于“句法单位的相对次序和它们所表示的概念领域里的状态的时间顺序存在对应关系”（戴浩一，1988），指示路径的终点的成分一般出现在位移表述的最后，因此“离散型+连续型”复合路径中处于前置位置的离散型路径一般表示经过点而非终点。

（12） 连续型+离散型

- a. 这家伙走了六千里，由江西到西藏边界，又随八路军到过西北。（林语堂《风声鹤唳》）
- b. 古城墙向前一直延伸到山脚下。（自拟）
- c. 经常能看到，一团乱草从他肚子里涌上来，沿着咽喉回到口腔，他便眯着眼睛咀嚼，嚼得津津有味，嘴角上挂着白色的泡沫，嚼够了，一抻脖子，咕噜一声咽下去。（莫言《丰乳肥臀》）
- d. 跟我穿过花园。（约翰·康诺利《失物之书》译本）

- e. 师爷的目光在她的脚上停顿的时间很长，使她的心从云端跌落到深潭。（莫言《檀香刑》）

连续型路径既可以由表示跟随或描摹的介词结构表示，如例（12a）-（12d）；也可以由“跌落、上升”等位移动词表示，如例（12e）。离散型路径除了可以由表示终点的位移动词指示之外也可以如例（12d）所示，由表示经过点的介词结构充任。

以上讨论的是由两个路径组成的复合路径，此外，复合路径也可由三个或三个以上路径复合而成，如下面这些例子：

（13）

- a. 在下飞机活动后，血栓脱落，随血流经右心室到达肺动脉并在此形成栓塞，即急性肺栓塞。（《人民日报》2016年02月05日）
- b. 天星挺不情愿地跟着姑妈往东厢房走去了。（霍达《穆斯林的葬礼》）
- c. 苏联……使它的太平洋舰队由其本土海参崴南下经过越南水域向前推进到暹罗湾，威胁美国、日本和西欧重要战略物资的海上运输线。（《人民日报》1979年03月25日）

例（13a）包括一个“随血流”的连续型路径和“经”、“到达”两个离散型路径。例（13b）包括“跟”、“往”和“去”三个连续型路径。例（13c）的组成较为复杂，它包括“南下”、“向”、“推进”三个连续型路径和“经过”、“到”两个离散型路径。当多个单纯路径融合为复合路径时，内部各单纯路径的排列顺序与认知概念中的状态顺序相对应，即路径的排列顺序与位移主体的位移动作和位置在时空中的排列顺序相关，指示路径原点的语言单位前置，指示路径终点的语言单位后置，表示经过点或跟随、方向等的语言单位按照其在位移过程中的空间顺序顺次排列。

## 2.3 路径的表达方式

### 2.3.1 表达路径的四种方式

第一章中已经说到，汉语表达路径的方式较为多样，既可由单个位移动词表达路径，也可用动补结构的补语或介词结构表达路径，而正是路径表示的多样性使得研究者们在对汉语的类型归属进行划分时产生一些分歧。

我们在本章第2.2节中根据构成要素将路径分成了离散型路径和连续型路径两种，并且简单讨论了二者异同。在讨论过程中我们发现，汉语不仅表达路径的方式较为多样，而且路径表示方式和路径特征之间的对应也并非一对一的关系，如“向/往”等组成的介词

结构既可以表示指针连续型路径，如“向终点”，也可以表示趋势连续型路径，如“向前”；又如，介词结构“向前”所示的路径又与位移动词“前进”相同；“到”一般用来指示路径的终点，但它在如“随八路军到过西北”的结构中作主要动词使用，而在“推进到暹罗湾”这样的结构中又作补语使用。因此我们有必要对汉语路径的表达方式和各表达方式的特征、使用情况进行总结和分析。

有研究者指出，汉语位移表述中指示路径的成分既可以是主要动词也可以是动词的附属成分，且一个位移事件能用何种成分指示路径受该事件是自主位移事件还是致使位移事件影响，这里的附属成分主要指动补结构中的趋向补语（沈家煊，2003；柯理思，2003；曾传禄，2010）。柯理思（2017）认为，汉语中用来表达路径的语言单位主要有四种：①路径动词（経路動詞）；②介词和表示移动参照物的名字所构成的介词结构（前置詞と移動の参照点となる名詞によって構成される前置詞句）；③介词及其他路径成分构成的路径副词（前置詞およびその他の経路成分からなる経路副詞）；④表示移动状态的动词组合为复杂谓语（包括复合动词）的路径补语（移動様態動詞などの動詞と結合して複雑述語を構成する経路補語）。此外⑤方位词（方位詞）也服务于路径的表达。其中④路径补语指路径动词中表示路径基本图式（スキーマ/schema）的成员语法化而成的语言成分，是一个仅有数十成员的封闭的类别，成员包括表示指示的“来、去”和不表指示的“进、出、上、起、下、回、过”等。而③路径副词是指介词直接和“里”、“上”等方位词组合而成的介词结构，在一般的语法著作或语法研究中，这类结构往往被看作②介词结构的一种，但柯理思认为这类结构中的方位词已经存在一些语法化的倾向，和表示场所的名词并非完全相同，因此将其单独列为一类。

柯理思的上述观点有其合理性，且在进行汉外语言对比的时候能提供一些便利，但其分类的立足点为句法成分，事实上构成②路径介词结构和③路径副词的语言单位均为介词结构，且汉语介词结构的构成具有内在的一致性。因此，我们从语言单位的角度出发对表达路径的方式进行分类，我们认为汉语表达路径的方式有四种：①单用的位移动词；②动补结构；③介词结构；④名词性成分。

### 2.3.2 四种表达方式的语义和使用条件

我们在 2.3.1 中指出，汉语中表达路径有位移动词、动补结构、介词结构和名词性成分四种方式。四种表达方式在句中的位置各不相同，所表示的路径也各自有不同的特征。接下来我们将结合第 2.2 节中有关路径类型的内容简要讨论四种路径表达方式的语



义特征、句法位置和使用条件。

### 2.3.2.1 单用的位移动词

位移动词单独充当谓语表达位移事件路径时，要求该动词的语义组成中带有路径成分。并非所有能够在位移事件中使用的动词都能单独充当位移动作的谓语，有些单纯描述位移状态的词（如“跳、翻、靠、垂”）及描述致使位移事件中致使动作的词（如“扔、拿、搬、带”）必须和能够表达路径的介词结构或补语（少数情况下也可以是名词性成分）组合使用，仅有一些词在口语条件下表示到达时可省略“到”，可对比例（14）和例（15）：

（14）

- a. 鹿兆鹏从秋千上跳到地面时，人们正掐着鹿子霖的鼻根救命哩……（陈忠实《白鹿原》）
- b. 饶是这样，还是有人翻进墙来，混战着。（司马中原《狂风沙》）
- c. 开枪的烂仔没跑远，被别的警察抓住，毒打一顿，反铐上扔进警车。（王朔《橡皮人》）
- d. 下地劳动，工具也不往家里拿，就在地里搁着；可多少年来，全村没有发生一次失盗事件……（路遥《平凡的世界》）

（15）

- a. \*鹿兆鹏从秋千上跳地面时，人们正掐着鹿子霖的鼻根救命哩……（自拟）
- b. \*饶是这样，还是有人翻墙来，混战着。（自拟）
- c. \*开枪的烂仔没跑远，被别的警察抓住，毒打一顿，反铐上扔警车。（自拟）
- d. ? 下地劳动，工具也不拿家里，就在地里搁着……（自拟）

例（15）为例（14）去掉表达路径的“到、进”等动词或介词结构而得出。例（14）中的各小句在去掉表达路径的成分后句子变得不太自然，仅有（15d）虽然在一定条件下符合语法，但（14d）中的路径为指针连续型路径，（15d）为指示终点的离散型路径，二者的语义和语法组合规律都存在差异。而例（16）中带路径成分的位移动词则可以单独充当谓语：

（16）

- a. 所以他一上船，就把这些乐器托付给了船长。（老舍《鼓书艺人》）
- b. 刚刚出大厅门，他就走了。（张恨水《金粉世家》）
- c. 小钢炮在前面一面打冲锋枪，一面前进。（巍巍《东方》）

- d. 但为时已晚，淤泥里噗噗地冒出有硫磺味的气泡，好像不是小何的身体下陷而是淤泥在上升。（莫言《丰乳肥臀》）

单独使用的位移动词所能表示的路径与动词自身的语义特征有关，例（16a）为标记终点的离散型路径，例（16b）是标记原点或经过点的离散型路径，而例（16c）和（16d）中的两个路径均为趋势连续型路径。

需要注意的是，并非所有带路径成分的动词均可单独使用，“升、降、落、掉”等在语义上均带有向上或向下的路径，但这些词除“升”可产出“升天”、“升空”等有限的组合之外，其余均只能在动补结构中充当主要动词，如“降到”、“落入”等。有关位移动词中路径成分性质的内容，我们将在第三章中展开讨论。

### 2.3.2.2 动补结构

动补结构表达路径时，主要由其内部的趋向补语实现路径表达功能。在动补结构中作趋向补语的语言成分一般是位移动词，且数量有限，仅有“上、下、到、回、进、入、出、过、来、去”及由这些成分两两组合而成的结构“上来”、“回到”等。

一般来说能够充任动补结构补语的词都可以单独用作谓语中的主要动词表达路径，但我们将其单独设为一类的原因在于动补结构表达路径和位移动词相比具有一定特殊性：第一，能够充任补语的动词是一个封闭的集合，其成员数量有限，有些可单用的动词不能充当补语，如“进入”、“到来”；第二，有时动补结构中的主要动词和其补语共同承担表达路径的功能，如“回到家”中的“回到”、“落入凡间”中的“落入”，此时的路径存在一定复合路径的特征；第三，表指示的“来”、“去”单用时和充当补语时所表示的路径的性质存在差异。

动补结构表达路径的例子如例（17）所示：

（17）

- a. 过铁道时，他先将橘子散放在地上，自己慢慢爬下，再抱起橘子走。（朱自清《背影》）
- b. 从山顶下到深 47 米的火山口底部，到处可看到火山渣、浮岩和火山弹。（《人民日报海外版》2014 年 02 月 25 日）
- c. 整理了一下所有东西，把一封退学的信交到门房，又即刻同看护回到医院去了。（沈从文《冬的空间》）
- d. 他用脚尖儿轻轻走进去，坐在靠近床的椅子上，静悄悄的等着。（林语堂《京华烟云》）

例（17）各小句中动补结构的趋向补语均表达位移路径，但各小句中路径的特征和承担路径表达的句法成分并不完全相同。（17a）中，动补结构的主要动词“爬”仅表达位移动作的状态，补语“下”单独承担路径的表达，且该路径为趋势连续型路径。（17b）的动补结构“下到”中，主要动词“下”和补语“到”均承担路径表达的功能，该路径由一个指示方向的趋势连续型路径和一个指示终点的离散型路径复合而成。（17c）中存在两个单纯的位移事件，其中“交到”为致使位移事件的路径，“交”表达致使动作，“到”表达位移路径。（17c）同（17a）的区别在于，（17c）是致使位移事件，动补结构中主要动词“交”和补语“到”分别描述施动主体和位移主体两个主体的动作，而（17a）是自主位移事件，动补结构中的“爬”和“下”描述的均是位移主体的动作。（17c）中的第二个路径“回到”也是由两个路径复合而成的，主要动词和补语均表达路径，但它的路径中又复合了表指示的“去”。不同于（17c）中将指示路径置于标记位移参照物的“医院”之后，（17d）直接由包含指示义的“进去”充当补语。

动补结构的内部构成较为复杂，既可以是表移动致使因素或移动状态的动词与路径动词的组合，也可以是两个路径动词的组合，有时还可以再在动补结构后添加表指示的“来、去”。另外，动补结构中承担表达路径功能的成分也随构成的不同而改变，既可以只由补语表达路径，也可以由主要动词和补语共同表达路径。此外，不同的路径动词及不同的组合情况也会影响所表路径的性质，可对比例（18）中的两个例句：

（18）

- a. 那些拉大网的人有一多半是随叫随到的我一开始就想随父亲到海上，去看他们怎样把那个了不起的大网撒进海里，把一堆又一堆的鱼拉上岸。（张炜《你在高原》）
- b. 她把毛巾被拉上来，盖住眼睛。（孙力、余小惠《都市风流》）
- a'. \*把一堆又一堆的鱼拉上岸一点。（自拟）
- b'. 她把毛巾被拉上来一点，盖住眼睛。（自拟）

例（18）中的 a 句和 b 句的位移事件均用“拉”作主要动词表示致使位移的致使动作，本身不带路径语义，均由补语单独承担路径表达功能。两句区别在于 a 句的补语为“上”，b 句的补语为“上来”。我们将两个例句分别添加表达动量的“一点”构成句 a' 和 b'，可以发现动补结构“拉上来”可与动量成分组合，而“拉上”则不能被表示动量的成分修饰。因此动补结构表达的路径既可以是离散型路径也可以是连续型路径，具体需要根据结构的组成成分判断。有关动补结构的构成方式和其路径表达方式的内容，我们将在第四章中

详细说明。

### 2.3.3.3 介词结构

这里的介词结构主要是指由“向/往/经/过/跟”等介词和普通名词或方所成分组成的表示位移方向、场所或跟随、附着对象的语言单位。介词结构表示的路径可以根据其语义分为三个大类，即方向、跟随和描摹，分别如例（19）-（21）所示：

#### （19） 方向

- a. 谁知他排在队伍后面，人越往前挪，心里就越难受。（王旭烽《茶人三部曲》）
- b. 我独自穿过大厅向刘炎走去。（王朔《玩的就是心跳》）
- c. 宽阔的神道，从脚下继续延伸，过了碑亭，就折而向西。（刘斯奋《白门柳》）
- d. 他觉得自己也像驾了一叶扁舟，驶向永远到不了的地方。（张洁《沉重的翅膀》）

#### （20） 跟随

- a. 我接一句：“月影随人过草塘。”（张恨水《春明外史》）
- b. 全体异口同声说要加入，还包括一些中国卫兵，他们跟首领回到山区，带了几十支手枪、一些自动步枪和弹药。
- c. 我缓缓地跟着背影来到了二楼，才看清了那是一个高大的男子，似乎不像是清远。（蔡骏《荒村归来》）
- d. 我们要紧跟时代的步伐，尽快完成革新。（自拟）

#### （21） 描摹

- a. 我都能感觉到有股毒液从心脏沿着血管蔓延到全身。（张贤亮《灵与肉》）
- b. 敌人以为我走了，就又编起队来贴着云层向前飞行。（《人民日报》1952年12月24日）
- c. 躺回原位时，泪水已顺着耳根滴到了榻榻米上。（吴君《十七英里》）

例（19）是表示方向的介词结构。其中与介词组合的名词既可以是方向词也可以是标记场所的名词。这类介词结构有时可以置于主要动词之前，如例（19a）-（19c），有时可置于主要动词之后，如例（19d）。值得注意的是，虽然“介词+场所词”置于主要动词之后时，其结构和语义都与动补结构相似，但和动补结构不同的是，介词结构所表示的路径有连续型路径的特征，因此“介词+场所词”结构表达路径的实质是用场所相对于

原点的方位指代方向，是指针连续型路径。

例（20）是表示跟随的介词结构，此时同介词组合的一般是表示移动中的物体的名词或其构造的一部分（如 c 句中的“背影”和 d 句中的“步伐”）。表示跟随的介词结构只能置于主要动词之前。

例（21）所示为表示描摹的介词结构。我们这里所说的“描摹”是指位移主体将某一可被认知为线形的事物本身（如楼梯、桥、海岸等）或某一有边界的二维图形、三维空间物体的轮廓作为自身的位移轨迹进行移动。表示描摹的介词结构只能置于主要动词之前。

此外，介词结构在位移表述中不仅能够独立承担表达路径的功能，也可以标记位移的原点或经过点，和带路径成分的位移动词、动补结构或其他介词结构共同组成路径。虽然单用的动词“下”、“出”或由它们在动补结构充当补语时也可以标记位移原点，但它们只能用在特定方向的位移中，而介词结构标记原点时更为自由，几乎所有的位移原点都可用“从”类介词构成的介词结构标记。

#### 2.3.3.4 名词性成分

名词性成分可作宾语同不带路径成分的位移动词组合，表达位移事件的路径。名词性成分表达路径有两种情况，一种是该名词的所指在认知中具有线性特征，可以提供位移通路或描摹位移路线，如“走钢丝、跑操场、穿山洞”等；另一种是该名词的所指被直接用作位移的终点或经过点，而这种情况带有一定惯用语色彩，如“闯红灯、闯关东”。具体如下面的例子：

（22）

- a. 自你走后，牺盟会一次会也没有开成，人家小喜要训练自卫队，领得一伙人，白天在地里跑圈子，拔慢步，晚上集合在庙里睡觉，把全村的年轻人弄得连觉也不得睡，再没有工夫干别的事。（赵树理《李家庄的变迁》）
- b. 他说曾经在黑暗中锻炼目光，所以在夜间走山路，毫无困难。（林语堂《京华烟云》）
- c. 我以为他是说着玩玩的，后来另一位朋友告诉我，这位经理现在果真热衷于跑书店，已张罗起了一个很像样子的书房。（余秋雨《文化苦旅》）
- d. 不难想象，这一类真实的故事可以没完没了地讲下去，而一切走西口、闯全国的山西商人，心头都埋藏着无数这样的故事。（余秋雨《山居笔记》）
- e. 来到家门口儿了，还不赶紧地奔家，逛什么上海？（霍达《穆斯林的葬礼》）

例(22)中,(22a)和(22b)是由带线性特征的事物提供位移通路或路线的情况,(22c)-(22e)则是将名词所指的场所视为位移的终点或经过点。从语义上说,将名词的所指作为终点的情况有时可以认为是省略了标记路径终点的“到”或“在”,如“飞北京、掉地上”和“飞到北京、掉在地上”。但实际上这类组合中的名词性成分不仅能指称位移的终点,而且能指称位移通过、发生的场所,例(22a)、(22b)以及上文提到的“走钢丝、跑操场”等均属此类。同时,即使名词性成分是指示终点的,动词后也不总能添加补语“到”,可对比例(22c)-(22e)和例(23)。

(23)

- a. \*这位经理现在果真热心于跑到书店。(自拟)
- b. \*一切走到西口、闯到全国的山西商人,心头都埋藏着无数这样的故事。(自拟)
- c. \*来到家门口儿了,还不赶紧地奔到家,逛什么上海?(自拟)

总的来说,名词性成分表达路径和其他三种方式表达路径在语法特征上最大的区别在于名词性成分充当的是句子的宾语,在有些语法著作中被视为表处所的中性宾语(也称“当事宾语”)。而其表达路径的语义基础在于名词所指事物在认知中的线性形状或名词所指事物在客观世界中与位移主体所处原点间的位置关系,其中以线性形状为基础的构成趋势连续型路径,以位置关系为基础的构成离散型路径。但这类用法对名词有一定要求,多属于惯用表达或仅在一定语境条件下才能成立,能产性有限。

### 2.3.3.5 小结

根据上面的分析,我们将由四种路径表达方式的特征总结为表2-4。

表 2-4 四种路径表达方式的特征

	构成成分	句法位置	路径类型
单用的位移动词	路径动词	主要动词	离散型路径或趋势连续型路径(视动词语义)
动补结构	动词+路径动词	主要动词及其补语	离散型路径
	动词/动补结构(+场所名词) +(指示)路径动词		指针连续型路径

介词结构	方向	“向/朝/往……”+普通名词/ 场所名词/方向词	主要动词前 或主要动词 后	指针连续型路径
	跟随	“跟/随……”+普通名词	主要动词前	趋势连续型路径
	描摹	“贴/沿/顺……”+普通名词/ 场所名词	主要动词前	趋势连续型路径
	标记 起点	“从/由/自……”+普通名词/ 场所名词	主要动词前	视其搭配成分的语义
名词性成分	位置 关系	场所名词	宾语	离散型路径
	形状	指称线性物体的名词		趋势连续型路径

## 2.4 本章小结

本章我们分析了汉语位移表述中路径成分的构成、类型和表达方式。

路径由原点、终点（二者合称“基准点”）以及方向三个构成要素和动量、时量两个附加要素构成。构成要素是路径的“部件”，组成路径本身，是路径成立的必要条件。附加要素限定时空中具体位移事件的“量”，在语言表达中是可选要素。

但在实际使用时，路径的三个构成要素也并非必须同时出现。在一个位移事件中，只要确定两个基准点或一个基准点与方向就可以确定一个路径，而其中原点信息一般可省略。两个基准点（原点和终点）构成的路径存在自然的终止点，因此是“有界”的，我们将其称为“离散型路径”；一个基准点（原点）和方向构成的路径是“无界”的，我们将其称为“连续型路径”。连续型路径又可根据语义分为指针连续型路径和趋势连续型路径两种，前者是指向某一方向的位移路径，方向既可以直接由方向词指示，也可以借由某场所与原点相对的空间方位关系指示；后者是不断满足某一趋势的位移路径，包括跟随（跟随另一移动中的物体）和描摹（沿通路或物体轮廓移动）两种。路径是否“有界”不仅会影响路径和动量、时量成分的组合，也会影响路径成分和表示参照物的方所成分的组合。此外，一个位移事件的路径可能由数个单纯的路径复合而成，复合路径中各单纯路径的排列与位移过程的时间或空间顺序相关。

汉语表达路径主要有四种方式：单用的位移动词、动补结构、介词结构和名词性成

分。不同的路径表达方式在构成、句法位置和所示路径的类型方面存在差异。单用的位移动词做句子的主要动词，所示路径类型和动词自身的词义有关，但仅有带路径成分的动词能够单用表路径。在表示位移的动补结构中，主要由补语（包括出现在方所词之后的指示动词“来”或“去”）承担路径表达功能，如果主要动词也包含路径成分，则主要动词中的路径成分也会构成位移路径的一部分。能够充任动补结构补语的一般是带路径成分的位移动词，此时补语所示的路径的特征与作补语的动词的词义相关。介词结构表示的路径可根据语义分为方向、跟随和描摹三类，分别表示朝向某个方向的位移、跟随某移动中的物体进行位移和沿着某条通路或某物轮廓的位移。三类介词结构中所用的介词不同，对介词后的名词性成分也有不同要求，但三者都是连续型路径。表示位移方向的介词结构既可出现在主要动词之前也可出现在主要动词之后，但表示跟随或描摹的介词结构一般只出现在主要动词之前。值得注意的是，位移表述中的介词结构除了可以指示路径的方向外还可以标记路径的起点。有时，充当位移表述宾语的名词性成分也具备单独表达路径的功能。但这种用法对名词的性质有要求，且有许多组合已经呈现出惯用语化的倾向，能产性有限。



## 第三章 位移动词的分类与性质

### 3.1 位移动词的分类及相关研究

我们在此前多次使用了“位移动词”及“位移动词中的路径成分”等概念，在第二章中也已经指出，一部分包含路径成分的位移动词可充当句子的主要动词，单独表达路径。本章我们将围绕位移动词展开讨论，内容包括对相关研究进行梳理，对本文中所使用的“位移动词”的概念进行界定，依照语义成分中路径的类型将位移动词分类并结合具体的例子分析不同类型的位移动词在位移表述中用法和性质上的差异，最后我们会讨论几个和位移动词“到”有关的问题。

我们发现，汉语位移动词和表示处所的名词性成分的搭配有一定的限制。如例（24）和例（25）所示：

（24）

- a. 夏衍是到医院看我的。（冰心《冰心全集第七卷》）
- b. 男娃娃就要到山里学干活。（路遥《平凡的世界》）
- c. 世钧笑道：“大概就是我回来这两天，天天出去爬山，晒的。”（张爱玲《半生缘》）
- d. 前面黑暗里又发出了绿色的火光，这股火光升到天空中并不落下，却在黑暗里盘旋，接连地变换着颜色，最后突然不见了，很快地，使人不知道它落在什么地方。（巴金《家》）

（25）

- a. 夏衍是到医院里看我的。（自拟）
- b. \*男娃娃就要到山学干活。（自拟）
- c. \*世钧笑道：“大概就是我回来这两天，天天出去爬山里，晒的。”（自拟）
- d. \*前面黑暗里又发出了绿色的火光，这股火光升天空中并不落下，却在黑暗里盘旋，接连地变换着颜色，最后突然不见了，很快地，使人不知道它落什么地方。（自拟）

例（25）中的四个例句分别是由例（24）中的例句经过成分替换得出。对比（24a）和（25a）可以发现，在动词“到”和位移参照物“医院”组合时，无论方所词“里”是否出现，

句子均成立。但在由“山”充当位移参照物时，则必须有方位词“里”的参与，如例（24b）和（25b）所示。但同为由“山”充当位移参照物的情况下，在例（24c）和（24d）中，如果将动词换为“爬”，则不可加入表示方位的“里”。而对比（24d）和（24e）可以发现，“升”和“落”必须和“到”、“在”组合后才能后接表示方所的成分。由此可见，在位移事件中，动词和标记位移参照物的名词性成分的搭配并非完全自由，而是受某些因素的制约。表 3-1 显示了“走、上、升、到”四个和位移相关的动词同“山、山顶、黄山”四个名词性成分的组合情况。

表 3-1 位移事件动词和名词性成分的组合情况

	山	山顶	黄山
走	*走山	*走山顶	*走黄山
上	上山	上山顶	上黄山
升	*升山	*升山顶	*升黄山
到	*到山	到山顶	到黄山
走到	*走到山	走到山顶	走到黄山
上到	*上到山	上到山顶	?上到黄山
升到	*升到山	升到山顶	?升到黄山

在四个和位移相关的动词中，“走”既不能和“山”搭配，也不能和“山顶”、“黄山”搭配；“到”虽然不能和“山”搭配，但可以 and 表示更具体的地点的“山顶”以及表示地点的专有名词“黄山”搭配；“上”和三者都可以组合，而和“上”语义相近的“升”的情况却恰恰相反，和三个名词都不可直接组合，仅有在后接补语“到”时才能同“山顶”搭配。不仅是“升”，“走”和“上”在和“到”组合为动趋结构后，同名词性成分搭配的情况也发生了变化。

方美丽（2004）将位移动词分为状态性位移动词（樣態性移動動詞）和方向性位移动（方向性移動動詞）词两类并总结了不同语义类型的位移动词和方所词的搭配规律，其中的状态性位移动词就是我们所说的不含路径成分的位移动词，而方向性位移动词就是含路径成分的位移动词。方美丽的研究表明，不同语义特征（是否含有方向性及含有何种方向）的位移动词同方所词组合的规律不尽相同。这为探究路径成分对动名组合的影响提供了宝贵的借鉴，但“样态”、“方向”二分法不能完全解决位移动词的分类问题。

我们发现，“升、降、落、掉”也带有路径信息（方向），但它们语法特征和同样带有路径信息的“回、去、到”等不同。例（24a）和（24b）中，“到”可作为唯一的动词性成分单独和方所成分组合表达路径，例（26）中则是“回、过、去”单用的例子。

（26）

- a. 回家乡后他多了两重资格，一是住过上海，二是作过军官。（沈从文《主妇集》）
- b. 就在那时候我记得火车慢慢地由站台拖出，一程一程地前进，我也随着酸恹的诗意，那“车的呻吟”，“过荒野，过池塘，……过噤口的村庄”。（林徽因《纪念志摩去世四周年》）
- c. 去医院，我要去医院看看娘，我放不下心。（周大新《湖光山色》）

和上面这些位移动词不同，“升、降、落、掉”等则不能直接和名词性成分组合，只能在和由“到、回”等充任的补语组合后才能与方所成分组合，可对比（24d）和（25d）中的“升”和“落”。例（27）中各小句的情况也与此类似。

（27）

- a. 岳锐一下子如同掉进一口黝黑干枯的井里。（刘玉民《骚动之秋》）
- b. \*岳锐一下子如同掉一口黝黑干枯的井里。（自拟）
- c. 这种瘟疫先袭击人的大脑，然后下降到胃部，再从胃部进入内脏，最后蔓延到小腿。（夏多布里昂《墓畔回忆录》译本）
- d. \*这种瘟疫先袭击人的大脑，然后下降胃部，再从胃部进入内脏，最后蔓延到小腿。（自拟）

史文磊（2014）认为，方式动词中有一种同时对方式和路径进行编码的“综合性动词”，和综合性动词相对应的是分析性动词，即只对方式或路径其中一种进行编码的动词。李天宇（2020）认为综合性动词是汉语中特有的现象，应在归属上独立于方式动词和路径动词。虽然两位研究者对综合性动词究竟应该归属在方式动词中还是独立成类的问题存在分歧，但他们都认同汉语中除了存在只对方式进行编码的方式动词和只对路径进行编码的路径动词之外，还存在同时对路径和方式进行编码的第三类动词。

Liu（2015）等将汉语中表达自主位移的动词性成分（包括动词和介词）的语义成分分为方式（Manner）、轨迹（Route）、方向（Direction）、终点（Endpoint）和指示（Deictic）五种，并归纳了动词的语义成分与动词组合规律间的关系。各动词性成分中包含的路径信息如图 3-1 所示。

图 3-1 Liu (2015) 的位移动词的语义构成

Appendix 1: Self-motion lemmas categorized with the semantic components					
	<u>Manner(M)</u>	<u>Route(R)</u>	<u>Direction(D)</u>	<u>Endpoint(E)</u>	<u>Deictic</u>
M	<u>Verbs</u> <i>fēi</i> 飞, <i>pǎo</i> 跑, <i>zǒu</i> 走, <i>tiào</i> 跳, <i>yuè</i> 跃, <i>pá</i> 爬, <i>gǔn</i> 滚, <i>fān</i> 翻, <i>yóu</i> 游, <i>piāo</i> 飘, <i>piào</i> 漂, <i>chōng</i> 冲, <i>chuāng</i> 闯, <i>jī</i> 挤, <i>liū</i> 溜, <i>zhuī</i> 追, <i>gǎn</i> 赶, <i>táo</i> 逃, <i>bēn</i> 奔, <i>pū</i> 扑, <i>shǎn</i> 闪, <i>qí</i> 骑, <i>kāi(che)</i> 开(车), <i>jià</i> 驾, <i>shǐ</i> 驶, etc.				
M+R	<u>Verbs</u> <i>liú</i> 流, <i>sù</i> 溯, <i>guàng</i> 逛				
M+R+D	<u>Verbs</u> <i>pān</i> 攀, <i>dēng</i> 登, <i>yóng</i> 涌				
R		<u>Verbs</u>	<u>R-Marking verbs</u>	<u>Markers</u>	
		<i>yí</i> 移,	<i>guò</i> 过, <i>yuè</i> 越	<i>jīng</i> 经	
R+D	<u>Verbs</u> <i>luò</i> 落, <i>tùi</i> 退, <i>shēng</i> 升, <i>jiàng</i> 降, <i>diào</i> 掉, <i>zhùì</i> 坠, <i>dié</i> 跌				
R+D+E	<u>Verbs</u> <i>huí</i> 回, <i>fǎn</i> 返, <i>guī</i> 归				
D			<u>Verbs</u>	<u>Markers</u>	
			<i>qǐ</i> 起	<i>wǎng</i> 往, <i>xiàng</i> 向	
D+E	<u>Verbs</u> <i>jìn</i> 进, <i>chū</i> 出, <i>shàng</i> 上, <i>xià</i> 下, <i>lí</i> 离				
E	<u>E-marking verbs</u> <i>dào</i> 到, <i>zhì</i> 至, <i>rù</i> 入				
Deictic	<u>Verbs</u> <i>Lái</i> 来, <i>qù</i> 去				

上述研究均表明，不同位移动词中包含的和路径有关的语义成分存在差异，既有只包含方式语义的，也有只包含路径语义的或同时包含方式和路径两种语义的，而位移动词语义成分中的路径信息会影响其在位移表述中的使用情况。

我们根据位移动词的语义中是否包含路径信息及所含路径的类型将位移动词分为四类：无路径位移动词、连续型路径位移动词、离散型路径位移动词和指示路径位移动词。下面将分别对这四类位移动词的路径语义、用法和特征进行说明。

### 3.2 汉语位移动词的分类

#### 3.2.1 无路径位移动词——状态位移动词

无路径位移动词是指语义成分中仅包含位移方式或位移致使动作而不包含路径成分的位移动词。它仅能表达“位移”的抽象事实并描述和位移相关的附加信息（自主位移事件中位移的方式、状态或致使位移事件中的致使动作即位移发生的原因）。从语义上

来说，这类位移动词中描述自主位移事件的成员与方美丽（2004）提到的“状态性位移动词”、史文磊（2014）、李天宇（2020）研究中的方式动词及 Liu（2015）动词分类中仅包含方式（Manner）的动词相同。为便于称说，我们将这种无路径成分的位移动词称为“I类位移动词”。

和其余三类相比，I类位移动词最大的特点是语义中不包含路径成分，一般不能直接接处所词，如表 3-1 中动词“走”和处所词的组合情况。通常情况下，I类位移动词如果要和处所词连用，需要用介词结构引入路径或与路径动词“到”、“去”、“上”等组合为动补结构，如例（28）所示。

（28）

- a. 人们朝着敌人逃跑的方向猛追。（《人民日报》1968年09月08日）
- b. 秀米觉得自己的身体像一片羽毛，被风轻轻托起，越过山峦、溪水和江河飘向一个不知名的地方。（格非《江南三部曲》）
- c. 眼看就要游到河心了。（张炜《你在高原》）
- d. 真是天无绝人之路，老兰的保镖黄豹，正大踏步地扑进会场。（莫言《四十一炮》）

例（28）中的各小句中表位移的成分中的主要动词均为I类位移动词，其中（28a）和（28b）用介词结构与主要动词搭配使用，而（28c）和（28d）用补语位置上的路径动词与主要动词搭配使用。如果去掉例（28）中的介词或补语，直接在I类位移动词后加场所词，成为例（29）的形式，句子则变得不太自然。

（29）

- a. \*人们猛追敌人逃跑的方向。（自拟）
- b. \*秀米觉得自己的身体……飘一个不知名的地方。（自拟）
- c. \*眼看就要游河心了。（自拟）
- d. \*老兰的保镖黄豹，正大踏步地扑会场。（自拟）

需要说明的是，汉语中也存在“他走了”、“我一来他就跑”等用法。从形式上看，这样的用法虽然是只用I类移动动词表达了位移事件的路径，但其中的“走”和“跑”为“离开”、“逃离”义，和仅表移动方式时不同。此外，此时“走”和“跑”本身表示移动方式的语义已经消失。如，“他开着车跑了”（离开、逃离）、“雍和宫怎么走”（去、抵达）中的“跑”和“走”已经失去了原本“奔”、“步行”的意思。这是“跑”、“走”的引申用法，没有此引申用法的“奔、窜”则不能进入这一表达式中。由此我们认为，这一用法下的“走”和“跑”

应当视为路径位移动词，不属于 I 类位移动词。

值得注意的是，位移表述中也存在 I 类位移动词后直接使用场所词的情况，如：

(30)

- a. 日本的工程师一趟又一趟地往长沙飞，手把手地教授软件开发的规范，其认真的程度与加工量的大小简直不成比例。（《人民日报》2002 年 09 月 28 日）
- b. 日本的工程师一趟又一趟地飞长沙，手把手地教授软件开发的规范。（自拟）

例（30b）是将（30a）中由介词结构表示的路径转化为 I 类位移动词直接与方所成分组合的情况。朱德熙（1982）认为，“搁桌上”、“坐椅子上”、“挂墙上”这样的用法是省略了“到”或“在”。但我们认为省略补语“到”或“在”这一解释并不能解决 I 类位移动词使用时的一些语法现象。

第一，并非所有 I 类位移动词后的“到”或“在”均可省略，而在一些情况下我们也很困难确定被省略的成分是否为“到”或“在”。例（28c）以及例（31a）中的“到”省略后句子便不合语法，可参考例（29c）和（31b），而例（31c）去掉“进”后构成的例（31d）也符合语法。

(31)

- a. 石拱桥前边因为有一个急转弯，致使许多车辆经常失控翻到了河中。（郑小驴《少儿不宜》）
- b. \*石拱桥前边因为有一个急转弯，致使许多车辆经常失控翻了河中。（自拟）
- c. 张英才用手摸摸眼镜，说完便钻进房里，片刻后又夹着那本小说出来……（刘醒龙《天行者》）
- d. 张英才用手摸摸眼镜，说完便钻房里，片刻后又夹着那本小说出来……（自拟）

第二，“飞北京”和“飞到北京”在一定语境条件下表达的是不同的语义，二者并不完全等价。例（32）中的 a 和 b 两句虽然都是符合语法的，但（32a）用来询问出发时间（位移动作开始的时间），只能在位移动作开始之前使用，而（32b）有更明确的询问抵达时间（位移动作完成的时间）的含义，在位移动作进行的过程中也可使用。二者语义并不相同，不可替换。

(32)

- a. 你什么时候飞北京? (自拟)
- b. 你什么时候飞到北京? (自拟)

第三, 该现象并非 I 类位移动词所特有, 有时带路径成分的位移动词后的“到”、“在”或其他由路径动词充当的补语也具有类似的特征。如下面这些例子。

(33)

- a. 回到病房后, 我又想老年人为了保护眼睛, 少看电视也好。(巴金《随想录》)
- b. 昨天她和王秋萍在厕所哭了一场, 尽管回病房前洗了好几遍脸, 又站在院子的风中平静了一番, 可她红肿的眼睛也许让他抓到蛛丝马迹了。(迟子建《亲亲土豆》)
- c. 炸弹发出揪心的滋滋声往下落, 一掉进水里, 就溅起混着血的冲天水柱。(老舍《鼓书艺人》)
- d. 一个小孩看到后吓得呼喊: “小明生掉水里啦! 掉水里啦!” (《人民日报》1979年06月08日)
- e. 进入县衙之后, 衙役把他引导到迎客厅。(莫言《檀香刑》)
- f. 如果您是一个通情达理的人, 就不该阻拦俺进县衙。(莫言《檀香刑》)

基于以上三点, 我们认为这类现象并非省略 I 类位移动词后表示路径的“到”或“在”, 而是我们在第二章中提到的用名词性成分表达路径的用法。

我们在第二章中说过, 名词性成分可直接同不带路径成分的位移动词组合, 承担表达位移事件路径的功能。但并非所有名词性成分都可表达路径, 表达路径的名词性成分需满足以下两个条件之一: ①该名词的所指可被认知为线性通路; ②该名词的所指在被习惯性地用作位移的终点或经过点。前者如“走楼梯、钻隧道、(车)开盘山道”等, 后者如“闯红灯、走后门、翻护栏”等。有时根据具体的位移事件, 名词性成分中需要有方位词参与才可成立。如, 在位移涉及边界跨越时, 名词性成分中需要有“里、中、内、外”等方位词的参与。例(31c)、(31d)和例(34)均属于边界跨越位移事件, 但由于(31c)中的名词性成分中带方位词“里”, 因此去掉路径动词“进”后句子仍合语法。但例(34a)去掉“进”后则不合语法。

(34)

- a. 他没有去井边打水漱洗便钻进被窝, 没时间拖延, 得当晚赶到县城, 给融发个电报, 来回四十公里天亮前无论如何赶不回来。(高行健《一个人的

圣经》)

- b. \*他没有去井边打水漱洗便钻被窝，没时间拖延……（自拟）

此外，用名词性成分表示路径时存在使用不平衡的现象，具体表现为，在描述下降和进入的位移事件时，名词性成分表示路径的可接受程度高于描述上升和离开的位移事件，如例（35）中，表示下降的（35b）的接受度高于表示上升的（35d）。

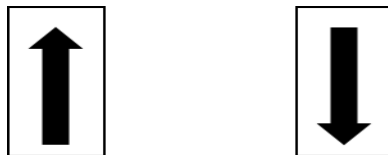
（35）

- a. 大楼离地约三四丈高，一不小心，从上面掉到地上，就得跌坏，岂是当真闹着玩儿？（沈从文《一天》）
- b. 奶奶不言语，脱棉袄的时候，不小心把手电筒掉地上了，玻璃摔碎了。（史铁生《奶奶的星星》）
- c. 两颗绿色信号弹同时升到空中，朝中人民部队紧紧地收缩包围圈，用机枪和自动枪集中射击被包围的美军。（《人民日报》1953年02月24日）
- d. \*两颗绿色信号弹同时升空中，朝中人民部队紧紧地收缩包围圈，用机枪和自动枪集中射击被包围的美军。（自拟）

### 3.2.2 连续型路径位移动词

连续型路径位移动词是指在语义成分中包含连续型路径的位移动词，位移动词中的连续型路径一般是三维世界中“上下/左右/前后”各轴上的方向（汉语中主要是上下方向），我们将这类位移动词称为“II类位移动词”。II类位移动词的意象图式如图3-2所示（实线框为参照物，箭头为路径及路径的方向）。

图 3-2 连续型路径位移动词的意象图式



II类位移动词可按照语法特征分为两组：“上、下、登”等（A组）能单独构成位移事件的路径，可直接与标记位移参照物的方所成分组合；“升、降、落”等（B组）的语义构成中虽然也有方向，但在使用时一般需要后接“到、进、入、出”等组合为动补结构或其他能够表示路径的介词结构搭配。“上升、下降、降落”等双音节动词（C组）在



单独充任谓语时能单独表达位移路径，但在与方所成分组合时仍和 B 组成员相同，需要由路径动词充任的补语或表示路径的介词结构参与。三组 II 类位移动词的语法特征和代表成员如表 3-2 所示：

表 3-2 三组 II 类位移动词的特征及代表成员

	语法特征		代表成员
	单独表达路径	后接方所成分	
A 组	可	可	上、下、登、攀、爬
B 组	不可	不可	升、降、落、掉、坠、涌
C 组	可(仅单独作谓语时)	不可	上升、下降、降落、提高

三组 II 类位移动词的具体用法如例 (36) - (38)。

(36) A 组

- a. 因为找不着人，没人愿意上山。（张贤亮《男人的一半是女人》）
- b. 因车不能多等，卫葑送他们下坡，到瀑布边，汽车夫正舀水冲车，说这水真好，就是石头太滑。（宗璞《东藏记》）
- c. 他一边爬楼梯，一边说：“他们马上就要回去了，他们向我保证过了。（阿来《尘埃落定》）
- d. 月亮上到山顶的时候，老几僵硬地上了路。（严歌苓《陆犯焉识》）

(37) B 组

- a. 重心一下升到了我头顶上，使我很难适应。（王小波《青铜时代》）
- b. 由于邓政委掏枪恐吓犯人，导致犯人掉进冰窟窿，受到了行政处分，降级到分场的牧业中队去放牦牛。（严歌苓《陆犯焉识》）
- c. 秋贤一楞，突然觉得眼里有些湿润的一旋，差点就要涌出眼眶。（韩少功《马桥词典》）
- d. 金菊拐上河堤，下河堤时，大肚子直往前坠，她后仰着身体，踩着滑溜的绿草，小心翼翼地往下挪。（莫言《天堂蒜薹之歌》）

(38) C 组

- a. 赵大锤的豪情壮志，顺着那些刺向云端的高楼攀升。（张洁《无字》）

- b. 粉色的苹果花像雪片一样往下坠落。（张炜《你在高原》）
- c. 我就像上升到了一处山坡上，朝下俯视清楚了湘南乡镇上二三十年来的风云聚会，山川流走，民情变异……（古华《芙蓉镇》）
- d. 一群胆大包天的麻雀降落到我的头上，用坚硬的小嘴，啄食着我大口吞食时进溅到耳朵上的饲料。（莫言《生死疲劳》）
- e. 纸在瓦盆里变成白灰，随着烟气盘旋上升。（莫言《四十一炮》）
- f. 腰椎被勒得巴巴地响，胃里的食物一部分下降一部分上升。（莫言《十三步》）

例（36）是使用 A 组 II 类位移动词的例子，“上、下、爬”在句中都充当表达路径的成分。这类位移动词不仅能后接其他路径位移动词，也可以直接同标记位移参照物的方所成分“山、坡、楼梯”搭配。（此时“上、下”的语义不同于表示位移终点的“上楼顶”、“下田”，“爬”的语义不同于单表位移状态的“婴儿在床上爬”）但直接和 A 组动词组合的方所成分并非位移的终点或经过点，而是承载位移轨迹的场所，因此要求场所名词所指称的为山、楼梯、树等能被抽象为上下维向线性通路的名词。

例（37）中的位移动词为 B 组 II 类位移动词，B 组成员也具有表达位移方向的语义功能，但和 A 组不同的是，该组的成员不能直接同方所成分组合，需要添加表达路径的补语或用介词结构同时引入路径和方所成分。如去掉（37）中和位移动词搭配使用的补语或介词结构，“\*升了头顶上”、“掉冰窟窿”等均不合语法。

例（38）为 C 组 II 类位移动词用于位移事件表述的情况。在与方所成分组合时表现出的语法特征和 B 组相同，（38a）-（38d）四个例句去掉补语或介词后，句子均不合语法。C 组区别于 B 组之处在于，C 组中的位移动词可以在不和方所成分组合的情况下单独使用表达位移事件，如例（38e）和（38f）。

需要说明的是，B 组中的“升”有时能单独构成位移事件，但能产性很低，仅有“升天”、“升空”等用法，多数时候仍需和“去”、“到”等连用，表现出和语义相近的“上”不同的特点。我们认为，这是因为“升”的意志性弱于“上”，不能用在包含主体意志的自移事件中。我们可以试着比较“上天”和“升天”两例，“上天”可用于“上天入地”的语境中，移动受移动主体主观意志的控制；“升天”一般用于“气球升天”、“死后升天”、“得道升天”等语境下，在这类语境中，或是位移主体本身没有思维能力（气球），或是位移主体的位移是受外部因素干涉而产生的（死、得道）。而 B 组中除“升”之外的“落、掉、坠”等则更强地表现出移动主体受外部因素干涉（重力）而运动的特点。

柯理思（2003）指出，致使位移事件只能由“动词词根+卫星”的方式表达；无生的位移体以“方式动词+趋向补语”为常；有生位移体既可以单用趋向动词（即我们所说的“路径位移动词”），也可以用“方式动词+趋向补语”的表达方式。曾传禄（2010）也指出，致使位移事件一般使用复杂表达式（即动补结构），极少使用简单表达式（单个位移动词）。因此，我们推测，A组和B组在语法特征上存在差异是因为：A组位移动词所表达的位移一般可受主观意志的控制，既可用于自主位移事件也可用于致使位移事件；而B组的位移往往不受主观意志的控制，多用于致使位移事件中。

此外值得注意的是，我们在讨论例（36）的时候已经指出，A组中“上、下”的语义和标记位移起点或终点的“上、下”不同。“上、下”可在表达位移方向的同时可兼具表达“到达”或“离开”的语义，带有离散型路径的特征。可比较（36a）和（39a）以及（36b）、（39b）和（39c）。

（39）

- a. 她们确实上麻将桌子，就忘掉一切烦恼了。（王火《战争和人》）
- b. 即便是真有地狱我也不怕！我不下地狱，谁下地狱！（莫言《蛙》）
- c. 下船后他被一种巨大的冲动推拥着，几乎没有喘息一下就奔向了曲府。（张炜《你在高原》）

（36a）和（36b）表示“依附于某物体向上或向下移动”，“上”和“下”仅指明位移的方向，并未指明位移的目的地，后者表示“进行向上或向下的方向移动并到达或离开某处”，“上”和“下”在指明了位移方向的同时也兼具指明目的地或离开地点的作用。“上”与“下”的区别在于“上”只能标记到达地点，而下既可以标记到达地点，如例（39b）也可标记离开地点，如例（39c）。此外，“上”有时可完全失去方向义，仅用来指示位移的终点，语义和“到”相近，如例（40）：

（40） 干爹带你上哪儿了？准是吃过了饭，又上绸缎庄去扯衣料。（张恨水《夜深沉》）

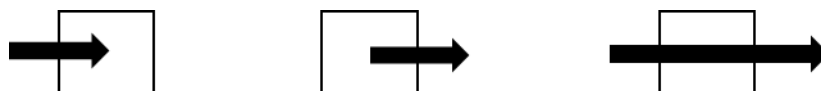
有关标记路径终点的“上”和“下”我们会在3.2.3节的离散型路径位移动词中说明。

### 3.2.3 离散型路径位移动词

离散型路径位移动词是指在语义成分中包含离散型路径的位移动词，即表示“到达”、“离开”或“经过”某处的位移动词，我们将其称为“III类位移动词”。III类位移动词可单独同标记位移参照物的名词性成分组合表达位移事件，其中单音节的也可同其他位

移动词组合，参与路径的表达。I 类位移动词和 II 类位移动词中的 B、C 两组成员必须同 III 类位移动词组合后才能和方所成分组合。如图 3-3 为分别表示“到达”、“离开”以及“经过”三种语义的 III 类位移动词的意象图式（实线框为参照物，箭头为路径及路径的方向）。

图 3-3 离散型路径位移动词的意象图式



离散型路径有不同的语义类型，不同语义类型的离散型路径能够组合的方所成分的性质也不同。Slobin (1996) 将位移事件分为“非边界跨越 (nonboundary-crossing)”和“边界跨越 (boundary-crossing)”两种。非边界跨越仅关注某一路径本身，是空间上一点到另一点的移动；而边界跨越是图形退出、跨越一个空间构型，进入另一个空间构型。在汉语中，位移是否跨越边界会影响路径及方所成分的性质，进而影响路径动词的选择及方所成分的构成。在这里需要说明的是，从定义上来说，连续型路径也属于非边界跨越位移，但本文在使用“非边界跨越位移”概念时仅指路径为离散型路径的非边界跨越位移事件。如：

(41) 他把汽车开得那么快，我敢爬出驾驶室爬到后面去吗？（余华《十八岁出门远行》）

上例中的“爬出驾驶室”为边界跨越位移，“爬到后面”为非边界跨越位移。

边界跨越要求处所为容器形，位移轨迹从容器外部到容器内部或从容器内部到容器外部。能在边界跨越位移中表达路径的 III 类位移动词有“进、出、入”等，如例 (42) 所示。

(42)

- a. 大家以为他又是进赌场、进酒店了。（汪曾祺《故里三陈》）
- b. 在犯人们搬进监狱大墙和草窑洞监号之前，他们已经习惯了虚拟的监狱：石灰粉在草上撒出的线条对于他们就是实体的监狱墙壁，一条线是“内墙”，一条线是“外墙”，最外面一条线是“大墙”。（严歌苓《陆犯焉识》）
- c. 我只能再次倒霉地被老师赶出教室，去捏一个更大的。（余华《在细雨中呼喊》）

d. 他是和我一同出海的，新婚的妻子和他同行。

有时和“进、出”等搭配的名词性成分也可指示经过点，但此时位移事件仍为边界跨越位移，仅是用容器边界或容器内外的连通处代指容器本身，表示经过点的名词性成分一般为“门、窗、墙”等。如例（42b）中的“搬进监狱大墙”以及例（43）：

（43）

- a. 老几一只脚已经迈进了墙头。（严歌苓《陆犯焉识》）
- b. 玮站在祠堂门口，怔了一会，转身进门。（宗璞《东藏记》）
- c. 然后那个男人将她送出屋门，说声要回去照顾就转身进屋了。（余华《世事如烟》）

非边界跨越位移要求处所为一个点或在认知中能被抽象为一个点的空间体，位移轨迹为从点外某位置到被指定的点。能在非边界跨越位移中表达路径的 III 类位移动词有表示到达或离开的“到、至、回、上、下、离”等，以及表示经过的“过、越”等，分别如例（44）和（45）所示。

（44） 到达或离开

- a. 请众人到厅里说话。（冯骥才《三寸金莲》）
- b. 回客栈的路上，我心事重重。（杨绛《我们仨》）
- c. 李麦回到窑洞里，见里边坐着一个姑娘在和杨杏说话。（李准《黄河东流去》）
- d. 老董同志一声喊，杠子两头的男人一齐用劲，就把双脊的后腿抬离了地面，但它的身体还在扭动着。（莫言《牛》）

（45） 经过

- a. 或者轻悠悠的飘过大海，飞越山巅，又低低的落下，落到一个美人的玉搔头边，落到一个浓睡中的婴儿的雏发上……（冰心《冰心全集第三卷》）
- b. 尽管起跑不佳，但加特林在后半程表现不俗，以领先第二名 0.17 秒的优势率先冲过终点。（《人民日报海外版》2005 年 08 月 09 日）
- c. 过大雄宝殿、悯忠台后，中轴线上的主体建筑净业堂忽然体量缩小，东西两庑亦向中间压缩，有意形成东西两条只有 2.5 米的狭道通往大悲堂。（《人民日报海外版》2001 年 08 月 16 日）

在例（44）和（45）中，表示方所的名词性成分的性质和（43）不同。若（44a）为“\*到厅”，则不合语法。（44b）的“回客栈”是将客栈视为一个抽象的点，此时使用“\*到厅”，则不合语法。（44b）的“回客栈”是将客栈视为一个抽象的点，此时使用“\*到厅”，则不合语法。

回客栈的路上，……”语感上就不太自然。而（44c）虽然去掉“里”后句子也成立，但“回到窑洞里”比“回到窑洞”表现出更强的“进入窑洞空间内”的语义。例（45）中名词性成分所指称的方所也为点状或在使用时被抽象为一个点，其中的“大海、山巅”以及建筑物均已失去其三维的空间属性。

观察上述各组例句，我们可以发现，汉语中一般用介词结构指示路径的原点，III类位移动词以指示终点的居多，但一部分III类位移动词同时兼具指示原点和终点的功能，如例（42c）和例（42d）所示。（42c）的“赶出教室”中，“教室”为原点，而（42d）的“出海”中，“海”为终点。此外“下”也具备这一特征。古川裕（2021）指出，<起点>指向和<终点>指向具有不对称性，这种不对称性不仅存在于位移动词和介词层面，而且也存在于句法层面，其实质是站在不同角度观察同一事物的结果，其中<终点>指向是最自然的无标指向，<起点>指向是比较特殊的有标指向，这种现象被称为“终端焦点化”现象。

III类位移动词中也存在一些只可作主要动词单独表达路径、可直接后接方所成分而不可作补语也不可后接补语的成员。这些成员一般为双音节，如“抵达、离开、经过”等，用法如例（46）所示：

（46）

- a. 但是，随后姜日广指出桂王远在广西，在短期内难以抵达，又使他不能不加以考虑。（刘斯奋《白门柳》）
- b. 明天就要放寒假了，她们都急着要回家去过年，第一次离开家乡、离开父母这么久，谁不想家啊！（霍达《穆斯林的葬礼》）
- c. 学生游行队伍冲出中央大学前门，经过石板桥、成贤街到国府路，向国民政府行政院请愿，沿途散发了传单标语。（王火《战争和人》）

需要注意的是，位移动词并非固定地属于I类、II类和III类位移动词中的某一类，虽然大部分位移动词有其唯一的类别归属，但还存在着一些兼属不同类别的位移动词，如我们在本节和3.2.2节中提到的兼属II类位移动词和III类位移动词的“上、下”以及兼属I类位移动词和II类位移动词的“爬”。除这些词之外，“过”也兼属II类位移动词和III类位移动词，分别如例（47a）和（47b）：

（47）

- a. 梅珊从北厢房出来，她穿了件黑貂皮大衣走过雪地，仪态万千容光焕发的美貌，改变了空气的颜色。（苏童《妻妾成群》）
- b. 立即投掷手榴弹，冲过六尺宽，七尺深的外壕圈，冲过铁丝网，进入敌人

的机枪掩体和单人壕；最后举起明晃晃的刺刀解决了战斗。（《人民日报》1947年）

### 3.2.4 指示路径位移动词“来”和“去”

#### 3.2.4.1 位移中的指示成分

我们在第二章中曾提到过“指示”这一概念。Lyons（1977）指出，“指示（*deixis*，直示·*ダイクシス*）”是指将话语和话语行为所处的时空坐标联系起来的人称代词、指示代词、时态以及各种语法和词汇特征的功能。辻（2013）将“指示”解释为“不结合说话者的状况和说话时的语境就无法确定指示对象的语言要素”。指示成分将话语所处的真实时空中的事物同具体语句结合在一起，“我、你”等人称代词，“这、那、来、去”等和空间有关的代词、动词以及“现在、那时”等时间名词均属带指示功能的成分。

Talmy（2000）认为路径也有指示成分存在，它包括“朝着说话者”和“朝着说话者以外的方向”两种。这两种路径的含义在汉语中一般由位移动词“来”和“去”表达，但并非所有语言都有成对的表指示的位移动词，而即使在存在成对的指示位移动词的语言之中，这类动词的用法也并非完全相同。

英语中的动词 *come*（来）可以用来表示由远及近的位移，在句中可做主要动词，也可和其他表示路径的成分搭配如：

（48）

- a. When I asked him if the remittance had come, he pressed my hand and departed.

（Charles Dickens, *David Copperfield*）

当我问他汇款是否到账时，他按下我的手就离开了。（查尔斯·狄更斯《大卫·科波菲尔》，笔者译）

- b. I am driven out of it, I come here, and in a moment I feel an altered person.

（Charles Dickens, *David Copperfield*）

我被赶了出来，我来到这里，一瞬间我感觉自己变了一个人。（查尔斯·狄更斯《大卫·科波菲尔》，笔者译）

- c. She come to England, and was set ashore at Dover. （Charles Dickens, *David Copperfield*）

她来到英国，在多佛尔被送上岸。（查尔斯·狄更斯《大卫·科波菲尔》，笔者译）

但英语中没有在用法上完全和 *come* 对应的表示由近及远位移的动词，在表示由近及远和由远及近的位移时，作为副词性成分的 *there*（那）和 *here*（这）同表示位移方式的动词组合更加自由，如例（49）。

（49）

- a. We went there at the usual hour; and round the study fireside found the Doctor, and his young wife, and her mother. (Charles Dickens, *David Copperfield*)

我们在平常的时间去那里；在书房的火炉边找到了博士和他年轻的妻子，还有她的母亲。（查尔斯·狄更斯《大卫·科波菲尔》，笔者译）

- b. They were a gloomy suite of rooms, in a lowering pile of building up a yard, where it had so little business to be, that one could scarcely help fancying it must have run there when it was a young house, playing at hide-and-seek with other houses, and forgotten the way out again. (Charles Dickens, *A Christmas Carol*)

它们是一套阴暗的房间，在院子的低矮建筑堆里，它没有什么事情可做，以至于人们几乎可以想象，一定是当它还是一个年轻的房子时跑到那里，与其他房子玩捉迷藏又忘记了出路的。（查尔斯·狄更斯《圣诞颂歌》，笔者译）

- c. I could get nobody till five minutes ago; and I 've run here all the way. (Charles Dickens, *Oliver Twist*)

五分钟前我还找不到人，我一直跑到这里。（查尔斯·狄更斯《雾都孤儿》，笔者译）

- d. You will be happy to learn that I have at length arrived here in safety. (Charles Dickens, *Sketches by BOZ*)

你会很高兴地知道，我终于安全到达这里了。（查尔斯·狄更斯《博兹札记》，笔者译）

日语中存在和汉语位移动词“来、去”对应的成对位移动词「来る（くる）・行く（いく）」。但我们在第一章中说到过，日语是一种 V-语言，一般直接由位移动词承担表达路径的功能，而如果需要同时表达位移的方式或致使动作，则需另外引入一个表达这些含义的动词，而汉语可使用“走来、到来、推下去”这样的动补结构。日语「来る・行く」的用法如例（50a）和（50b）。此外，日语的「行く」有时并不明确表示由近及远



的位移，而是可对应汉语中的“到”，如例（50c）。

（50）

- a. 二人は漬物を茶うけにして茶をのみながら、女らしくおしゃべりに夢中になっていたが、ふと、誰か人が来るようであったので、話しやめて見ていると、杉木立の間の道をたしかに誰か来る。（海音寺潮五郎『二本の銀杏』）

他们一边配着腌菜喝茶，一边像女子一般倾心交谈，突然看到好像有人来了。他们停止交谈，看了看，果然有人沿着杉树之间的小路走来。（海音寺潮五郎《两棵银杏》，笔者译）

- b. だからぼくの絵を持っていくと天国へ行くか地獄へ行くか、どっちへ行くでしょうね。（横尾忠則・淀川長治『淀川長治・横尾忠則連続対話』）  
所以，如果你带着我的画，你会去天堂还是去地狱呢？会去哪里呢？（横尾忠则、淀川长治《淀川长治·横尾忠则连续对话》，笔者译）

- c. 「品川駅まで行くのに、特急電車で行くには運賃はいくらかかりますか？」（岩崎勝利『希望のレールで—若者達へ気力を』）  
“乘坐特快列车去（到）品川站需要多少钱？”（岩崎胜利《在希望的轨道上——为年轻人注入能量》，笔者译）

#### 3.2.4.2 “来、去”的句法和语义特征

从语义上说，“来、去”是表示“朝向说话者”或“远离说话者”两种位移动作的动词，它们的意象图式如图 3-4 所示（实线框为参照物，虚线框为说话者，箭头为路径及路径的方向）。

图 3-4 “来”（左）和“去”（右）的意象图式



在用法方面，“来”和“去”既可单独表达位移事件的路径、同标记位移参照物（终点）的方所成分组合，又可作为补语和表示方式或原因的 I 类位移动词或带路径语义的 II 类、III 类位移动词组合，语法特征和 III 类位移动词相似。但“来”和“去”的用法与 III 类位移

动词并不完全相同。二者与 III 类位移动词的差异表现在：

第一，语义方面，III 类位移动词涉及位移主体相对于客观世界的位置变化（物体离开、经过或到达某处），而“来、去”涉及位移主体相对于说话者的位置变化，有时其选用可以基于说话者设置的观察角度（心理上的立场），选择带有主观性。有时说话者可基于位移主体或位移结果的立场做出选择，即认为趋近位移主体、趋近既有结果或说话者所期待的结果的位移是由远及近的；认为远离位移主体、远离既有结果或说话者所期待的结果的位移是由近及远的，远近关系同客观世界中说话者的位置无关，此时“来”和“去”一般不能互换。例（51a）是说话者将观察角度设置为“母亲”的例子，（51b）是说话者将观察角度设置为既定的位移结果，而（51c）则是说话者将观察角度设定为既有的社会观念。

（51）

- a. 母亲发现苏宇没有像往常那样去茶馆打来开水，她提起空空的热水瓶时，嘴上立刻表达了对儿子的不满：“真不像话。”（余华《在细雨中呼喊》）
- b. 有人站出来发话道：“莫要摇太远了，到朱庄去，有人请我们吃饭。”（宗璞《东藏记》）
- c. 被派去联络富商的名为“振兴实业”，联络都市里的富农的是“到民间去”。（老舍《文博士》）

第二，句法方面，III 类位移动词可出现的句法位置是主要动词和补语，即充当主要动词 V 及动补结构 V1-V2 中的 V1 或 V2；“来、去”除了可以充任 V、V1 和 V2 外，也可出现在标记位移参照物的方所成分或后置的标记位移主体的普通名词之后，即充任“V1 (-V2) + 方所成分/普通名词 + V3”结构中的 V3，如例（51b）及例（52）：

（52）

- a. 慧的眼睛里冒出火来。（巴金《爱情的三部曲（雾雨电）》）
- b. 偶然一抬头，看到蜡烛只剩了一小截屁股，这才赶着将一切东西恢复原状，依然摸索着走回房去。（张恨水《欢喜冤家》）
- c. 你把脏水倒进水池子去。（萧红《烦扰的一日》）

第三，路径类型方面，“来、去”单用时一般表达离散型路径，但有时也可以用来表达连续型路径。主要表现在“过、出、进、回、上、下”等和“来、去”组合的用法中，如例（53）。由于其中涉及路径动词的组合问题，具体我们会在第四章中说明。

（53）

- a. 刚跨出门槛，他们就看见，阮大铖正挺着那肥胖的身躯沿着回廊大步走过来。（刘斯奋《白门柳》）
- b. 张文的手蠕动着，一寸一寸地退了回去。（毕淑敏《送你一条红地毯》）
- c. 在他的身后，两个长工拖着一门沉重的土炮，哼哧哼哧跟着爬上来。（莫言《丰乳肥臀》）

基于上述三点理由，我们认为“来”和“去”应当被视为独立于 III 类位移动词之外的“IV 类位移动词”。

### 3.2.5 小结

我们将四类位移动词的特征总结为下表（其中，“句法位置”部分的 V、V1 等指代在“V/V1-V2+方所成分/普通名词+V3”结构中的位置，即 V 表示可单独表示路径，V1 表示动补结构中的主要动词，V2 表示动补结构中紧随主要动词之后的补语，V3 表示方所成分或后置的位移主体后的补语；带\*的表示为双音节成员或部分单音节成员在一定语境条件下具备的特征），各类位移动词的更多例词见本文附录，而动词组合为动补结构的规律将在下一章中说明。

表 3-3 四类位移动词的特征

	路径特征	句法位置	直接同方所成分组合	例词
I 类位移动词	——	*V, V1	*可（仅方所表路径时）	走、拿
II 类位移动词	连续	*V、V1	*可（仅方所表路径时）	升、掉
III 类位移动词	离散	V、V1、V2	可	回、到
IV 类位移动词	离散、*连续	V、V1、V2、V3	可	来、去

在路径特征方面，I 类位移动词是语义中不带路径成分的位移动词，其中包括描述自主位移事件中位移状态或方式的词，也包括描述致使位移事件中致使动作的词；II 类、III 类和 IV 类位移动词都是语义中带路径成分的位移动词，但三者所带路径成分的性质不同，II 类位移动词为连续型路径、III 类位移动词为离散型路径、IV 类位移动词单用

时为离散型路径，但在和其他路径动词组合后也具备连续型路径的特征。在句法特征方面，I类和II类位移动词一般不能表达路径，使用时需要和其他可表示路径的成分（包括补语、介词结构和可表示路径的名词性成分）组合；III类和IV类位移动词均既可单独表达路径又可与其他表示路径的成分组合，同时二者还具备充当其他位移动词的路径补语的功能。III类位移动词和IV类位移动词之间除了语义和路径特征存在差异之外，在句法方面最大的区别在于IV类位移动词除了可以充任III类位移动词所能充任的动补结构V1-V2中的前项与后项之外，还可出现在位移表述的末尾——标记方所或后置的标记位移主体的名词性成分之后，即“V/V1-V2+方所成分/普通名词+V3”中的V3位置。

### 3.3 有关“到”的几个问题

#### 3.3.1 “到+NP<sub>L</sub>”结构中方所成分与位置成分的共现问题

我们在前文中说过，“到”是III类位移动词，在位移表述中既可以单独充当主要动词，也可以在其他位移动词后充当趋向补语。在实际使用时，“到”一般要后接表示方所的名词性成分组成“到+NP<sub>L</sub>”结构。在这一结构中，有些名词可单独充当NP<sub>L</sub>，有些名词则必须和方位词（“上、里、边”等）组合为方所短语后才能充当NP<sub>L</sub>，如例（54）所示：

（54）

- a. 走到图书馆/走到图书馆里（自拟）
- b. \*放到钱包/放到钱包里（自拟）

“到+NP<sub>L</sub>”的这一特征在日汉两种语言中存在一定差异，有些在日语中不需要添加方位标记的名词，在汉语中则需要和方位词组合，如例（55）中的“海”。

（55）

- a. 二人が海に着いたのは、ちょうどお昼ごろでした。（香月美里『リボン』）  
（两人 海 到 正好 正午 前后）
- b. \*两人到海时正好是正午前后。/两人到海边时正好是正午前后。（自拟）

这样的差异使学习汉语的日语母语者在产出位移表述时出现一些如下所示的误用现象：（例句引自 HSK 动态作文语料库：<http://hsk.blcu.edu.cn/>，括号内为我们做出的修改）

（56）

- a. 过一会儿，一个老人到庙来了，看见了三个和尚读经。（到庙里）

- b. 三个和尚想尽了一切的办法，最后还是每个人都捧着盆子，拼命地跑到山下的井去打水。（跑到山下的井边）

在汉语中，普通物体名词、场所词和抽象名词均可作为位移参照构成或进入 NP<sub>L</sub>，例（57）-（59）三组例句分别表示三种类型的名词作位移参照的情况：

（57）

- a. 除了张木匠回家来那有数的几天以外，每天晚上她都是离了罗汉钱睡不着觉，直到生了艾艾，才把它存到首饰匣子里。（赵树理《登记》）
- b. 他睡到床上去，虽然倦极却不能成眠。（沈从文《石子船》）
- c. 这最后一夜，清晨时分又怎样才能以最快的速度把行李和那几个沉重的书箱子从宿舍搬到车上。（高行健《一个人的圣经》）

例（57）中，标记位移参照的名词均表示三维空间中的物体或物体形成的封闭空间，若去掉三个例句中的方位词“里/上”，构成的“\*存到首饰匣子、\*睡到床、\*搬到车”等表达均不合语法。

（58）

- a. 修福老汉到庙里去跟铁锁商量，铁锁自己知道翻不过了，也只好自认晦气。（赵树理《李家庄的变迁》）
- b. 童霜威见毕鼎山身为救灾大员，来到灾情严重的河南，摆出一副悠闲而悠然自得的架子，似乎是来游山玩水研究名胜古迹的，很不顺眼……（王火《战争和人》）
- c. 一九二六年，我回到母校燕京大学，教一年级国文课。（冰心《冰心全集第八卷》）

例（58）的名词均为场所词。场所词所指的场所可以分为在认知上定位和在认知上不定位两种。若场所不定位，则其需和方位成分组合后才能充当 NP<sub>L</sub>，如例（58a）及上文的（55b），亦可比较“\*到庙去/到城隍庙去”（自拟）和“\*到海时/到濑户内海时”（自拟）；若场所在认知上定位，则在从语法角度来说，无论是否使用方位成分，句子均成立，如上面说到的“城隍庙、濑户内海”以及（58b）、（58c）。但在具体语境中指代定位的场所的名词性成分是否可单独充当 NP<sub>L</sub> 要视语义侧重点而定：侧重场所的权力、职责等范围时一般单独使用，如例（58b），侧重场所在物理世界中的空间范围时一般与方位成分组合，可比较“回到燕京大学/回到燕京大学里”及“到民政局登记结婚/到民政局里登记结婚（自拟）”

(59)

- a. 一部小说，常常是从战前动员开始写到战役的胜利……（莫言《会唱歌的强》）
- b. 同时，各种把人类食肉的想像力发展到极限的肉食大宴，也在全城的大小饭店排开。（莫言《四十一炮》）
- c. 中共十九大后，要迅速掀起人民政协学习贯彻大会精神的热潮，团结引导广大政协委员和各族各界人士，切实把思想和行动统一到大会精神上来，把智慧和力量凝聚到大会确定的目标和任务上来。（《人民日报》2017年03月14日）

如例（59）所示，当名词表示抽象概念时，若位移描述主体到达某一状态（胜利、极限），则名词不可与方位词组合，如例（59a）和（59b），“\*写到胜利上、\*发展到极限中”的表述均不自然；若位移描述主体进入某一概念的范畴（精神、目标和任务），则名词一般需要和方位成分“上”组合，如例（59c）。此时去掉“上”则表述不自然。但位移动词与抽象概念的组合属于虚拟位移的范畴，并不是本文主要的研究内容。

综上，我们认为，“到+NP<sub>L</sub>”结构中方位词的使用与名词的语义特征和位移事件的性质有关。具体表现为：第一，若名词表示三维空间中的物体或物体形成的封闭空间，则该名词需要和方位词组合为方所短语后才可充当 NP<sub>L</sub>。第二，若名词表示场所，则方所成分的使用与名词标记的场所在认知上是否定位有关，在认知上不定位的场所名词需要和方位词组合才能充当 NP<sub>L</sub>，在认知上定位的场所名词既可单独充当 NP<sub>L</sub> 也可和方位词组合为方所短语后充当 NP<sub>L</sub>，单独使用时侧重所示场所（一般为机构）的权力、职责等超空间的范围，和方位词组合时侧重场所在物理世界中的空间范围。第三，名词表示抽象概念时，若位移描述主体到达某一状态，则名词不可与方位成分组合，若位移描述主体进入某一概念的范畴，则名词一般需要和方位词“上”组合。

我们推测，产生上述现象的原因在于：“到”表示位移的终点，具有结果性，因此要求其后的名词表示场所且该场所在认知上有明确的位置和界限，因此一些具有场所定位性的名词可直接充任 NP<sub>L</sub>。同时，方位成分与名词组合时具有使名词空间化和对空间进行限定的作用，方经民（2002）将其称为“方位成分的有指化作用”，因此一些不具备场所定位性的名词需要先和方位成分组合才能充任 NP<sub>L</sub>。

### 3.3.2 表位移的“到”和“在”的异同

前面我们曾提到，朱德熙（1982）指出：“有很多动词本身不能带处所宾语，只有跟趋向动词或是‘在’、‘到’等组合成述补结构以后才能带处所宾语……补语位置上的“在”和“到”有一个弱化形式 *de*。”虽然这一论述探讨的是动词与处所宾语的组合同律问题，但它从侧面说明了一个事实，即“在”可用于位移事件，且语义和用法均与“到”有一定相似性。

在实际的语言使用中，我们发现“到”和“在”在一些情况下意思相近，替换后也表达相同的位移事件，如例（60）：

（60）

- a. 掉到地上（自拟）
- b. 掉在地上（自拟）

例（60）中 a、b 两句虽然在语义侧重点上存在差异，（60a）展示了物体由原点移动到终点的过程，（60b）侧重于展示位移的结果，而位移的轨迹是基于结果产生的自然联想，但二者均可用于描述位移事件，且位移主体和路径均相同，在一定程度上可换用而不影响整体的语义理解，我们将之视为“到”、“在”可互相替换。

刘月华（1998）指出，“到”是趋向补语，表示“移动到某一处所，立足点可在某处所，也可不在某处所”，没有提及“在”。根据我们在本章中讨论的内容，“到”是带路径语义成分的 III 类位移动词，但“在”从本义上来说并不表示位移，而是用来标记存在的场所，是不带路径成分的。因此“到”和“在”并非在任何情况下均可替换，也存在一些“到”、“在”替换后不合语法或替换后改变了位移事实或位移事件性质的情况，如例（61）和与其对应的例（62）。

（61）

- a. 柳生走到梅花帐前，嗅到了一股柏子香味，那翡翠绿色的被子似乎如人一般仰卧，花纹在烛光里躲躲闪闪。（余华《古典爱情》）
- b. 天快黑了我才回到家。（金河仁《再见妈妈》）
- c. 站在家门口，望到天安门（《人民日报》1963年03月26日）
- d. 键盘放在办公室了。（自拟）

（62）

- a. 柳生走在梅花帐前，嗅到了一股柏子香味……（自拟）
- b. \*天快黑了我才回在家。（自拟）

- c. 走出办公室 站到柜台旁（《人民日报》1957年05月10日）
- d. 键盘放到办公室了。（自拟）

例（61）中的各小句分别和例（62）中各小句对应。（61a）和（62a）都是“走”和“到/在”的组合，两句表达的是不同的事件，其中（61a）属于从原点移动到终点的典型的位移事件，（62a）也表达位移，但“梅花帐”是位移路径的载体，位移没有特定的轨迹，不属于典型的位移事件。例（61b）符合语法，但将其中的“到”替换为“在”构成的例（62b）则不合语法，位移动词“回”无法和“在”连用。（61c）和（62c）表达不同事件，（61c）描述状态，位移主体始终处于“家门口”的位置，没有发生位移，（62c）描述典型的位移事件。（61d）和（62d）都可表达位移事件，语义存在差异。二者都可以表示致使的位移，但（61d）可用在“遗留”的语义条件下，如“键盘放在办公室了，忘了带回来”；而（62d）只能用在致使键盘发生物理性位移的语境中。

结合本章中对位移动词类型的讨论和上面的例子，我们推测，在“V+到/在+N”结构中，主要动词V中的路径成分会影响结构的合法性及语义。下面我们将分别讨论带不同路径语义的V对“V+到/在+N”结构的影响。

### 3.3.2.1 I类位移动词

当V为不带路径成分的I类位移动词时，“V+到/在+N”格式的构成如下所示：

（63）

- a. 飘到水面上（自拟）
- b. 飘在水面上（自拟）

我们发现，例（63a）和（63b）语义不同，两句间的语义差异与例（61a）和（62a）间的对应关系类似，其中的a句都表示从某原点移动到名词性成分所指称的终点，b句都表示在名词性成分所指称的场所范围内进行移动。但上述例句都是位移事件，而致使位移事件的情况则与此不同。

（64）

- a. 一脚把球踢到了门柱上（自拟）
- b. 一脚把球踢在了门柱上（自拟）
- c. 知道还有三十四号官舱空着，他就叫茶房把陶太太的行李搬到三十四号去。  
（茅盾《烟云》）
- d. \*.....他就叫茶房把陶太太的行李搬在三十四号去。（自拟）

例（64）都是致使位移事件的例句，其中a和b中充当动补结构的主要动词“踢”是



瞬间动作，c 和 d 中的主要动词“搬”是持续性动作。（64a）和（64b）两句均成立，也表达相同的位移事件，但比较例（62d）和例（64a）后可以发现，如果用在其他语境下，“不小心把球踢到了门柱上”在语感上比“不小心把键盘放到了办公室”自然，我们推测这是因为“放”的动作必须和位移同时结束，带有一定持续性。若将使用带持续性动作动词“搬”的例（64c）中的“到”换为“在”，则句子不成立，如例（64d）。因此我们推测，位移事件是自主位移还是致使位移以及位移动词的持续性会影响“到、在”的使用。下面我们将结合例句验证我们的推测。

（65） 自主位移

- a. 四老妈的血与毛驴的血流到一起，汇成一湾，但四老妈的血是鲜红的，毛驴的血是乌黑的，彼此不相融合。（莫言《食草家族》）
- b. 四老妈的血与毛驴的血流在一起，汇成一湾，但四老妈的血是鲜红的，毛驴的血是乌黑的，彼此不相融合。（自拟）
- c. 安徽科长押着老几去厕所，让老犯人又重新学步，从关押他的办公室蹒跚到走廊尽头花了十多分钟。（严歌苓《陆犯焉识》）
- d. \*.....蹒跚在走廊尽头花了十多分钟。（自拟）
- e. 蹒跚在走廊尽头十多分钟。（自拟）

例（65）是表示自主位移的例句，其中的作主要动词的“流”和“蹒跚”都是描述位移状态的动词，二者都可以和“到”、“在”组合，但语义不同，与上文的例里（61a）、（62a）和（63）类似。其中例（65d）不合语法，这是因为使用“在”时描述的是在某一范围内进行移动，这一移动一般是“无界”的，因此不能用“花了十多分钟”这类对“界限”进行限制的表达组合，而若将其换为描述持续时间的“十多分钟”，句子则合乎语法。

（66） 致使位移（非持续性致使动作）

- a. 我立即把皮夹像掏鸟窝掏出了一条蛇一样扔到了围墙下的树丛里，拧身就走。（贾平凹《高兴》）
- b. 我立即把皮夹像掏鸟窝掏出了一条蛇一样扔在了围墙下的树丛里，拧身就走。（自拟）
- c. 兔子一落地就向南跑，河北人用一个藏人的抛兜子扔出一块石头，打到兔子前面的路上，兔子调转方向便向另一头跑去。（自拟）
- d. 兔子一落地就向南跑，河北人用一个藏人的抛兜子扔出一块石头，打在兔子前面的路上，兔子调转方向便向另一头跑去。（严歌苓《陆犯焉识》）

- e. 我刚把茶缸子去搁到火上的时候，果然阿桂已经又回到门口了……（自拟）
- f. 我刚把茶缸子去搁在火上的时候，果然阿桂已经又回到门口了……（丁玲《我在霞村的时候》）

(67) 致使位移（持续性致使动作）

- a. 搬到地下室多日，他打开了行李，却无心归置，碰到哪里都等于碰到了望达。（严歌苓《陆犯焉识》）
- b. \*搬在地下室多日，他打开了行李……（自拟）
- c. 他们把他带到街中央站住。（余华《四月三日事件》）
- d. \*他们把他带在街中央站住。（自拟）
- e. 这个已经生过两个孩子的女人向王跃进大叫：“快把她扶到屋里去。”（余华《在细雨中呼喊》）
- f. \*这个已经生过两个孩子的女人向王跃进大叫：“快把她扶在屋里去。”（自拟）

例（66）和例（67）均为致使位移事件，其中例（66）中的致使动作“扔、打、搁”都描述非持续性的致使动作，补语位置上的“到”和“在”可替换使用；例（67）中的致使动作“搬、带、扶”都描述持续性的致使动作，这些动词只能和“到”搭配。

由此，我们得出如下结论：

第一，表达自主位移事件的动词可接“到”也可接“在”，但语义不同。“在”后的场所词为位移动作发生的范围，不表示具体的确定路径的位移。

第二，表达致使位移事件的动词有时不能用“在”，是否可以用“在”要看引发位移的动作是否是持续性致使动作（动作发出者的动作是否伴随位移主体的位移过程，和位移过程同时结束）。动作是持续性致使动作时只能和“到”组合；为非持续性致使动作时可搭配“到”也可搭配“在”。我们推测，这一现象产生的原因在于，“在”主要用于标记位移主体抵达位移目的地的结果，持续性致使动作在认知上涵盖位移过程（动作主体的致使动作和位移主体的移动呈现伴随状态），因此无法与单纯标记结果的“在”组合。

此外，后接趋向补语“来”、“去”时只能用“到”，如例（68）：

(68)

- a. 我的画儿可以贴到大街上去，也可以贴到会场上去，它能推动村里的工作，扫除落后和黑暗，助长进步和光明。（孙犁《风云初记》）
- b. \*我的画儿可以贴在大街上去，也可以贴在会场上去……（自拟）

c. 我的画儿可以贴在大街上，也可以贴在会场上……（自拟）

需要注意的是，我们这里说的“持续性致使动作动词”不等于普遍意义上的“持续性动词”，一部分动词，如“放、贴、塞、铺、装”等，是否持续是要视具体事件而定的，这些动词有时候表示的是一种结果存续的状态，而不是位移事件，如下面的例子。

(69)

a. 她摘下来了几朵指甲草上的红花，放在一个小瓷碟里，我们就到房门口儿台阶上坐下来。（林海音《城南旧事》）——位移事件

b. 一擦擦空盘和刀叉放在一边等待着人们自己动手拿了去取食。（王火《战争和人》）——存续状态

因此，上文中的“键盘放在办公室/键盘放到办公室”的例子中，当句义表达“移动到办公室”时是位移事件，可以和“到”、“在”组合；表达“遗留在办公室”时是描述结果的存续状态，此时只能用“在”。

### 3.3.2.2 II 类位移动词

当主要动词 V 是 II 类位移动词时，我们发现“V+到/在+N”的合法性受 V 语义的影响，可参考下面的例子：

(70) 下降

a. 那雨下得虽不甚大，树叶上的积水却是大滴大滴的掉到人头上。（自拟）

b. 那雨下得虽不甚大，树叶上的积水却是大滴大滴的掉在人头上。（张爱玲《半生缘》）

c. ……他就像一个不会溺水的人落到水里一样……（自拟）

d. ……床那样松软，他就像一个不会溺水的人落在水里一样，突然陷在一大堆柔软的棉絮堆中间。（刘白羽《第二个太阳》）

e. 这就是说那颗金光闪闪的星星已经降到人间了。（自拟）

f. 这就是说那颗金光闪闪的星星已经降在人间了。（《人民日报》1961年05月28日）

(71) 上升

a. 余校长像是没有看到这些，一如既往地领着寄宿的学生，将国旗升到旗杆顶上。（刘醒龙《天行者》）

b. \*余校长像是没有看到这些，一如既往地领着寄宿的学生，将国旗升在旗杆顶上。（自拟）

- c. 他提着枪，冲出门去，在上升的台阶上——犹如从地狱攀升到天堂的台阶上——我们的开放双腿一软跪倒了。（莫言《生死疲劳》）
- d. \*犹如从地狱攀升在天堂的台阶上。（自拟）
- e. 那一夜啊，又是风又是雨，湖水都涨到堤口了……（李国文《冬天里的春天》）
- f. \*那一夜啊，又是风又是雨，湖水都涨在堤口了……（自拟）

对比例（70）和例（71）中个小句可以发现：当 V 为表示下降的动作时，“到”和“在”可以互换，上文中的例（60）亦属此类；当 V 表示上升的动作时，只能使用“到”。

### 3.3.2.3 III 类及 IV 类位移动词

下面我们来看 III 类和 IV 类位移动词和“到、在”组合的例子：

（72）

- a. 我一直思念着祖国，待我稍微好些之后，我只有一个愿望——回到祖国。  
（《人民日报》1998 年 12 月 06 日）
- b. 出到洞外，已经是红日衔山，晚霞绚丽的时候了。（《人民日报》1962 年 04 月 20 日）
- c. 上到主席台上，让全社的好汉模范都看看，徐家园的治安老汉，从今日起，另是一个人咧！（陈忠实《徐家园三老汉》）
- d. 来到乡政府门口，暖暖不由得想起了当年为救开田来这里拦住乡长喊冤的事。（周大新《湖光山色》）

（73）

- a. \*我一直思念着祖国，待我稍微好些之后，我只有一个愿望——回在祖国。  
（自拟）
- b. \*出在洞外，已经是红日衔山，晚霞绚丽的时候了。（自拟）
- c. \*上在主席台上……（自拟）
- d. \*来在乡政府门口，暖暖不由得想起了当年为救开田来这里拦住乡长喊冤的事。（自拟）

我们将例（72）各小句“III 类/IV 类+到+N”结构中的“到”替换为“在”构成的例句（73）均不合语法，因此可以认为，III 类和 IV 类位移动词只能和“到”组合（仅有“到”不能和“到”自身组合），不能和“在”组合。

### 3.3.2.4 非位移动词和虚拟位移事件

汉语中存在用表示静态的非位移动词表示位移事件和用位移动词表示非位移的存在状态的现象，如“坐到一张书桌边”、“围到老师身边”，其中的“坐、围”原本都用来描述非位移的动作，但在这样的结构中被借用描述位移事件。这类动词也可以和“到、在”连用，如：

(74)

- a. 他躺在窝皱了的床单上，伸展四肢，又打了个滚。（严歌苓《陆犯焉识》）
- b. 焉识坐在八仙桌正中，左边恩娘，右边婉喻，说着他一句也不想说的话。  
（严歌苓《陆犯焉识》）
- c. 从黑坎肩的两边伸出着条纹花布袖子的臂膀，高高的举起，撑在门柱上边。  
（丁玲《夜》）
- d. ……天边的红霞已经退尽了，四周围浮上一层寂静的烟似的轻雾。绵延在远近的山的腰边。（丁玲《我在霞村的时候》）

(75)

- a. 他躺到窝皱了的床单上，伸展四肢，又打了个滚。（自拟）
- b. 焉识坐到八仙桌正中……（自拟）
- c. 从黑坎肩的两边伸出着条纹花布袖子的臂膀，高高的举起，撑到门柱上边。  
（自拟）
- d. ……绵延到远近的山的腰边。（自拟）

例（74）是使用“在”的例句，例（75）中各小句分为为将（74）中各小句的“在”替换为“到”的情况。可以看出，将“在”替换为“到”后，各小句依然成立，但（74）和（75）的语义存在差异，例（74）的“V+在+N”描述存在的状态，例（75）的“V+到+N”描述的是位移事件，这样的差异和第3.3.2.1节中使用I类位移动词时的特征相同。

此外汉语中还存在用位移表述表达非位移的存在状态或空间关系的用法，如“延伸”、“连接”或“旋转”等，Talmy（1975，2000a）将其称为“虚拟位移”现象。描述这类现象的动词“伸、通、连、转”等从语义角度来说通常也不是习惯被用作描述位移的，但这类动词可以后接“到”构成形似位移表述的表达方式，如：

(76)

- a. 系裙的方法是将裙由前面围到后腰，再绕到前面用系带打结，然后把左边裙底再插到右腰间，右边裙底角插到左腰间，在腰后形成交叉的裙幅，体现了当地壮人的审美观。（梁庭望《壮族风俗志》）

- b. 萨达特总统在谈到同中国的关系时说，“埃及把合作之桥通到中国”。（《人民日报》1976年07月25日）
- c. 岳父一声不吭，他睁开眼又闭上，把脸转到一边。（张炜《你在高原》）
- d. 有人打着广东话跟他攀谈，他把头扭到别的方向去。（小默《欧游漫忆》）

我们将例（76）中的“到”替换为“在”，得到下面的例（77）：

（77）

- a. \*系裙的方法是将裙由前面围在后腰，再绕在前面用系带打结……（自拟）
- b. \*埃及把合作之桥通在中国（自拟）
- c. \*岳父一声不吭，他睁开眼又闭上，把脸转在一边。（自拟）
- d. \*有人打着广东话跟他攀谈，他把头扭在别的方向去。（自拟）

例（77）中的各小句均不合语法。其中“将裙（子）围在后腰”的表达本身可以使用，“绕在”若组合为“绕在脖子上”也符合语法，但“围在后腰”及“绕在前面”在（77a）的语境中是不可使用的。因为“到”表示延伸或连接的终点，“在”表示事物存在的场所，而（77a）具有明确的“延伸到终点”的语义。例（76b）也是因为“通”本身即带有“延伸”和“连接”的语义，因此不能和“在”搭配。而如例（76c）和（76d），当位移表述用来描述方向的变化时，动词也只能和“到”组合。

因此，用静态的非位移动词表示位移事件时，动词后既可加“在”也可加“到”，但后接“在”时表示静态的存在的地点，接“到”时表示位移事件，有动态特征。在虚拟位移表述中，表示“延伸”、“连接”的动词与“到”搭配时表示终点，与“在”搭配时表示事物存在的场所，是否能和“在”搭配也要考虑动词的语义中是否具有连接到某终点的动态的特征。而表示朝向改变时，动词后的补语只能为“到”。

### 3.3.2.5 小结

基于上面的分类讨论，我们得出如下结论，“V+到/在+N”结构能否成立以及两种结构是否可替换、是否表达相同事件，受进入该结构的动词V的语义特征及结构所示位移事件的性质的影响。具体表现为：

第一，当V为I类位移动词时：表达自主位移事件的动词可用“到”也可用“在”，二者语义不同，但“在”后的场所词为位移动作发生的场所范围，没有特定的路径，不是我们所说的典型的位移事件；表达致使位移事件的V是否可以搭配“在”取决于V是否是持续性致使动作，持续性致使动作只能和“到”组合，和“在”组合时表示存在状态或动作场所而非位移事件。此外，后接趋向补语“来”、“去”时只能用“到”。

第二，当 V 为 II 类位移动词时：表示下降的位移可搭配“到”和“在”，“到、在”互相替换后语义相同；表示上升的位移只能搭配“到”，不能搭配“在”。

第三，当 V 为 III 类或 IV 类位移动词时：V 只能搭配“到”，不能搭配“在”。

第四，当 V 为非位移动词时：若 V 为“坐/靠/躺/延伸”等表达静态动作的词，此时句法和语义特征与 V 为 I 类位移动词时相同；若 V 为“转/扭/旋”等表示朝向改变的词，则 V 只能和“到”组合。

## 第四章 位移动词的组合——动补结构

### 4.1 动补结构的构成及路径特征

我们在第三章中将位移动词分成了四种类型，其中 I 类位移动词的语义组成中不带路径成分，而其他三类位移动词都是带路径语义成分的位移动词，只是路径的特征不同，II 类位移动词中的路径为连续型路径，III 类和 IV 类位移动词中的路径为离散型路径，而 IV 类和 III 类最显著的区别在于二者的语法特征不同。

我们知道，位移动词中的路径成分会影响它是否能单独表达位移事件、是否能后接方所成分以及可以和怎样的方所成分搭配。朱德熙（1982）认为，能够带狭义处所宾语的动词为数有限，除了“来、去、进、出、上、下、回”等趋向动词以外，还有表示运动的“上（上北京）、飞（飞北京）”和表示位置的“在”和“到”……有很多动词本身不能带处所宾语，只有跟趋向动词或是“在”、“到”等组合成述补结构以后才能带处所宾语。也就是说，在位移事件中，能带处所词（即“狭义处所宾语”）的动词一般是带有路径语义成分的位移动词，而不含路径的位移动词则只有组合为动补结构后才能和方所成分组合。曾传禄（2010）指出，一般位移动词能否直接后接处所词与动词语义是否词汇化了路径成分有关，没有词汇化路径的动词则需要带上路径成分才能后接处所词。我们在第三章的论述中也发现，I 类位移动词和 II 类位移动词在单独表达路径时都受限，在后接表示具体地点的方所成分时需要后接带有离散型路径的位移动词充任的补语。这里便涉及位移动词组合为动补结构的问题。

本节将讨论动补结构的构成及结构中各成员的路径特征与结构总体路径特征间的关系。为了便于称说，本文中所述的“动补结构”既包括由一个主要动词和紧随其后的补语构成的“V1-V2”式，也包括带名词后路径补语（来、去）的“V/V1-V2+方所成分/（指称位移主体的）普通名词+V3”式。论述过程中，V1 表示动补结构中处于前一位置的位移动词，V2 表示动补结构中处于后一位置的位移动词，V3 一般表示方所成分或普通名词后表示指示的“来/去”。我们将在 4.1.1 节中讨论各类位移动词组合为动补结构的规律，并将在 4.1.2 节中分析动补结构 V1-V2 与作为其构成成分的位移动词 V1、V2 间路径特征的差异。



#### 4.1.1 动补结构中动词的组合

我们在第二章中已经发现，路径的排列顺序存在一定规则，除表示跟随或附着的连续型路径一般前置之外，其他路径基本按照位移事件发生的空间或时间顺序排列。观察前面章节中的例句不难发现，在位移动词组合为位移路径时，动词排列的顺序也有其规律，表示位移方式或原因的动词一般前置，表示路径的动词一般后置，而在表示路径的位移动词中，表示离散型路径的“回、到”等一般也出现在表示连续型路径的“掉、落”之后。排列顺序可见例（78）：

（78）

- a. 包子刚咬到嘴里，汹涌的口水就把它冲下了食管。（严歌苓《陆犯焉识》）
- b. 这辆汽车，我已经捐给第三军部作军用品车，你拿我的妻子，开到军部里去。（张恨水《啼笑因缘续集》）
- c. 是的，有些人的理论是比列宁‘高明’，一个在天上，一个在地下，但这‘高明’说不定哪一天会从天上掉下来，掉到世界上你所知道的地方！（路遥《我为我心爱的人儿》）
- d. 后来她听见祖母的脚步声上楼来了，忙把一张报纸拉过来，预备躺在床上看报，把脸遮住了。（张爱玲《半生缘》）
- e. 匆忙回到店里，回到屋里，发现老尤过去放在墙角的行李和包袱不见了，知道事情坏了。（刘震云《一句顶一万句》）

例（78）显示了不同的位移动词组合为动补结构的例子。按照我们第三章中位移动词的四种分类对各句中动补结构的构成进行分析，在（78a）中，“咬到”为“I类+III类”格式，“咬”说明位移的方式或原因，不带路径成分，“到”标记位移终点，为带离散型路径的位移动词；“冲下”为“I类+II类”格式，“冲”说明位移的方式或原因，不带路径成分，“下”指示位移的方向，语义成分中包含连续型路径。例（78b）的“开到……去”为带后置指示路径的动补结构，其构成为“I类+III类+……+IV类”的形式。（78c）的“掉下来”中，“下来”既可以定义为词也可以定义为短语，但由于汉语词的构造和短语的构造具有一定相似性，无论我们采用何种界定，其内部构成均为动补式，依然符合动补结构基本的组合规则。因此“掉下来”可以视为是“II类+II类+IV类”的形式，“掉”与“下”均指示位移的方向，“来”指示位移和说话者的方位关系；而“掉到”则是“II类+III类”。（78d）中“上楼来”为“II类+……+IV类”，其中“楼”为标记位移参照物的方所成分，“拉过来”按照（78c）的规则可分解为“I类+III类+IV类”的形式，其中“过”为标记经过点的III类位移

动词。(78d)中的“回到”则属于“III类+III类”的形式。

在上面这些例句中,位移动词组合为动补结构基本按照“I类>II类>III类>IV类”的顺序排列,其中标记位移参照物的方所成分或标记位移主体的普通名词可置于III类位移动词和IV类位移动词之间,如例(78b)的“军部”、(78d)的“楼”,而同时也存在例(78c)的“掉下”、(78e)的“回到”这样两个同类型的位移动词连用的情况。此外也存在“IV类+III类”的例子,但仅限于“来到”和“去到”(一定语境下成立,语感上没有“来到”自然)两例。

由于表示位移的动补结构中要求有路径成分出现,因此同类型位移动词的连用一般是两个II类位移动词或两个III类位移动词的连用,此时具体位移动词的排列也并非任意的。在“II类+II类”的组合中,在V2位置充当补语的一般是“上”或“下”,除此以外的成员只能出现在主要动词V1的位置上;在“III类+III类”的组合中,充当补语的一般是专用以指示路径终点的“到”,如上文中的例子和下面的例(79):

(79)

(II类+II类)

- a. 大鸟比起人来,一个显著的优势是会飞,可以一瞬间升上高空,飘逝到邈邈远方,来去自由。(张炜《你在高原》)
- b. 可是奇怪,当那一夜,中国人民志愿军从北地赶来,冲风冒雪,跟他们一会面时,这些铁打的硬汉子忍不住掉下泪了。(《人民日报》1951年06月11日)

(III类+III类)

- c. 要打针的人,索性就直接进到严家门里了。(王安忆《长恨歌》)
- d. 出到舱外,灯影下竟无一人,阑外只听得涛声。(冰心《冰心全集第二卷》)

结合上述讨论,我们发现,位移动词组合为动补结构的方式并不是完全自由的,这种非自由一方面表现在语义上存在冲突的动词无法结合,如,“坠下”可以使用,而“\*坠上”则由于语义的冲突而无法组合;而非自由的另一方面表现在各类位移动词在组合的时候需要遵循一定顺序,如,同为“走”和“下”的组合,二者可以组合为“走下”但不能组合为“\*下走”,“上到”和“\*到上”亦是如此。

为探究位移动词的组合规则,我们将动补结构V1-V2中V1和V2的组合归纳为表4-1(I类以“跳、飞、漂”为例,II类以“掉、爬、上、下”为例,III类以“回、出、到、过”为例,IV类以“来、去”为例;其中“\*”表示无此说法,“?”表示语感不自然,但在—

定语境下可以使用或使用时需在 V1 和 V2 之间插入标记位移参照物或位移主体的名词性成分)：

表 4-1 位移动词的组合

V1 \ V2	I 类	II 类	III 类	IV 类
I 类	*跳飞、*飞漂	*掉跳、*上飞	*出跳、*到漂、* 过飞	*来飞、*去漂
II 类	*跳掉、飞上	*掉爬、掉下	*出掉、*出上、* 过下	*来掉、*去下
III 类	飞出、漂到	掉出、爬过	*回出、回到、*过 到	*来回、来到、? 去到
IV 类	飞来、漂去	*掉来、下来	回来、? 到去、过 来	*来去/*去来

我们将“? 去到”和“? 到去”标记为“语感不自然”是因为：“? 去到”组合的例句虽然存在，但在语感上没有“来到”自然，带有一定书面语色彩；“? 到去”在使用时一般不是将“到”和“去”直接组合，而是将“去”置于标记参照物或位移主体的名词性成分之后，即 V3 位置。例（80）中 a、b 两句为“? 去到”的例子，c、d 两句为“到……去”的例子：

（80）

- a. 我童霜威在此时此地去到上海，意味着什么呢？（王火《战争和人》）
- b. 校长只得允许了，我们退了出来，便去到医院。（冰心《冰心全集第一卷》）
- c. 你父母要是死在解放前，你们兄妹五个，现在已经不知都到哪里去了！（冰心《冰心全集第六卷》）
- d. 吴士幹听了这话，也没有说什么，便到别处去了。（张恨水《春明外史》）

除“? 到去”以外，在其他情况下，IV 类位移动词也会出现在 V3 位置，我们在第三章中也已经说过，可出现在 V3 位置是 IV 类位移动词和其他类型位移动词间的一个比较显著的区别，如：

（81）

- a. 小毕！拿相机来！小表弟高喊。（莫言《蛙》）
- b. 辽军的右翼部队在距他们二、三里路外的河岸地区，又开辟了新的渡口，用船只和木筏把大部队载运过河去。（徐兴业《金瓯缺》）
- c. 曼娘说：“你若把她处死刑，你可别把她带进家来。”（林语堂《京华烟云》）
- d. 即使她“什么都看不见”，她坚信自己一定可以回到后台去。（毕飞宇《推拿》）
- e. 凤喜进门来，见这间堂屋，就像一所大殿一样，里面陈设的那些木器，就像图画上所看到的差不多。（张恨水《啼笑因缘》）

例（81）中的四个例句均有后置（出现在作宾语的方所成分或位移主体之后）的表示路径的位移动词“来/去”，宾语前的动词部分既可以是如例（81a）和（81b）所示的不带路径成分的 I 类位移动词，也可以是如例（81c）-（81e）所示的可以表示路径的动词性成分。而在动词部分可以表示路径的情况下，动词部分也同时存在如上述例句各自所示的“I 类+III 类”、“III 类+III 类”、“III 类”等多种组合情况。有关 IV 类位移动词同其他位移动词的组合方式及其出现在 V3 位置的条件等内容，我们会在第 4.1.3 节中进行详细的分析，这里我们主要讨论出现在宾语前或无宾语情况下的连用的动补结构 V1-V2。

以上我们说的是两个位移动词组合为动补结构 V1-V2 的情况，此外也存在三个位移动词连用的情况，如例（82）所示：

（82）

- a. 小孩子坐到坑中半天，全身是脏水，眼见巡警已经走去了，皮鞋声音远了，才攀住一点东西爬起来，爬出到坑上，坐在地上哭了一会。（沈从文《腐烂》）
- b. 他惊觉地叹了一口气，便拿着照片架子走回到书房。（巴金《秋》）
- c. 他们一见人来，就匆匆忙忙地迎上来，表面往屋里让，其实是拦住你的去路。（魏巍《东方》）
- d. “这些我都让妈妈准备好了。我一会就给姐夫送过去。”少平轻轻说。（路遥《平凡的世界》）

在上述 4 个例句中，例（82a）的“爬出到”和（82b）的“走回到”均为“I 类+III 类+III 类”的形式，（82c）的“迎上来”为“I 类+II 类+IV 类”，（82d）为“I 类+III 类+IV 类”。可以看出，在三连位移动词中处于最前位置的均为 I 类位移动词，表示位移方式或位移原因，而处于中位与后位的两个动词由 II 类、III 类或 IV 类位移动词充任，均带路径成分，

且其组合与我们此前总结过的动补结构 V1-V2 相似。同时，I 类位移动词在组合时一般置于带路径成分的位移动词之前的这一特征也符合动补结构 V1-V2 的特征。因此，我们认为三连位移动词的实质是两层嵌套的 V1-V2 动补结构，即先将两个带路径成分的位移动词按照 V1-V2 的规律进行组合，再将其作为 V2，和由无路径成分的位移动词充任的 V1 组合为新的 V1-V2 结构。

结合上文所述内容，我们将表 1 中位移动词组合为动补结构的规律简化为表 4-2（其中“○”表示可以组合，“△”表示组合受限，“×”表示无法组合）。

表 4-2 位移动词的组合（简）

V2 \ V1	I 类	II 类	III 类	IV 类
I 类	×	×	×	×
II 类	△	△	×	×
III 类	○	○	△	△
IV 类	○	△	△	×

根据前面的讨论和表 4-1、表 4-2 中所示的内容，我们将各类位移动词组合为动补结构 V1-V2 时的组合规律总结如下：

①I 类位移动词在组合为动补结构 V1-V2 时只能进入 V1 位置，在由 I 类位移动词充任 V1 时，V2 位置可以是其他三类位移动词，但 II 类位移动词中能充当 V2 的成员只有“上、下”两个。

②II 类位移动词既可以进入 V1 位置也可以进入 V2 位置，但和 I 类位移动词充任 V1 的情况一样，可进入 V2 的 II 类成员也是受限的，仅限“上、下”两个，且当“上、下”充任 V2 时，只能由 I 类位移动词或 II 类位移动词中除“上、下”以外的成员充任 V1。而当 II 类位移动词进入 V1 位置时，III 类位移动词和 IV 类位移动词（部分情况下）均可与之搭配。

③III 类位移动词和 IV 类位移动词虽然同样既可以进入 V1 位置又可以进入 V2 位置，但二者在充当 V1 时，一般要求 V2 位置上的位移动词也为 III 类或 IV 类成员。III 类位移动词在充当 V2 时比 IV 类更加自由，主要表现在两个方面：第一，和 II 类位移

动词组合时，IV 类位移动词只能和 II 类中的“上、下”组合，而 III 类位移动词可以和 II 类中的所有成员（包括“上升、下降”等双音节的 C 组成员）组合。第二，III 类位移动词中的“到”可以和其他 III 类位移动词组合，即 III 类位移动词可与自身组合，而 IV 类位移动词不可与自身组合。但从另一方面来说，IV 类位移动词除了可以充任 V2 外，还可以出现在由标记位移参照物或位移主体的名词性成分充任的宾语之后（即 V3，我们会在 4.2 节中说明），这一特征是 III 类位移动词所不具备的。

#### 4.1.2 动补结构的路径特征

我们在 4.1.1 节中总结了不同类型的位移动词组合为动补结构 V1-V2 的规律，我们发现动补结构中既存在由不带路径成分的 I 类位移动词充任 V1，由带路径成分的 II 类、III 类或 IV 类位移动词充任 V2 的情况，也有 V1 和 V2 均由带路径成分的位移动词充任的情况。我们发现，位移动词组合为动补结构之后，整个结构的路径特征可能与路径动词单用时并不相同。本节我们将承接 4.1.1 的内容，讨论动词组合为动补结构 V1-V2 后路径特征的变化，即动补结构路径的特征与其内部各组成成员路径特征的差异。

Liu (2015) 从语义构成的角度探究了位移动词（包括介词）组合的规律。Liu 指出，位移动词的语义构成存在不同的类型，具体如图 3-1 所示，而位移动词组合时，动词间是否可以互相组合及动词组合后所形成的复合结构的语义都与作为构成元素的位移动词的语义成分有关，图 4-1 为位移动词及其语义组合规律的部分内容。

图 4-1 Liu (2015) 提出的动词组合规律

M+R	飞移, 飞经东京
M+R+D	飞落, 飞升, 飞移起 (身子)
M+R+D+E+(LocNP)	飞落下 (水面)
M+R+D+E+Deictic	飞落下来
M+R+D+E+到-LocNP	飞落下到水面
M+R+D+E+LocNP+Deictic	飞落下水面来
M+R+D+E+Deictic+LocNP	飞落下来水面
M+R+D+E+Deictic+到-LocNP	飞落下来到水面
M+R+D+E+到-LocNP+Deictic	飞落下到水面来
M+D	飞起, 飞往 (东京)
M+D+E+(LocNP)	飞上 (树梢)
M+D+E+Deictic	飞上去
M+D+E+到-LocNP	飞上到树梢
M+D+E+LocNP+Deictic	飞上树梢去
M+D+E+Deictic+LocNP	飞上去树梢
M+D+E+Deictic+到-LocNP	飞上去到树梢
M+D+E+到-LocNP+Deictic	飞上到树梢去

结合图 3-1 和图 4-1 的内容, 根据这一研究的主张, “飞”的语义成分为“方式(Manner, M)”, “移”和“经”的语义成分为“轨迹(Route, R)”, 二者组合而成的“飞移”、“飞经”的语义组成为“M+R”; “起、往”的语义成分为“方向(Direction, D)”, “飞起、飞往”的语义组成即为“M+D”。Liu 的主张揭示出了位移动词组合的规律, 这一解释可以用来说明位移动词组合时的前后顺序问题, 也有助于分析动补结构的语义构成。从前面的讨论中我们也可以发现, 动补结构中动词的组合确实基本符合“方式+连续型路径+离散型路径”的顺序, 这一点和 Liu 的主张基本一致。但 Liu 的分析忽略了一些问题:

首先, 该研究在位移动词的组合中并未提及两个动词出现相同语义成分的情况, 如, 根据图 3-1 所示, “流”的语义组成为“M+R”, “过”的语义组成为“R”, 在实际使用时二者可以结合为动补结构“流过”, 而研究中并未提及这种组合情况下的路径构成。

其次, 有时动词的组合并不是路径成分的简单加和, 事实上, 我们发现动词组合为动补结构后, 结构整体的路径性质并不一定同时受两个动词影响。有时结构整体的语义和语法特征只与结构中处于某一位置的成员相关, 这主要表现在两个方面:

第一, 动补结构与其后标记位移参照物的方所成分间的组合规律只受 V2 位置动词的路径特征影响。我们在第三章中提到, 不同路径类型的位移动词与其后标记位移参照物的方所成分的组合规律不同, 即位移动词和方所成分的组合受位移动词中是否带有路径成分和其路径是离散型路径还是连续型路径的影响。当两个位移动词组合为动补结构

V1-V2 时，结构和方所成分的组合一般受 V2 位移动词中路径的影响，与 V1 位置的动词无关。如：

(83)

- a. 见家霆等在那儿，说：“你回来啦！”同儿子一起进屋。（王火《战争和人》）
- b. \*见家霆等在那儿，说：“你回来啦！”同儿子一起到屋。（自拟）
- c. 花花儿到我家一二年后，默存调往城里工作，圆圆也在城里上学，寄宿在校。（杨绛《花花儿》）
- d. 逗得我们一阵笑声后，进到屋里。（李国文《听歌》）
- e. \*逗得我们一阵笑声后，进到屋。（自拟）
- f. 逗得我们一阵笑声后，进到我家。（自拟）

“进”与“到”均为 III 类位移动词，但二者对与之搭配的方所成分有不同的要求，“进”用来描述边界跨越事件，要求方所成分有明确边界，因此“进屋”的搭配成立，如例(83a)。我们在第三章的 3.3.1 节中曾经指出，“到”用来描述移动到某一地点的位移事件，要求方所成分在认知上有明确的位置，因此其后的名词一般是标记特定场所的专有名词，名词若是不定位的场所或空间物体，则需和方位词搭配使用。“屋”所指示的场所并没有定位性，例(83b)的“到屋”不成立，而将场所词换为具有特定位置的“我家”则可以使用，如(83c)所示。当“进”与“到”组合为动补结构“进到”后，与方所成分的组合如例(83d)-(83f)所示，与 V2 位置的“到”的规律相同。

第二，位移动词组合为动补结构后，动补结构与句中表示时态的成分的组合情况有时与结构成员的路径特征有关，有时也与其成员的路径特征均不相同。我们在第三章中曾经进行过讨论，离散型路径内包含路径的终点，因此带离散型路径的 III 类和 IV 类位移动词一般不与表示动作正在进行的成分组合，但 III 类和 IV 类成员和其他位移动词组合后有时也可用进行时。具体如例(84)：

(84)

- a. 这么忖度着，冒襄就发现自己正在掉进一个无底的深渊之中，其中只有黑暗，没有光明，即使侥幸能活下来，伴随着他的，也将是除了苦难，还是苦难……
- b. \*这么忖度着，冒襄就发现自己正在进一个无底的深渊之中……（自拟）
- c. 有一座古庙，古柏成林，郁郁葱葱，一些烧香的游客正在进出。（王火《战争和人》）



- d. 南部非洲发展共同体代执行秘书拉姆萨米强调，人类正在进入 21 世纪，经济全球化之风吹遍世界，非洲也不应该被遗漏。（《人民日报》2000 年 10 月 13 日）
- e. \*南部非洲发展共同体代执行秘书拉姆萨米强调，人类正（在）进 21 世纪，经济全球化之风吹遍世界，非洲也不应该被遗漏。（《人民日报》2000 年 10 月 13 日）

“进”为带离散型路径的 III 类位移动词，一般不与表示正在进行的语言成分共用，例（84b）中的“正在进……”表述不自然，但如果其与带连续型路径的“掉”组合为动补结构“掉进”，便可与“正在”连用，如例（84a），此时强调的是 V1 位置“掉”动作的持续。而同为 III 类位移动词的“进”和“出”组合为动补结构后也能与“正在”搭配，如例（84c），但该结构并非如例（84a）一样表示 V1 动作的持续，而是表示 V1 和 V2 动作反复进行。例（84d）是两个语义相近的 III 类位移动词组合的例子，二者组合后可与“正在”搭配，而单用时不可，可以比较例（84e）。

此外，我们提到，例（84a）中进行时强调的是 V1 位置动词动作的持续，因此，该结构在语法上是否自然还要取决于充任 V1 的动词是否可持续。在自主位移事件中，描述位移方式或位移状态的动词一般是可持续的，但在致使位移事件中也存在致使动作不可持续或很难维持持续状态的情况，如：

（85）

- a. 他双眉一锁，回头看时，紧挨他右边，有一只黑手拿着半个大馒头正在塞进一个猫脸的人的嘴里去。（鲁迅《彷徨》）
- b. 二哥飞起一脚，把她踢进了黄麻地。（莫言《天堂蒜薹之歌》）
- c. ? 二哥正在把她踢进黄麻地。（自拟）

例（85a）的“塞”是可持续的致使动作，可伴随位移过程的始终，“塞进”与“正在”搭配较为自然；而例（85b）的情况与之不同，“踢”的动作很难维持持续的状态，“踢进”与“正在”的搭配在语感上就有不自然之处。“扔、打、投、刺、锁”等也有类似的情况，这些动词有时也可同表持续的语言成分共现，但其中在认知上越是难以维持持续状态的动作在搭配时就显得越不自然。

结合此前的研究和我们在上文中指出的语言现象，我们认为位移动词 V1 和 V2 组合为动补结构 V1-V2 时并非语义和路径的“组合”，而是二者的“融合”。这种“融合”在路径方面有时表现为 V1-V2 的路径为 V1 与 V2 路径的前后承接，有时表现为 V1-V2 的路

径为 V1 与 V2 路径的重复或叠加。因此，V1-V2 和句中表示时态的成分之间组合的情况既可能单独受 V1 位置或 V2 位置中某一成员的影响，也可能和 V1 与 V2 均不相同，即动词的路径在“融合”后出现了新的特征。

基于这种不平衡的现象，我们推测，在动补结构 V1-V2 中，V1 和 V2 并非均等地表现出各自的语义特征（主要指位移方式、原因与位移路径的特征），而是依照其位置不同被凸显语义构成中的不同侧面。其中 V1 位置被凸显位移的方式、原因或位移的轨迹，因此更容易影响 V1-V2 与表达进行时的成分组合；V2 位置被凸显位移的终点，因此更容易影响 V1-V2 与表达完成的语言成分及指示位移参照物的方所成分的组合。动补结构对不同位置成分的语义凸显在非路径的语义层面也有所体现，如，“（坐地铁）坐到机场”中“坐”凸显位移时位移主体的状态，而“到”则凸显位移终点，此时“到”所体现出的位移主体的意志性已经弱于“到机场”中单独使用的“到”。

而从另一个角度来看，由于 V1-V2 结构的这一凸显作用，两个位移动词组合为动补结构时，描述位移方式、原因的 I 类位移动词、描述位移趋势的带有连续型路径的 II 类位移动词更容易出现在 V1 位置，III 类位移动词中具备一定表达位移轨迹能力的“回、进、出”等，也可置于轨迹表达能力较弱的“到、来、去”之前。而对位移轨迹的表达能力较弱的位移动词“到、来、去”除三者互相组合外，一般只出现在 V2 位置。

#### 4.1.3 小结

我们在这一部分中讨论了位移动词组合为动补结构的规律以及动补结构整体路径特征和其成员路径特征间的差异，经过总结和归纳，我们发现：

在位移动词 V1、V2 组合为动补结构 V1-V2 时，I 类位移动词只能处于 V1 位置；II 类位移动词既可以充任 V1 位置也可以充任 V2 位置，但可进入 V2 位置的 II 类成员仅限“上、下”两个；III 类位移动词和 IV 类位移动词虽然同样既可以进入 V1 位置又可以进入 V2 位置，但 III 类位移动词在充当 V2 时拥有比 IV 类更加自由的组合关系，而 IV 类位移动词的特殊之处表现在其除了可以充任 V2 外，还可以出现在标记位移参照物或位移主体的名词性成分之后，即 V3 位置。换言之，当两个位移动词组合为动补结构时，若其中一个位移动词不带路径成分，此不带路径成分的位移动词往往前置，若两个位移动词带路径成分，则带轨迹的弱路径位移动词倾向于出现在不带轨迹的强路径位移动词之前。

在动补结构与其成员路径特征的关系方面，位移动词组合为 V1-V2 后，V1-V2 整

体的路径在语义上体现出 V1 路径和 V2 路径的顺接关系，但 V1-V2 的路径并不是两个位移动词路径的顺序相接。除由 I 类位移动词充任 V1 时出现的由 V2 独自承担路径表达功能的情况外，在 V1 和 V2 均由带路径成分的 II 类、III 类与 IV 类位移动词充任的情况下，V1-V2 的路径也既可能是 V1 与 V2 路径的顺序承接，又可能是 V1 与 V2 的重复或叠加。

此外，由于动补结构 V1-V2 的路径并不是动词 V1 和 V2 的简单的顺序组合，因此 V1 和 V2 两个动作在组合时并不一定是按照事件发生的时间顺序进行排列的，二者也因各自属性及位移事件特征的不同而存在先后、并列、“后先”等不同“时间顺序”，相关内容我们将在 4.3 中进行讨论。

## 4.2 动补结构中的 IV 类位移动词

### 4.2.1 IV 类位移动词的位置及路径特征

IV 类位移动词是带指示路径的位移动词，在汉语中主要是“来”和“去”，但并非所有语言都有成对使用的表达指示路径的位移动词。在汉语中，IV 类位移动词的语义和用法总体上来说是具有对应关系的，且 IV 类位移动词在句法特征上面和 III 类位移动词具有一定相似性，即从语义特征上来说，汉语 IV 类位移动词的路径可被视为带指示成分的离散型路径。

但 IV 类位移动词在使用时也存在一些和 III 类位移动词不同的语义和语法特征，首先表现在 IV 类位移动词将位移事件和说话者所处的时空环境结合在一起，体现了说话者的主观性，其次也表现在它们在句中不仅能单独充任主要动词 V（包括在动补结构 V1-V2 中充任主要动词 V1），或在 V1-V2 动补结构中充任补语 V2，也能用在宾语之后，充任 V3，如例（86）所示，：（以“来”为例）

（86）

- a. （V/V1）然后，他出了门，去两个村召集演节目的孩子们来学校，准备晚上开晚会。（路遥《黄叶在秋风中飘落》）
- b. （V2）课桌不够，就把长凳、短凳、饭桌也搬来学校。（《人民日报》1974年01月28日）
- c. （V3）他们因为明天一早走，不敢多玩，炳星便又将他们送湖滨旅馆去，在那里和王校长又谈了一会子话，才回到学校来。（冰心《我自己走过的路》）

三种情况下 IV 类位移动词（以“来”为例）的语义特征分别如例（87）-（89）所示：  
（带括号的成分表示实际使用时可以缺省，例子均为自拟）

（87） V1 + （V2） + （宾语）

- a. 来                      学校
- b. 来      到              学校
- c. 来

例（87）所示的是“来”单独充任位移表述主要动词或动补结构 V1-V2 中的主要动词 V1 的情况，此时可后接 III 类位移动词中的“到”组合为动补结构后再接处所宾语，可直接后接处所宾语，也可在无处所宾语的情况下单独使用。在这三个例子中，“来”不仅有“位移主体向说话者的方向移动”的语义，即指示路径的基本功能，在（87a）和（87c）中也独自承担指示位移终点的作用，具备类似 III 类位移动词的离散型路径的特征。但“来”后可以不接标记参照物的名词性成分，如例（87c）所示，此时位移的参照物为说话者设置的观察点。（87a）和（87b）的位移路径和位移参照物均相同，可用来描述相同的位移事件，但二者也存在一些不同之处：（87b）更加强调位移主体已经抵达所示场所中的结果，可用于表达未然事件，如“明天打算来学校”，而“\*明天打算来到学校”一般不能使用。

我们认为，IV 类位移动词充当位移表述主要动词时的语义组合为“指示路径+（离散型）一般路径+位移参照物”（“一般路径”指非指示的路径），当组合中没有出现其他能够表达一般路径或位移参照物的成分时，可由 IV 类位移动词表达这些语义内容。

（88） V1 + V2 + （宾语）

- a. 走    来    学校
- b. 上    来
- c. 到    来

例（88）中，“来”都充任动补结构 V1-V2 中的补语 V2，而充任主要动词 V1 的位移动词的性质不同。（88a）由 I 类位移动词充任 V1，此时的“来”不仅带有指示路径的语义，也具备表示位移终点的离散型路径的功能，如“因负担过重，不能安生，该地民众纷纷逃来解放区（《人民日报》1946 年）”。（88b）中 V1-V2 结构整体的路径为连续型路径，除“上”外，“回”和“过”等也可充任 V1，且此时的 V1-V2 均为连续型路径，且都不可再后接表示处所的宾语（处所宾语只能出现在两个位移动词之间，由“来”充任 V3，详见后文）。（88c）的结构和（88b）相似，也不可后接处所宾语，区别在于（88c）

在语义上有位移终止点，表现出离散型路径的特征，但（88c）可作为名词性成分使用，如“他的到来显然与鉴别古画的事有关（张炜《你在高原》）”，这种用法是其他类似组合所不具备的。

因此，当 IV 类位移动词充当动补结构 V1-V2 的补语 V2 时，其语义组合一般表现为“指示路径+一般路径+位移参照物”。当 V1 为不带路径信息的 I 类位移动词时，一般路径表现为离散型路径，当 V1 为带路径信息的 II 类或除“到”以外的 III 类位移动词时，一般路径表现为连续型路径，当 V1 为“到”时，一般路径表现为离散型路径。

（89） V1 + （V2） + （处所） + V3

- a. 走      到      学校      来
- b.        到      学校      来
- c. 走      上      石阶      来

例（89）中的“来”均出现在处所宾语之后。（89c）在语感上没有其他两句自然，但在实际使用时也存在“这一次在她又有意地伴倒了两个男人之后，其中的一个在手臂上流出了一些血，这才满足地穿上那高跟黑皮鞋，跑上石阶来（胡也频《到莫斯科去》）”的用例，因此我们将其视为 IV 类位移动词组合的一种情况。观察例（89）可以发现，在三个例句中，即使去掉 V3 位置的“来”，句子依然符合语法，位移事件的客观事实（位移事件构成要素的内容）也并未改变。因此我们认为，此时“来”仅具备传递“移动主体的移动是远离观察者还是接近观察者”这一信息的指示功能。

由此可以推出，当 IV 类位移动词出现在标记位移参照物的处所宾语之后充任 V3 位置时，其语义表现为“指示路径”。而关于仅表指示路径的 IV 类移动动词一般位于处所宾语后方的原因，陈忠（2007）指出，“处所成分是内参成分，非直指性路径动词是内参式位移动作，处所成分与内参式位移动作之间的语义关系最为密切。说话人所在的位置是外参成分，非直指性路径是外参式位移动作，处所成分与外参式位移动作之间的关系不如内参式位移动作与处所成分之间的关系密切”。

根据上面的分析与讨论，我们将 IV 类位移动词在不同句法位置上的语义构成总结为表 4-3：

表 4-3 不同句法位置上的 IV 类位移动词

	语义构成	备注
V1(包括单独使用无 V2)	指示路径+一般路径+位移参照物	一般路径为离散型路径
V2	指示路径+一般路径+位移参照物	V1 为 I 类位移动词，一般路径为离散型路径； V1 为 II 类位移动词或“到”以外的 III 类位移动词，一般路径为连续型路径； V1 为“到”，一般路径为离散型路径
V3	指示路径	

#### 4.2.2“来”和“过来”的对比

汉语中的“来”与“过来”都是用来描述由远及近位移的动词性成分，二者语义相似，也均可充当句子的主要动词及动补结构的趋向补语，但它们在使用时又存在一些不同之处，如下面这些例子：

(90)

- a. 是你同意我请她们过来的，为什么看见董茜茜一言不发？不喜欢人家，也应该有个原因啊！（岑凯伦《豪门奇谭》）
- b. 是你同意我请她们来的，为什么看见董茜茜一言不发？不喜欢人家，也应该有个原因啊！（自拟）

(91)

- a. 另一名小伙子过来道：“老大，不能带她走呀！咱们只是花钱演演戏。”（林芷薇《依本佳人》）
- b. \*另一名小伙子来道：“老大，不能带她走呀！咱们只是花钱演演戏。”（自拟）

(92)

- a. 你先回去吧，营长，我们决不能让坦克过来！（巍巍《东方》）
- b. 你先回去吧，营长，我们决不能让坦克来！（自拟）

三组例句中的 b 句均为将 a 句中的“过来”替换为“来”而得出。对比三组例句可以发现，例（90b）在语法上依然成立，且语义基本与例（90a）相同，此时“来”与“过来”可

互换使用；例（91）的“过来”替换为“来”后，句子在语法上不成立；例（92b）在语法上成立，但（92a）、（92b）两句语义不同，在（92a）所处的语境条件下只能使用“过来”。由此可见，“来”与“过来”虽然在语义和用法上有诸多相似之处，但二者并非完全等价，在具体语境中仍存在二者无法替换使用的情况。

母语者往往能够依照语感自如选择适当的表达，但学习汉语的外国人却可能在产出“来”或“过来”时出现混淆。例（93）即是从 HSK 动态作文语料库中检索出的相关错误用例：（括号中为笔者根据语料库标注做出的修改）

（93）

- a. 是因为我有一个很好的朋友，他是为了学医到中国过来的。（来）
- b. 我们目前只等待这日子的过来，不得不吃被化学污染的食品。（到来）
- c. 在日本有一个成语“集合三个人就文珠（殊）之智慧”，我想这可能从中国过来日本的。（传来）
- d. 从大连坐飞机坐到成田机场，到了机场就看到妈和哥哥，他们接我到机场过来了。（来机场接我/到机场来接我）

从上面的错误用例中能够看出，学习者产出“来”和“过来”时在句法组合和语义搭配方面都存在误用现象。因此，认识和把握二者的异同之处不仅有助于我们深入地了解汉语中位移表述的相关规律，也有助于预见和解决汉语教学过程中出现的问题。

为探究“来”与“过来”用法上的差异并为语言学习和语言教学提供参考，我们拟从“来”与“过来”的语义着手，以具体的例句为材料，探究二者在位移事件表述中充当主要动词和趋向补语时用法上的异同及差异的成因。

#### 4.2.2.1“来”与“过来”的概念意义

“来”与“过来”都是用于表示位移的、带有指示性质的动词性成分。需要说明的是，关于“来”和“过来”是否为同一级语言单位的问题，不同研究者的看法不尽相同。赵元任（1980）将“来”和“过来”都归入到表示“来”的不及物动作动词中，认为“过来”是动-补式复合词。朱德熙（1982）则将“过来”视为动补结构的短语，认为“来”是“过”的趋向补语。我们在 2.1 节中将“过来”视为 V1-V2 类的动补结构，但在本节的讨论中，为了便于对比和分析，我们将“过来”视为与“来”同级的语言单位，以下均称为“词”。

前面我们已经指出，在一定情况下，充当位移表述主要动词的“过来”可与“来”互换，而在一定情况下则只能使用“过来”。相同的情况也出现在下面几组例句中：

（94）

- a. 如果你有自信这栋房子的各项安检都合格，你可以立刻去请警察过来。（夏娃《水样恋冰清》）
- b. 我不放心，所以过来看看。（林如是《十七岁的纯情》）
- c. 沈小姐，你别听少爷胡说，快过来吃。（夏娃《爱上坏男人》）
- d. 蓦地——身后传来一个苍劲震耳的声音道：“娃儿，过来！”（陈青云《丑剑客》）
- e. “那我吃完饭过来。”“不不，你千万别过来，没准我们就要出去，千万别过来。”（王朔《玩的就是心跳》）

(95)

- a. “天不早了，我们该往回走啦！”于二龙朝他走过去。“支队长，你别过来”他抱着于莲，背冲着于二龙，不让他看到孩子地继续躲着。（李国文《冬天里的春天》）
- b. 可我还是向它摆手，我说你不要过来，不要过来。（张炜《你在高原》）
- c. 这些东西都是我偷偷准备的，我虽不能过来，可离远处一看暖暖的身子，就知道该办这些东西了。（周大新《湖光山色》）
- d. 他朝秀米走过来了。“别过来，你不能过来，不能。”秀米叫道。（格非《江南三部曲》）

(96) 父亲说：“有冈日森格和大黑獒那日，它敢过来？”（杨志军《藏獒1》）

例(94)的“过来”均可替换为“来”，例(95)的“过来”均不可替换为“来”，例(96)是否可替换要结合情景语境才能判断。我们对上述各组例句进行观察即可发现，只能使用“过来”的例句一般同时满足如下两个因素，而在两个因素不能同时满足的情况下，“来”与“过来”均可使用。

因素1：表达制止、禁止或否定的语义。

因素2：位移主体具有临场性，即位移主体和说话者处于同一时空环境。

在可将“过来”替换为“来”的例(94)中，(94a)和(94b)是陈述位移过程本身，不满足因素1，且其所涉及的位移主体在位移起始时均不在发话现场，不满足因素2；(94c)和(94d)满足因素2，但句子本身没有表达制止、否定等含义，不满足因素1；(94e)中的后两个“过来”满足了因素1，但在位移发生的时间点上，位移主体和说话者并不处于同一时空环境中，不满足因素2，这一点可以对比结构相似但同时能够满足因素2的(95a)。而例(96)也揭示了临场性对“来”与“过来”使用情况的影响，在位移发



生的时间点上，若例句中所指的“它”处于发话现场（临场），则只能用“过来”，若“它”不处于发话现场（非临场），则“过来”与“来”均可使用。

认知语言学认为句法结构与概念结构间存在对应关系。王寅（2007）基于认知语言学的观点指出，一个事件可以包含多个行为要素和事体要素，在日常交际中往往根据需要选择其中的一部分信息来代表事件整体，即“实际场景信息=言语信息+缺省信息”，而其认知基础是以部分代表整体的转喻关系。也就是说，即使是描述同一个事件，说话者也可以根据不同的表达需要，选择不同的角度进行叙述，最终形成不同的表达方式。我们由此推测，造成“来”与“过来”使用方式差异的原因是二者语义特征中的某些差异信息在具体语境中是否能被设置为缺省信息。

我们认为，“来”与“过来”语义特征的差异在于，“过”增加了表示“过程”的语义内容，使“过来”能够适应需要凸显位移过程的语境；单纯的“来”不能表达“过程”，不能满足特定语境对凸显位移过程的要求。Lakoff（1987）认为人类在身体经验的基础上形成一定意象图式（Image Schema），并以意象图式为基础形成句法结构，“始源—路径—目的地（Source-Path-Destination）”就是人类的动觉意象图式之一。Liu（2015）讨论了位移词（动词性成分）组合形式的语义构成，指出“过”的语义成分中包括“轨迹（Route, R）”，“来”包括“指示（Deictic）”，“来”与“过来”的区别在于前者的语义成分仅为“来”所表示的“指示”而后者为“过”与“来”组合而成的“轨迹+指示”。Liu 文中的“轨迹”指“位移行进过程的轮廓”，与 Lakoff 动觉意象图式中的“路径”相似，均表示位移的“过程”。因此，在表达制止、禁止或否定且位移主体具有临场性的事件中只能使用“过来”为主要动词的原因：位移并未发生或发生但并未结束，说话者的目的在于防止、制止或否定位移动作本身，凸显的是位移过程而非位移结果，“过程”不能被设置为缺省信息，而这一信息需要由“过”的语义来表达。相对的，在“过程”可被设置为缺省信息的语境中，说话者可以根据自己的视角和表达需要选择是否将这一信息外显在语句中，由此形成了“来”与“过来”可互换的情况。

根据上述分析，我们做出如图 4-2 和图 4-3 所示的“来”和“过来”的概念意义示意图。

图 4-2“来”的概念意义

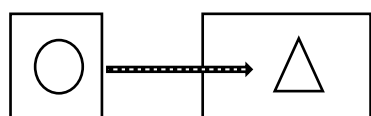


图 4-3 “过来”的概念意义

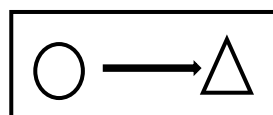


图 4-2 表示“来”的概念意义，图 4-3 表示“过来”的概念意义。图中圆形表示位移主体，三角形表示说话者，四边形内部的范围表示概念意义的范围，箭头表示位移动作。“过来”的概念意义既涵盖位移主体和说话者，也涵盖位移动作的整个过程；“来”的概念意义则仅涵盖位移主体和说话者，位移动作仅涵盖其指向，并未涵其整个过程。

#### 4.2.2.2 作趋向补语的“来”与“过来”

第 4.2.2.1 节我们根据“来”和“过来”单独充当位移表述主要动词时可替换和不可替换的两种情况分析了影响其是否可替换的因素及二者概念意义的差异。但“来”和“过来”除了可以单独充当主要动词以外，也可以作为趋向补语接续在其他动词之后，做补语使用的“来”和“过来”也存在可替换和不可替换的情况，本节将基于 4.2.2.1 的内容分析影响趋向补语选择的因素。

动补结构中补语“来/过来”的使用至少受动词音节数和动词词义两个方面的影响，下面我们将分别从这两个方面进行叙述。

##### A. 动词的音节数

不同音节数的语言单位组合会形成不同的韵律结构，在汉语中，韵律结构与句子合法性之间存在着密切的联系。吕叔湘（1980）指出，汉语单双音节会对词语结构造成影响，“双音节的词……往往要求在它后边跟它搭配的词也是双音节”。冯胜利（2000）强调韵律对句法的影响，认为句法不能独立于语音之外，发音习惯（韵律）既可以打乱原有的成分结构，也可以使非法变成合法或使合法变成非法。我们发现，动词的音节数也会对“来”和“过来”的使用造成影响，如下面几组例句：

(97)

- a. 国内有家信寄过来，总会迫不及待地拆开，一读再读。（《人民日报海外版》2001-8-13）
- b. 老林哥可能正忙于随军南下，无暇细细一一写来，便把名册索性给他寄来。（李国文《冬天里的春天》）

(98)

- a. 原来，从芦苇丛里游出来两条水蛇，花花绿绿，扭摆着身子，浮在水面上，昂着头，朝舢板游过来。（李国文《冬天里的春天》）
- b. 此时有什么东西向窗边游来，叶莲子激动地想，难道有人来救她们？（张

洁《无字》)

(99)

- a. 就在双方的人同时抢出之际, 突然一道人影宛如从天而降, 一把挟起葛真吾, 左手一掌朝赵雷等三人横扫过来。(东方玉《东方第一剑》)
- b. \*就在双方的人同时抢出之际, 突然一道人影宛如从天而降, 一把挟起葛真吾, 左手一掌朝赵雷等三人横扫来。(自拟)

(100)

- a. 我不知为什么, 觉得那些白色的花, 好像有灵性似地尾随着这个女人, 总也不肯离开似地飘落过来。(李国文《桐花季节》)
- b. \*我不知为什么, 觉得那些白色的花, 好像有灵性似地尾随着这个女人, 总也不肯离开似地飘落来。(自拟)

上述各组例句中, a 和 b 两句划线部分的动补结构均使用了相同的动词, 区别在于 a 句的补语为“过来”, b 句的补语为“来”。不难发现, 动词的音节数会影响其与“来”、“过来”的组合, 表现为: 当动词为单音节词时, “来”和“过来”均可充当动词后的趋向补语, 如例(97)和例(98); 当动词为多音节词时, 补语一般选用“过来”, 如例(99)、(100)。如果我们将例(99)和例(100)中的动词替换为语义相近的单音节动词, 如下面的例(101)和例(102)所示, “来”便可以出现在补语的位置上。

(101)

- a. 她站在那儿屏了息久久没动, 直到一道手电光亮朝她扫过来, 她才扭过头去看来人。(周大新《湖光山色》)
- b. 接着顶上冒出来的白浪花又有力地向船上扫来。(巴金《家》)

(102)

- a. 钟其民的箫声此刻又在雨中飘来。(余华《夏季台风》)
- b. 这时他听到远处有一个声音飘过来, 那声音也在喊着疯子回来了。(余华《河边的错误》)

值得注意的是, 音节虽然会影响“来”和“过来”的选择, 但其影响并非强制的。可以参考下面这些例句:

(103)

- a. 吴克诚朋友带来一些水果, 说叫“芭乐”, 刚从台湾空运过来的。(《文汇报》2005-7-31)

- b. 自去年 11 月起，他们在拉萨开始经营插花艺术，鲜花全部由成都空运来。  
(《人民日报》1996)

(104)

- a. 当他一听到他最心爱的女人在房中发脾气时，便立刻飞奔过来了。(于澄心《霸占你的心》)
- b. 我看到从人民公园那边飞奔来了两只毛色斑斓、眼放凶光的猛兽……(莫言《十三步》)

(105)

- a. 谁知灰衣人却摇头道：“那倒不必，他自己走得过来的。”(古龙《蝙蝠侠》)
- b. \*谁知灰衣人却摇头道：“那倒不必，他自己走得来的。”(自拟)

(106)

- a. 曹学义和那个公社干部走了过来。(张贤亮《男人的一半是女人》)
- b. 他们一定又是等米下锅，要不然这么热的天，不会老远从乡下走了来。(张爱玲《怨怒》)

可见双音节动词中既存在如例(99)和(100)这样只能与“过来”搭配的，也存在如例(103)和(104)这样可以同时与“来”和“过来”搭配的，而例(105)和(106)则揭示了单音节动词与助词组合为双音节结构后与“来”和“过来”搭配的情况，“走得”组合只能与“过来”搭配，而“走了”组合既能后接“来”也能后接“过来”，但“走了来”这样的用法带有一定文言色彩，在日常对话中的使用是受限的。

经过上面的分析，我们可以得出如下结论：动词的音节数会影响“动词+来/过来”的合法性，多音节动词更倾向于同多音节的“过来”搭配。但音节数对合法性的影响并不总是形成“符合语法”或“不符合语法”两种极端的结果，而是在具体的语境中影响母语者的“接受程度”。除音节数外，语体风格、语言习惯，甚至广义上的韵律和对举、对称关系等也会给母语者的接受与选择造成影响，这些影响因素在具体语境中的表现及其程度还有待更深入的研究。

## B. 动词的词义

我们在上文中指出，多音节动词更倾向于同“过来”搭配，单音节动词则没有这种倾向。但我们也发现，同为单音节动词，不同的词与“来”和“过来”的搭配也存在不同情况，如：

(107)

- a. 旷开田显然没想到暖暖会朝他动手，他躲闪开那一击之后，猛地扑过来，一边狠踹暖暖一边气歪了脸吼：你这个贱女人，你还敢打我了？！（周大新《湖光山色》）
- b. 那个孩子像被牵着线的木偶一样，猛然折身，向我的车轮扑来……（毕淑敏《赔》）

(108)

- a. 为了保证湘菜的原汁原味，湘缘做菜的调料和大部分原料都是从湖南寄过来的（《都市快讯》2003-4-4）
- b. 放心，我一回云南就给你们把钱寄来。（王旭烽《茶人三部曲》）

(109)

- a. “今天去哪里？”随车的一位小姐靠过来笑问我。（三毛《送你一匹马》）
- b. \*今天去哪里？”随车的一位小姐靠来笑问我。（自拟）

(110)

- a. 我发现母子两人的目光看过来，像望着一个陌生人。（张炜《你在高原》）
- b. \*我发现母子两人的目光看来，像望着一个陌生人。（自拟）

例（107）、（108）中的动词“扑”、“寄”后面的趋向补语既可以是“来”也可以是“过来”，与之不同，例（109）、（110）中的动词“靠”、“看”只能与“过来”组合。因此，除音节数以外，应当还存在其他影响“动词+来/过来”结构合法性的因素。刘月华（1998）比较趋向补语“V 过来”与“V 来”时曾指出二者可搭配的动词不完全相同，但文中仅列举了部分不能直接与“来”组合的动词及较少与“过来”组合的词，并未对这些词的特征进行总结。

我们知道，词作为一种语言单位，也是音义的结合体，因此除语音因素之外，词义也有可能成为影响句子合法性的因素。为探究动词词义对其补语“来/过来”的限制，我们将从 BCC 语料库中随机抽取的符合“V 过来/来”结构的语料进行整理，将不同动词与趋向补语“来/过来”搭配的情况总结为表 4-4。（为排除音节数的干扰，我们仅以单音节动词为例）

表 4-4 动词与趋向补语“来/过来”的搭配情况

第一类：可与“来”和“过来”搭配	第二类：与“来”搭配受限
A 组：走、跑、飞、扑、飘、爬、涌……	A 组：靠、围、坐、挤、躺……
B 组：寄、打、抢、抓、运、拉、偷……	B 组：看、望、瞧；转、倒（倒转）、扭……

表 4-4 中的第一类（左栏）为既可与趋向补语“来”搭配也可与趋向补语“过来”搭配的动词，第二类（右栏）为一般与“过来”搭配而与“来”搭配受限的动词。通过对比第一类和第二类动词，我们发现，两类动词的主要区别在于其是否主要用于描述物理层面真实发生的位移。第一类动词所描述的位移事件通常状况下均是物理层面的、真实发生的，其中 A 组用来描述自主位移，B 组用来描述致使位移。第二类动词中的 A 组一般用于描述静止的状态，仅在特定的情况下被借用描述位移事件；B 组中的“看、望、瞧”用来描述视线的方向，“转、倒、扭”描述朝向的变化，这些事件往往不是在物理层面真实发生的，而是被人类认知理解为位移的非位移现象。

Talmy 发现语言中存在一些使用位移动词描述静止物体空间关系的“虚拟位移 (fictive motion)”现象并将虚拟位移分为“发射路径 (emanation paths)”、“模式路径 (pattern paths)”、“相对框架 (frame-relative)”、“出现路径 (advent paths)”、“通达路径 (access paths)”和“延伸/覆盖路径 (coextension/coverage paths)”六种，视线的方向与朝向均属“发射路径” (Talmy, 1975; Talmy, 2000a)。柯理思 (2017) 指出，汉语中表示视觉方向的虚拟路径一般使用介词结构而非补语，如“（没事就爱蹲在那儿）扒着钥匙眼儿往里窥视”中的“往里窥视”替换为“看进去”则不太自然，能表达视觉方向的补语除“过去”这类表示指示的动词外仅有“上去”等少数几个，但没有明确区分同表指示的“来”和“过来”。刘月华 (2004) 则指出了“来”和“过来”在描述朝向变化时的不同，将“来”的语义描述为“表示通过动作，人或物体立足点移动”，而在描述“过来”的语义时，在“来”的义项之外增加了“表示通过动作，人或物体改变方向——面向立足点”的义项。可见物理位移和虚拟位移在认知上的相似性使得语言中借助位移动词描述虚拟位移成为可能，但二者的表述方式并非完全一致。

结合上文对搭配情况的总结及相关理论和研究成果，我们发现，动词词义对“动词+来/过来”合法性的影响表现为：

- 1) 主要用于描述物理层面的、真实发生的位移的“走、跑、寄、打”等“典型位移动

词”，可与“来”及“过来”二者搭配。

2)一般用于描述静止状态、仅在特定情况下被借用作位移动词使用的“靠、坐”等“非位移动词”以及描述视线方向和朝向变化类虚拟位移的“看、望、转、倒（翻转）”等“非典型位移动词”与“过来”的搭配较为自由，而与“来”的搭配受限。

需要说明的是，我们说“非位移动词”和“非典型位移动词”与“来”的搭配受限是因为它们在一些情况下也可与“来”搭配，表现为：

第一，一些动词用于陈述（assertion）时不能搭配“来”，用于指称（designation）时可与“来”搭配。可比较例（109b）与（111a）、例（110b）与（111b）。

（111）

- a. “不要啦！好痛哦！”她推开他靠来的头。（梦雪《拦截爱情记忆》）
- b. 我发现母子两人看来的目光，像望着一个陌生人。（自拟）

第二，一些在独立使用时不能搭配“来”的动词，在与表示位移方向的介词短语组合后可与“来”搭配，可比较例（109b）与例（112a）、例（110b）与例（112b）。

（112）

- a. 众女子也向邱少清靠来，这使邱少清大感其难。（鬼谷子《无名神功》）
- b. 她把眼光转向母亲，恰巧岑仁芝也正好向女儿看来，粤生当然留意到母亲那丝宽慰的笑容，可见，岑仁芝也知道了。（亦舒《预言》）

我们认为，动词词义与其补语“来/过来”搭配限制的实质是位移事件特征对路径表达方式的限制，也是人对不同位移事件类型（是否为虚拟位移）的认知在语义和语言结构上的不同反映。

我们已经介绍过，Talmy（1985，2000b）认为位移事件的概念框架由位移主体（Figure）、运动（Motion）、路径（Path）和参照物（Ground）四个要素构成，其中位移主体和参照物分别指发生位移（或静止）的主体和为其位移提供参照的主体，路径指位移主体相对于参照物所遵循的路线（course）或占据的位置（site），运动指位移或定位事件本身。Talmy从词汇化模式和类型学的角度指出，英语和汉语的路径要素一般被包含在动词的卫星成分（包括动词的词缀和与主要动词搭配的介词、补语等成分）中，这两种语言都有一套用来专门表示路径的卫星成分（英语的“in”、“out”，汉语的“去”、“过”等），而西语则将路径要素包含在主要动词的词干中。以此为基础，Talmy又将语言分为动词框架语言（Verb-Framed Language）和卫星框架语言（Satellite-Framed Language）两类，前者指用动词表记核心图式（core schema，主要指路径和参照物两个要素，特别

是其中的路径要素)的语言,包括罗曼语族、闪语族、日语、泰米尔语等,后者指用卫星成分标记核心图式的语言,包括印欧语系中非罗曼语族的语言、芬兰语、汉语等。

Talmy 的理论提出后,许多研究者围绕语言类型二分法合理性和各语言所属类型的问题发表了自己的观点(李雪,2012)。在汉语的类型归属方面,不同研究者的看法不尽相同,有的研究者基本赞同 Talmy 的观点,认为汉语是非典型的卫星框架语(沈家煊,2003);有的研究者则认为汉语位移事件表达存在单用趋向动词和用动词与趋向补语组合两种情况,因此汉语属于混合类型的语言(柯理思,2003);还有研究者认为汉语重结果,因此补语是主要成分(Tai,2003),基于这一主张,汉语也可以被视为动词框架语言。虽然研究者的看法存在一定分歧,但大多数研究者都认同用动补结构表示位移时,核心图式是由补语来标记的。

以上述理论和主张为基础,我们可以认为,在表示位移的动补结构“动词+来/过来”中,补语“来”与“过来”均是表达位移事件路径要素的句法成分。本节中我们分析了动词词义对动词与补语“来/过来”搭配的影响,而动词词义差异所代表的其实是不同的位移事件特征(是“物理层面的位移”还是“虚拟位移”)。而我们在第二章中也已经论述过,“来”和“过来”概念意义的范围不同。我们据此推测,动词词义影响下的“动词+来/过来”组合,实质上是位移事件特征对其路径表达方式的选择,同时也是人对客观世界的认知在语义和语言结构上的反映。

#### 4.2.2.3 小结

“来”和“过来”都表示由远及近的位移,二者的语义和用法有很大的相似性,但在一些语境下不能互换使用。

“来”和“过来”在单独充当位移表述主要动词时能否互换使用主要受句子是否表达制止、禁止或否定的语义及位移主体是否具有临场性影响。造成差异的主要原因在于“来”和“过来”概念意义的差别,即表示轨迹的“过”为“过来”增加了描述位移“过程”的语义成分,因此在不能将过程信息设置为缺省信息的语境下只能使用“过来”。

在“来”和“过来”充当趋向补语构成的“动词+来/过来”结构中,动词与“来、过来”搭配的情况主要受动词音节数和动词词义影响。音节方面,单音节动词既能与“来”搭配又能与“过来”搭配,多音节动词更倾向于和“过来”搭配;词义方面,“典型位移动词”既能与“来”搭配又能与“过来”搭配,“非位移动词”和“非典型位移动词”与“来”的搭配则是受限的。但需要注意的是,在很多情况下,音节数只能改变句子的“接受程度”,并不一定会造成“符合语法”或“不符合语法”的极端结果,而“非位移动词”和“非典型位移动词”在



一些情况下亦可与“来”搭配。我们推测，动词词义对“动词+来/过来”结构合法性的影响，从本质上来说是位移事件特征对路径表达方式的选择，亦是人对客观世界的认知在语义和语言结构上的反映。

#### 4.3 动补结构 V1-V2 中 V1 和 V2 的“时间关系”

我们在第二章中提到过单纯路径组合为复合路径时，复合路径内部起点、经过点与终点间的关系问题，我们发现句法单位组合时，各单纯路径的排列顺序与位置或动作在时空中的存在或发生的顺序相关，指示路径原点的语言单位前置，指示路径终点的语言单位后置，表示经过点或跟随、方向等的语言单位按照其在位移过程中的空间顺序顺次排列。我们也在本章第一节中指出，动补结构 V1-V2 中的位移动词 V1 和 V2 的路径也存在一定的时间顺序关系，但 V1-V2 的路径并非 V1 和 V2 二者路径的简单的顺序排列，V1 和 V2 存在先后、并列、“后先”等不同“时间顺序”。本节我们将讨论动补结构 V1-V2 中 V1 和 V2 的几种“时间顺序”及动词特征与“时间顺序”之间的关系。

语言结构的顺序可与客观世界中的某些顺序对应，Greenberg (1963) 即发现“动词与其从属成分之间条件先于结论”的语序在人类语言中具有普遍性。由于汉语缺少词形变化，语言结构与客观世界间的关系问题一直受到研究者们的关注，其中就包括语序与时间的关系。Tai (1985, 1988) 针对汉语提出了“时间顺序原则”(The principle of temporal sequence, PTS) 即“两个句法单位的相对次序决定于它们所表示的概念领域里的状态的时间顺序”，即句法单位的排列顺序同它们所指事物发生或出现的时间顺序相关。Hsieh (1991-1992) 则进一步指出，汉语拥有一套十分强有力的基于事件的时间顺序的临摹原则，这种临摹不仅能基于事件的真实的时间，也能基于推断的和想象的时间。此后的研究者丰富和发展了 Tai 和 Hsieh 的顺序原则，发现这一规律不仅在汉语的多种语言结构中有所体现，在日语等语言中也有所体现，这些发现为我们的语言研究和第二语言教学提供了宝贵的借鉴 ( 阚, 2000; 杨, 2005; 张, 2005; 黄, 2013 )。

根据上述理论，我们不难得出“动补结构 V1-V2 中，V1 和 V2 的顺序对应其在客观世界(或认知中被概念化了的‘客观世界’)中发生的顺序”这样的结论。但在实际使用时，V1-V2 中 V1 与 V2 有并行(走过来)、先后(扔过来)、后先(站过来)三种“时间关系”，多样的“时间关系”给学习汉语的外语母语者带来了一些困难(岳等, 2010; 丸尾, 2014; 望月, 2018)。

我们发现，动补结构中 V1 和 V2 有时描述一个主体的位移动作(当 V1 为表示方式

的 I 类位移动词或 II 类、III 类、IV 类位移动词时），有时描述两个主体的动作（当 V1 为表示致使动作的 I 类位移动词时），我们将动补结构中的每一个动作视为一个进程。以此为基础，动作的进程数依照其表达的位移事件是自主位移事件还是致使位移事件而不同，如：

(113)

（自主位移）

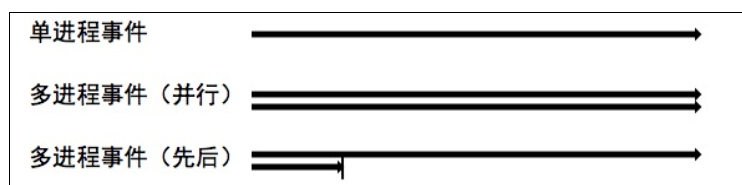
- a. 金菊号哭着，柳林里的黄鹂被她的哭泣声惊吓，沙沙地叫着飞到不知哪里去了。（莫言《天堂蒜薹之歌》）
- b. 看见有人骑车过来了，他生怕别人看出他的窘态，遂装作不过是偶然路过那里的样子，徐徐朝胡同另一边走去，但走了一段，却又折了回来……（刘心武《钟鼓楼》）

（致使位移）

- c. 三天之后，猎户们用毯子裹着他，把他抬到一个地方。（莫言《丰乳肥臀》）
- d. 我一脚把三闷儿踢进了圈前的粪坑，让他沾了一身牛屎。（王小波《黄金时代》）

描述自主位移事件的动补结构（“飞到、回来”）中，V1 和 V2 共同描述一个进程，两个动词的“时间线”是融合状态，描述自主位移事件的动补结构中两个动词也因此必然表现出并行关系。描述致使位移事件的动补结构（“抬到、踢进”）中，V1 描述施动主体的动作，V2 表示位移主体的位移动作和路径，V1 和 V2 互相分离，描述两个进程。因此致使事件中的 V1 和 V2 可能为并行关系，也可能为先后关系。致使位移事件中。若 V1 的动作与 V2 的位移过程呈现持续的伴随状态，则 V1 与 V2 为并行关系；若 V1 的动作无需伴随 V2 的位移过程，即 V2 在 V1 动作结束后仍在该动作的影响下持续位移，则 V1 与 V2 为先后关系。不同进程数的事件进行状态示意图如图 4-4 所示。

图 4-4 不同进程数的事件进行状态



能构成并行关系的 V1 有“拿、搬、带、移”等，能构成先后关系的 V1 有“扔、打、寄、撞”等。据此我们推测，影响 V1 是否能先于 V2 结束的主要因素是 V1 是否“有界”。一般情况下，若 V1“无界”，则 V1 会与 V2 同时持续，若 V1“有界”，则 V1 会先于 V2 结束。另外，当诸如“拉、推、吹”等既可表示“有界”动作也可表示“无界”动作的动词充当 V1 时，V1 和 V2 的“时间关系”要结合具体语境中 V1 的语义才能判断。

值得注意的是，汉语还存在一些“后先关系”的动补结构，如例（114）：

（114）

- a. 此时王二招了招手说，你坐过来。（王小波《黑铁时代》）
- b. 他们看见这只船驶来，便拍手招呼。觉英也把船靠过去。（巴金《春》）
- c. 家里人听见这个好消息，都赶忙围过来打听。（老舍《四世同堂》）
- d. 我就得“买与不买一个样”，不动声色地把带着体湿的西服，挂回原来的地方。（毕淑敏《苔藓绿西服》）
- e. 两人就收拾收拾准备出门，走到门口，手已经拉住门把了，王琦瑶又停下，一个转身将脸贴进他的怀里，两人默默不语地抱着，不知有多少时间过去。（王安忆《长恨歌》）

这些位移事件的共同特征为，V1 的动词会产生附着性结果，其所表现的并不是从动作开始到动作完成的过程，而是从位移主体目前所处状态到该附着性结果形成的过程。“坐过来”表示位移主体从目前状态到“坐”的结果形成的过程中发生“过来”的位移；“挂回”表示施动主体使位移主体从目前状态转变为“挂”的结果的过程中，位移主体发生“回”的位移。所以在认知上，这类表达所描述的依旧是同一个进程（自主位移）或并行的两个进程（致使位移），因此我们认为这类动补结构的 V1 和 V2 实际上是并行关系的。

综上所述，汉语表示位移事件的动补结构中，V1 和 V2 的“时间关系”受 V1-V2 所表述的位移事件为自主位移事件还是致使位移事件的影响。自主位移事件的 V1 和 V2

为并行关系；致使位移事件的 V1 和 V2 既可能是并行关系，也可能是先后关系。影响致使位移事件中 V1 和 V2“时间关系”的是 V1 是否“有界”。当 V1“无界”时，V1 和 V2 为并行关系。当 V1“有界”时，V1 和 V2 为先后关系。

## 第五章 表示路径的介词结构

### 5.1 介词结构表示路径的方法

#### 5.1.1 表示路径的介词结构

我们在第二章中指出，汉语表达路径的方式主要有路径位移动词、动补结构、介词结构和名词性成分四种。其中动补结构是路径表达的主要手段，而我们也第四章中对位移动词组合为动补结构的方式及动补结构中各位移动词的语义组合情况进行了分析。但并不是所有路径都可以用趋向补语表示。柯理思（2017）指出，位移事件中表示方向和出发点的路径一般由介词结构承担，介词结构和补语在表示路径时有一定分工，此外，表示视觉的虚拟发射路径不能用趋向补语表示，如例（115）所示：

（115）

- a. 点着了支烟，他极缓慢的吸吐，眼随着烟圈儿向上看，呆呆的看着，然后点点头，仿佛看出点意思来似的。（老舍《骆驼祥子》）
- b. \*他极缓慢的吸吐，眼随着烟圈儿看上。（自拟）

例（115）中，描写“他”视线方向时使用了介词结构“向上”，而相同的语义无法用补语表达，“向上看”变为动补结构的“看上”后不符合语法。同样在语义方面，除标记位移起点时只能使用介词结构外，表示跟随某主体移动和遵循某线路移动的路径也只能用介词结构表达。

此外，我们发现表示路径的补语和介词结构不仅在语义和用法方面存在差异，在结构内部的语法组合规律也并非完全相同，具体如例（116）所示：

（116）

- a. 谁也没说话，秦震和张凯肩并肩慢慢走到河边。（刘白羽《第二个太阳》）
- b. \*谁也没说话，秦震和张凯肩并肩慢慢走到前。（自拟）
- c. 他们手拉手走向河边。（林语堂《朱门》）
- d. 玉和走向前，握住她的手道……（张恨水《欢喜冤家》）

在例（116）中，表示处所的“河边”可以与趋向补语“到”组合，单纯表示方向的“前”则不可，如（116a）和（116b），但二者都可以用在介词结构中，如（116c）和（116d）。而同样后接“河边”的例（116a）和（116c）的语义和用法也不尽相同，例（116c）将介

词结构移至位移动词之前所构成的“向河边走”依然符合语法，而（116a）的动补结构 V1-V2 的位置是不可互换的。但表示路径的介词结构也并非可以自由地选择前置或后置，如：

（117）

- a. 排在队伍中的不敢往左右看，路上的行人也不敢向队伍看。
- b. 11月8日上午9时，祥云图案环绕、中国龙盘旋构成品字的红色背板前，参加2016中国品牌论坛的嘉宾一起看向镜头。（《人民日报》2016年11月09日）
- c. \*点着了支烟，他极缓慢的吸吐，眼随着烟圈儿看向上，呆呆的看着，然后点点头，仿佛看出点意思来似的。（自拟）
- d. 他极少开口，只是阴幽幽地朝夫人看。（茅盾《烟云》）
- e. \*他极少开口，只是阴幽幽地看朝夫人。（自拟）
- f. \*排在队伍中的不敢看往左右，路上的行人也不敢向队伍看。

“向”字与方所成分组合而成的表示位移方向的方所结构在句中的位置较为自由，既可以前置，如（117a）的“向队伍看”，也可以后置，如例（117b）的“看向镜头”。但例（115a）的“向上看”则不能将其中介词结构移到位移动词之后，例（117c）的“\*看向上”语感上不太自然。而“朝”字组成的介词结构一般只能放在位移动词之前，可对比例（117d）和（117e）。和“朝”类似，“往”字介词结构后置时除了可出现在“去”之后，组合为“去往……”结构外，也一般不可置于位移动词之后，我们将例（117a）中的“往左右看”替换为（117f）的“\*看往左右”后句子不合语法。

因此，用介词结构表达的路径和用动补结构表达的路径在语义、内部构成和外部组合规律方面均存在差异。本章将基于这些差异，讨论位移表述中表示路径的介词结构的特征。为了便于称说，我们将这种表示路径的介词结构称为“路径介词结构”。

### 5.1.2 路径介词结构的构成

路径介词结构是以“介词+方所成分”的方式组成的结构。汉语中的介词多是由动词逐渐语法化而来，二者无论是在语义还是语法上都有诸多相似之处，因此二者的界限并非泾渭分明，许多研究者提出了划定介词和动词界限的标准（金昌吉，1996；何洪峰，2014）。由于我们的研究仅局限在位移表述的领域，因此我们这里所说的“介词”主要是“从、由、经、向、往”等指标记位移起点、经过点或方向而又不能单独构成位移表述的

主要动词且不能充当动补结构的趋向补语，必须和名词性成分组合表示位移路径的动词性成分。

在印欧语言体系的语法研究中，“介词”（preposition）也可译为“前置词”，一般出现在动词之前。汉语中的大多数介词结构也只能出现在动词之前，如表示方式的“按照、根据”、表示目的或原因的“为、因为”、表示比较的“比、同”以及表示被动的“被、叫、让”等。但汉语的一部分介词结构也可以出现在动词之后（有的研究中将其称为“后置词”），这在汉语中是比较特殊的现象。虽然汉语中后置的介词结构研究与前置介词相比而言数量较少，且主要是介词与方位词的组合，但后置介词结构的性质问题还是引发了一部分学者的讨论。李艳惠（A. Li 1985, 1990）反对后置词说，认为“后置词”或“处所化标记（localizer）”就是“地点名词（place name）”或“名词性成分（nominal expression）”。但汉语中的“前置词”和“后置词”并不是独立发展出的两套系统，前置词短语经历了由动词后到动词前的语序演变过程（Sun, 1996），从语言的历时发展角度来说，前置和后置的介词结构之间是具有相关性的。此外从语义的角度出发，我们也很难将“走向河边”和“向河边走”两结构中的“向河边”视为两类结构。因此本文不对不同句法位置上的介词结构作性质上的区分，而是将所有表示路径的介词结构都视为路径介词结构。

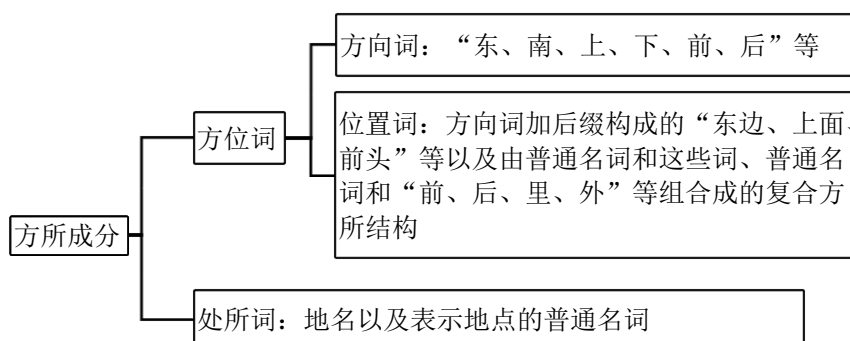
在“介词+方所成分”结构中，充当方所成分的一般是名词性成分。但汉语中能表示方所的名词性成分又可分为不同的类型，不同语言学研究者对这些语言单位的界定和划分也不尽相同。赵元任（1980）用“处所词”作为上位概念，将处所词分为位置词（包括“上、下、前、后”等单音节方位词，也包括“上头、下边、前面”等由方位词加后缀的形式构成的双音节位置词）、地名（“日本、苏州”等）、N-L 复合词（“心里、山上”等）和指地的名词（“江、河”等）四类。吕叔湘（1982）则用“方所词”这一概念，方所词包括指代性的方所词（这儿、那儿）和实指性的方所词，实指性的方所词包括地名、“室、案”等普通名词和“上、下”等表示方位的词三种。朱德熙（1982）将“处所词”和“方位词”都视作体词下的小类，处所词包括地名、可以看成是地方的机构（“学校、公园”等）和合成方位词（“上头、下边”等），其中合成方位词也属于方位词，而方位词除包括合成方位词外还包括单纯方位词。方经民（2004）则将汉语方位成分分为五种，描述了不同方位成分语法上的差异并指出，单音节方位成分在方向介词或动词“往”、“向”等后面作宾语时可以单用表方向。

并非上述所有方所成分都可与介词结构组合表示路径，不同类型的方所成分与介词的组合情况表现为不同的特征。方经民列举的五种方位成分中，“之/以+方位词”和“前后、

左右、上下”两组就不可与介词结构组合，而单音节的“东、前、上”与介词组合的情况也和加后缀的“东边、前面、上头”不同。事实上，单音节的“上、下”等方位词的语法地位是比较特殊的，有许多研究者已经注意到了它们与其他方所成分的不同之处。Ernst（1988）认为方位词可分为双音方位词（long form）和单音方位词（short form），其中单音方位词不能单用、一般不能作论元也不能受形容词修饰，因此不具备名词性，不能被视为名词。钱乃荣（1990）也认为，方位词主要不作名词用，而是跟前面的名词短语组成“方位结构”（胡裕树，1981）或“方位短语”（吕叔湘，1980），因此将方位词划归到虚词类别中。我们从此前已经列出的例句中亦可看出，当方所成分为普通名词时，“向”字介词结构既可以前置也可以后置，例（117a）的“向队伍看”和例（117b）的“看向镜头”均成立，但当方所成分为方位词“上”时，则仅有例（115a）的“向上看”是成立的，将其后置为“\*看向上”的例（117c）不合语法，例（116d）的“走向前”中，虽然“向前”采用了后置的形式，但这类用法的使用受到一定限制，语感上也没有“向前走”自然。因此我们从虽不打算讨论方位词的“语法地位”问题，但为了便于展开研究，我们将方位词中单音节的表示方向的词单独列出进行说明。

根据上述研究，我们从语义角度出发，采用简化的分类方法，将可与介词结构组合的方所成分分为方位词和处所词，并将方位词再分为方向词（单音节的表示方向的方位词）和位置词（多音节的方位词），类别关系及各类别的成员如图 5-1 所示：

图 5-1 汉语方所成分的分类



上述三类成分中仅有方向词表示基本方向，位置词与处所词均表示处所。其中位置词的语法特征与处所词相近，二者的相似之处主要有三：第一，位置词除了可以和介词连用表示路径之外，还可在带路径的位移动词和路径补语后单独充当位移参照物（到东边、放回箱子里），这一点与处所词相同。第二，位置词单独与一般行为动词连用时常



常表示动作的发生地点或着落点而非动作方向（踢上面、东边日出西边雨），这一点与方向词不同（\*踢上、\*东日出西雨），而与处所词相似，可以参考使用处所词的“踢门柱、云海日出、草原日出”等例。第三，位置词与处所词都可以接续在标记处所的“在”之后，且可被提问处所的“哪（儿）/哪里”提问，方向词则不可。因此虽然一部分位置词保留着方向义，但它们已经处所化了，是借由处所表达方向，在实际使用时，语法规律与处所词具有更高的相似度。

综上所述，路径介词结构主要由介词和方所成分两部分构成，其中介词是指示位移起点、经过点、终点、方向等的不能独立充当主要动词或动补结构趋向补语的“向、朝、往、经、随、跟”等；方所成分是表示方向或处所的名词性成分，可依照语义分为方位词和处所词两种，方位词又可再划分为单音节的只能用来表示方向的“东、南、上、下、前、后”等方向词和双音节的“东边、上面”，以及普通名词和上述表示方向的词组合而成的“钱包里、黑板上面、车站前”等位置词。其中方向词具有比较独特的语法特征，而位置词虽然从词义方面来看和方向词相似，但在语法组合特征以及在句中所表现出的句义特征方面却与处所词更为相似。

## 5.2 前置与后置的介词结构——以“向”为例

### 5.2.1 前置词与后置词

我们在 5.1 节中提到，介词结构既可以前置也可以后置，但前置仍是介词结构的“主流”，多数介词结构只具备前置的功能，仅有一部分符合特定条件的介词结构可后置，而可后置的这部分介词结构即主要指介词和方所成分的组合。

介词与方所成分的组合主要用于位移表述中，用以表示位移的路径。但路径介词结构的后置也需要满足一定条件，由介词“向”组成的路径介词结构在句法位置上更自由，介词“往”仅能在具备书面语环境或习惯用法“开往、去往、飞往”等中使用，如“十时许抵绥远，正遇见开发西北协会会员专车开往包头，站上颇热闹，大家介绍相见，匆匆数语。（冰心《冰心全集第三卷》）”。而其他指示方向的“朝、对”以及表示跟随、附着等的“跟、沿”等则只能前置。

此外，对比例（115a）、（117c）和例（117a）、（117b）两组例句可以发现，同样既具备前置功能又具备后置功能的“向”字路径介词结构，其前置与后置的能力也随其构成成分的变化而改变。在方所成分为处所词“队伍”、“镜头”时，路径介词结构既可前置又可后置，例（116c）也是“向+处所词”后置的例子。而当“向”后的方所成分为方向

词“前”时，介词结构一般前置，虽然也存在如例（116d）的“向前”后置的例子，但“走向前”在语感上不如“向前走/走上前/走向前方”等使用位置词或处所词的表述自然，而如果我们将其中的“前”替换为其他方向词，形成诸如“\*走向后/\*走向左/\*走向里”类的表述，则在语感上更加不自然。

可见，路径介词结构是否可以后置要受具体介词和其后方所成分性质两方面影响。柯理思（2017）将路径介词结构分为路径副词和路径介词两种，二者的区别在于充当位移参照的方所成分是处所名词还是表示基本方向（“里、上、回、起”等）的词，方所成分为处所名词时，介词结构为“路径介词”，方所成分表示基本方向时，介词结构为“路径副词”。柯理思的这一分类也是着眼于方向词（即单音节方位词）语法表现的特殊性，与 Ernst（1988）和钱乃荣（1990）等研究者将方向词视为虚词（或从名词类别中摘除）的观点具有一定相似性。这一观点主要是基于将汉语和印欧语系的语言进行对比而得出的，如英语中用于指示动作（包括位移）方向的“in/out/up/down”等介词在词性和用法上都与处所名词有明显的区别。并且，汉语中能够后置的介词结构也基本是由介词与多音节方位词（即我们所说的“位置词”和“处所词”）组成的，介词与单音节方位词（即我们所说的“方向词”）的组合在后置方面比较受限。因此这样的主张在语言描写、语言对比和对英语母语者的语言教学方面具有一定合理性。

但汉语表示方向的词在语义上也有名词的特征，如果将单音节的方位词视为单独的词类，就会造成“前”与“前边/前面”分属不同类别的情况，而事实上二者在汉语历时变化中的联系是无法割裂的。古代汉语中的“前”有“复前行，欲穷其林（《桃花源记》）”和“小臣二人执戈立于前，二人立于后。（《管子》）”中两种用法，双音节的“前边/前面”等双音节方位词是随着语言演变逐渐从单音节方位词中分化出来的。日语中的「上（ウエ）・前（マエ）」等方位词则具备更强的名词语法特征。因此无论是从语义、汉语的历史还是从语言对比的角度来看，都没有将表示方向的词划分到两个不同词类的必要性。

刘丹青（2003）从历史语言学 and 语言类型学的角度探究了介词语法化的问题，其中也涉及到了汉语后置词的语法化问题。刘丹青指出，从介词用法的变化历程来看，汉语始终不是纯粹的前置词语言。刘的主张更加倾向于将不同句法位置上的介词结构都归为“前置词”一类，即“前置词”中除了基本的“动前前置词”外还存在“双位前置词”和“动后前置词”两种特殊类型。依照刘文中的定义，能够独立在 NP 前与之构成一个短语的介词是“前置词”，大部分前置词所构成的短语 PP 都只能位于动词前，如“对、沿着、通过”等，

“于、自、在、到”等词组成的 PP 除了可前置于动词之外，还可以有条件地用在动词后，并将这种前置词称为“双位前置词”，只能位于动词后的则称为“动后前置词”，但动后前置词的数量较少，现代汉语中一般仅限于口语中轻声的 *de*，此外还有中古汉语中的“着（著）”。而前置词和后置词在组合为“框式介词”（如“在……上”、“到……为止”）后，就在句法上自足、不再受限。

基于上述理由，我们倾向于认为前置的介词结构和后置的介词结构是同一类型的语言单位，而其部分成员同时具备前置和后置两种用法。下面我们将以位置较为自由的“向”字路径介词结构为例，讨论影响路径介词结构位置的因素和该结构前置与后置时语义、语法方面的异同。

## 5.2.2 影响路径介词结构位置的因素——以“向”为例

“向”字路径介词结构在位移事件中既可以表示物理性位移的方向，也可以表示静止的空间关系的朝向（虚拟位移）。与介词“向”组合的方所成分既可以是方向词，也可以是位置词或处所词。我们在 5.2.1 节中提到，方所成分的性质会影响介词结构是否可以后置，本节我们以“向”字路径介词结构为例，讨论介词结构外部的因素对结构位置的影响。

### 5.2.2.1 动词的音节数

我们在第四章考察“来”和“过来”使用情况时曾经指出，汉语是一种讲求韵律的语言，音节的数量有时会对句子在语法方面的可接受度产生影响，并且我们也发现动词的音节数确实会影响到补语位置上的“来”和“过来”。以此为基础，我们可以推测动词的音节数或许也能对介词结构的位置产生影响。具体的例子可见例（118）和例（119）：

（118）

- a. 排在队伍中的不敢往左右看，路上的行人也不敢向队伍看。（老舍《四世同堂》）
- b. 三乐的弹弓经常向路灯瞄准，经常向猫、向鸡、向鸭子瞄准，经常向晾在竹竿上的衣服、挂在窗口的鱼干，还有什么玻璃瓶、篮子、漂在河面上的蔬菜叶子瞄准。（余华《许三观卖血记》）
- c. 车子在山北面向山顶爬的时候，在我们面前的是：浓密的树丛上结着白霜，天空不时飘来雨丝和雪花，雾气从深谷升起，和头顶上的滚滚怒云连接。

（《人民日报》1956 年 12 月 16 日）

d. 我们的汽车加足马力向山顶爬行。（《人民日报》1957年07月21日）

(119)

a. 孩子们围坐在桌子周围，扭头看向黑板。（《人民日报》2016年10月20日）

b. \*三乐的弹弓经常瞄准向路灯，经常瞄准向猫、向鸡、向鸭子，经常瞄准向晾在竹竿上的衣服、挂在窗口的鱼干，还有什么玻璃瓶、篮子、漂在河面上的蔬菜叶子。（自拟）

c. 最后只剩下心脏了，可死亡已经包围了心脏，像是无数蚂蚁似的从四周爬向心脏。（余华《现实一种》）

d. \*我们的汽车加足马力爬行向山顶。（自拟）

例（118）为路径介词结构前置的例句，例（119）为路径介词结构后置的例句，两组内各例句的动词一一对应，其中 a、b 两句均描写视线的方向，c、d 两句均描写物理位移的方向，区别在于 a、c 两句中的动词为单音节动词“看”和“爬”，b、d 两句为与之对应的双音节的“瞄准”和“爬行”，而各例句介词结构中的方所成分均为处所词。可以发现，在动词词义相近且句子其他成分的特征基本相同的情况下，动词的音节数依然会影响句子的合法性。单音节的“看/爬”在与后置的路径介词结构组合时，比双音节的“瞄准/爬行”更加自由。类似的情况也可见于使用其他动词的情况下，如“退/撤退”、“扔/投掷”、“撒/抛撒”等。

但同“来”和“过来”的情况相似，音节数对句子合法性的影响并非绝对，也存在例外的情况，如例（120）：

(120)

a. 手持火把的祭司立在祭坛前，参加竞技的运动员站在距祭坛约二百米的地方，裁判员一声令下，运动员们便飞奔向祭坛。（《人民日报》1979年09月13日）

b. 第三道却没有绳索，只能先用右脚踏住一微凸处，然后猛扑向石壁，右手手指插进崖缝，稳住身体，随即探出左手抓住岩上一小树根，用力一荡翻上崖顶。（《人民日报》1993年07月31日）

但类似例（120）的情况并不多见，且这类例句中的双音节动词一般为状中结构，实际承担动作义的依然是单音节的“奔、扑”。

#### 5.2.2.2 动词的语义

动词音节数并不是决定路径介词结构位置的唯一的因素，在动词音节数相同的情况下，依然会有其他因素对路径介词结构的位置产生影响。例（121）和例（122）、

（121）

- a. 卫璧安当然也不便半路上向回路走，也只好跟了下去。（张恨水《金粉世家》）
- b. 真正爱国的是向敌人洒血的。（老舍《猫城记》）
- c. 演员谢过幕，内山先生又陪着我们上台去向演员献花。（冰心《冰心全集第六卷》）
- d. 每年冬至，姚太太就给曾太太送上最好的人参，因为中国的药铺不只是卖药，还卖各种补品……所以一年四季姚家经常向曾家送礼。（林语堂《京华烟云》）

（122）

- a. 他走向草野深处，登上一座针茅草丛生的高冈，朝着刚才七个上阿妈的孩子朝他抛打乌朵石的方向鸣里哇啦喊起来。（杨志军《藏獒1》）
- b. 老百姓同情他，怜悯他，为了保全他在江河中的尸体，不让鱼鳖吃掉，在“端午节”这一天，人民把粮食洒向全国江河，希望鱼鳖吃下这些粮食，不去侵犯屈原的尸体。（李準《黄河东流去》）
- c. \*演员谢过幕，内山先生又陪着我们上台去把花献向演员。（自拟）
- d. \*一年四季姚家经常把礼送向曾家。（自拟）

例（121）和例（122）分别是路径介词结构前置和后置的情况，各句的动词均为单音节动词。分别对比两组中的各个小句可以发现，当动词为“走”和“洒”时，路径介词结构既可前置也可后置，而当动词为“献”和“送”时，路径介词结构只能前置。我们将路径介词结构和动词的组合情况总结为表 5-1（仅以单音节动词为例）。

表 5-1 路径介词结构位置与动词的关系

A 组：可前置可后置	B 组：仅前置
走，跑，迈，跃，跳，冲，压，追，飞； 搬，扔，投，抬，递，打，洒，抛，伸， 挥	献，送，发； 要，买，收，借（入），租（入）

表 5-1 中 A 组（左栏）动词为既能与前置路径介词结构搭配也能与后置路径介词结构搭配的动词，B 组（右栏）动词为只能与前置路径介词结构搭配的动词。对比 A 组和 B 组成员可以发现，两组成员在语义上的区别在于：A 组动词单纯用于描述位移动作本身，该动作并没有预设的方向，“走、跑、搬、扔”等动作的方向可以是任意的，在位移事件表述中由句中其他成分确定方向；B 组动词在描述动作本身的同时，在认知上也带有一定的预设的方向，如“献、送、发”自身带有由己及人、由近及远的方向，“要、买、收、借（入）、租（入）”则带有由远及近、从他人向自己的方向。由此我们推测，路径介词结构是否可以后置受动词语义中是否带预设的方向影响，如果动词本身不带预设的方向，则路径介词结构既可前置又可后置，如果动词在认知上带有一定的方向，则路径介词结构只能前置。

此外，在“向”字介词结构表示静止空间关系的朝向义时，只能前置，如例（123）：

（123）

- a. 从十四岁那年初上城的时候拍起，渐渐的她学会了向摄影机做媚眼。（张爱玲《连环套》）
- b. “向奶奶说我的坏话，你？为什么？”（刘斯奋《白门柳》）
- c. 听差见他问得慌张，便笑道：“我给你向总站打个电话问问。”（张恨水《啼笑因缘》）

但表示朝向的路径属于虚拟路径，虚拟位移事件并不是我们主要的研究对象，因此我们暂不对此进行更加深入的探讨。

### 5.2.2.3 句中其他成分

我们发现，句中其他成分如是否存在宾语、动量·时量成分、以及动词是否带趋向补语也会影响路径介词结构可出现的位置，下面将分别说明。

#### A. 宾语

（124）

- a. 她捧住头，像捧住一块石头般地投向墙壁，嘴中发出短句：“李青山。……仇人……我的儿子让你领走去丧命。”（萧红《生死场》）
- b. 据合众国际社报道，尽管武装的军警层层围着这座小山并向示威者投催泪弹，然而人群仍然不断地涌来。（《人民日报》1960年05月20日）
- c. 他仰起脸来，将插着鱼片的铁签子递向嘴巴，那姿式，仿佛在娘娘庙前广

场上表演吞剑的杂耍艺人。（莫言《蛙》）

- d. 该公司第一工程处在去年十二月二十二日给工人上大课时，工人不安心听课，纷纷向主席台递条子，要求增多工资，要求辞职、请假。（《人民日报》1953年01月08日）

例（124a）和（124b）中的动词均为“投”，在例（124a）中，“向”字路径介词结构后置于动词，但例（124b）中动词后存在作为位移主体的宾语，因此路径介词结构只能置于动词之前，无法使用“\*投向示威者催泪弹/\*投催泪弹向示威者”的形式。例（124c）和（124d）是动词为“递”的例子，（124c）中的路径介词结构可以出现在动词之后，而（124d）却很难使用后置的路径介词结构。同样，如果我们将例（122b）“人民把粮食洒向全国江河”中标记位移主体的“粮食”移到宾语的位置上，构成的“\*人民洒粮食向全国江河”或“\*人民洒向全国江河粮食”均不合语法。

由此可见，在致使位移事件中，如果表示位移主体的名词出现在宾语位置上，则路径介词结构只能前置，但在满足其他条件的情况下，如果使用“把”字结构将位移主体名词移动到动词之前，则此时的路径介词结构亦可后置。

## B. 补语

我们发现，动词后表示时量、动量成分的补语会限制路径介词结构的后置，如例（125）：

（125）

- a. 闲对菊花流热泪，秋风吹向海天陲。（蒋光慈《少年飘泊者》）
- b. 他点一枝烟，向蓝天吹了一口，看看我，看看坟，笑了。（老舍《赶集》）
- c. 调查团按图到了海军操场、南田、卫生院等居民集中地点，并按图上所示上船路线走向码头。（《人民日报》1955年04月08日）
- d. 小平同志向码头走了几步，突然又转回来，向李灏说：“你们要搞快一点！”（《人民日报》1992年03月31日）

从例（125a）和（125c）中可以看出，动词“吹”和“走”均可与后置的路径介词结构搭配，但在动词后带有表示时量、动量的补语时，路径介词结构一般前置，如例（125b）和例（125d）。同时，例（117b）和例（119a）均是路径介词结构后置于动词“看”表示视线方向的例子，但在“那个还不解事的小女儿用乌黑的小眼睛向母亲看了半天，“哇”的一声哭出来，这是索乳的啼声，但也可能为她们带来杀身之祸（徐兴业《金瓯缺》）”这样动词后还存在表示动量的补语的例子中，路径介词结构则只能前置。同样表示视觉

方向的“望”也具备相同的特征，如，“范博文跟着林佩珊的眼光也向天空望了一会儿以后，突然转过脸来，对着林佩珊说（茅盾《子夜》）”。

与存在表示时量、动量的补语的情况相似，当动词后还存在趋向补语“来、去”时，路径介词结构也很难后置。如：

(126)

- a. 万有大叔正从远山的一条小路上向村里走去。（路遥《平凡的世界》）
- b. 空中出现了轰炸机，排成两个正方形，黑压压的，向头顶飞来。（宗璞《东藏记》）
- c. 广生钻出车门，一眼看见公社罗书记和派出所姜所长；河湾东、西村的干部和社员一齐向吉普车围过来。（陈忠实《石头记》）
- d. 昂东挣脱了手向警长扑过去，但是又被警察推倒了。（巴金《春》）

“走、飞、围、扑”单独使用时均可与后置的路径介词结构组合，但在如例（126）所示的位移动词后接趋向补语“来/去/过来/过去”时，路径介词结构无法后置。

### 5.2.3 小结

上面我们以“向”为例，讨论了影响位移表述中路径介词结构位置的因素。一般来说，在位移表述中，基本上所有的路径介词结构均可前置，而只有一部分满足特殊条件的路径介词结构可以后置。具体表现为：

第一，在路径介词结构内部构成方面，只有表示位移方向的介词“向/往”等和位置词或处所词组成的路径介词结构可以后置，且其中只有“向”的使用较为自由，由“往”组成的介词结构在后置时会受语体的限制。除了表示位移方向的情况以外，表示跟随的“跟/随”、表示描摹的“沿/顺”以及标记位移起点的“从、自”组成的介词结构均只能前置，而当方所成分为方向词时，无论其前介词为何，均以前置为主。

第二，在介词结构外部即介词结构与句中其他成分的共现情况方面，仅有当与路径介词结构组合的动词为单音节动词且动词后无标记位移主体的宾语（在致使位移事件中）也无补语的情况下，该路径介词结构才可后置；如动词为多音节动词或动词后存在宾语、补语时，路径介词结构仅可前置。

我们将影响路径介词结构位置的因素总结为表 5-2。



表 5-2 影响路径介词结构位置的因素

位置	介词结构的构成		其他句子成分		
	介词	方所成分	动词音节数	宾语	补语
前置 & 后置	表示方向的“向/往”	位置词/处所词	仅单音节	仅无宾语	仅无补语
仅前置	表示方向/跟随/描摹/标记起点的介词	方向词/位置词/处所词	多音节/单音节	有宾语/ 无宾语	有补语/ 无补语

虽然一部分路径介词结构同时具备前置和后置两种句法位置，但其在前置和后置两种情况下并非毫无差别。张黎（2003）认为前置和后置的介词结构在认知上存在“有意”和“无意”的区别，前置的介词结构表示的是“主体意识到的既定目标”，后置的介词结构表示的是“动作发生后所形成的方向”。李临定（1985）也指出，“当介词短语用于谓语动词后边时，句子常是表示已完成的事情，而用于谓语动词前边时则不是这种情况”。我们可对比下面的例句：

(127)

- a. 此刻她正掉下悬崖，向深渊跌落，一路被崖壁的利石刮得血肉模糊。（周国平《妞妞》）
- b. 我跌向椅子，又跌向墙边。（《人民日报》1997年11月10日）
- c. 一时间，海内外传媒炒得沸沸扬扬，有的甚至惊呼：向大海倒牛奶的事件在中国出现了。（《人民日报》1998年07月11日）
- d. 官兵们紧紧抱着谭守文，把一只水壶中仅有的一点水倒向他焦渴的嘴唇，大声呼喊着他的名字。（《人民日报海外版》2004年04月19日）

例（127a）和例（127c）为路径介词结构前置的情况，而例（127b）和（127d）是路径介词结构后置的情况。对比例（127a）、（127b）以及（127c）、（127d）可以发现，前置的路径介词结构带有“有意为之”的语感，而后置的路径结构有“顺势而为”的语感。

### 5.3 路径成分的共现

汉语中表示路径的方式有路径动词、路径补语、路径介词结构和一部分具有线性特

征的名词四种，其中用名词表示路径的使用受到较多限制，一般用在惯用搭配中，而单用的路径动词、路径补语和路径介词结构的使用都相对自由，且三者都属于表示路径的动词性成分。

我们在 2.2.3 节中曾经提过，一个位移事件可以由多个路径组合而成。但受制于语法组合的规律，一个简单的位移表述（以一个单句的形式出现）中一般仅能存在一个主要动词。因此，路径成分的共现也一般表现为一个或数个介词结构与一个带路径成分的位移动词或动补结构组合，两种情况分别如例（128）和例（129）所示。

（128）路径位移动词

- a. 同时步兵则另外开路前进，用双手抓住树枝乱草，从陡直的山坡上往山顶攀登。（《人民日报》1951年02月12日）
- b. 王四抬起手来，只管搔着头发。说着话，月容已唱完了，向后台来，一掀门帘子，大家异口同声地道着辛苦。（张恨水《夜深沉》）
- c. 1999年是国产手机起步的一年，2000年是国产手机培养品牌、向上攀升的一年，2001年将是国产手机开始攻坚战的一年。（人民日报海外版 2001年02月13日）
- d. 这些年流行歌舞不大如前，乐团人马分为两拨，一拨由城市转入乡下，一拨在西京城里开办四家歌舞厅，门票高达三十元，可人疯一般往里进。（贾平凹《废都》）

（129）动补结构

- a. 一部分的人把龙身扛在肩上往大门跑去。（巴金《家》）
- b. 大领导和小领导们在老兰的带领下往会场走去，父亲如释重负地退到一边，看着领导们从他的身边走过去。（莫言《四十一炮》）
- c. 一股热气慢慢地朝脸上升来，脸马上烫得炙手。（王小波《黑铁时代》）
- d. 各群众队伍和化装的秧歌队通过各条大街向会场涌进，中山路上红旗飘扬，万头钻动、锣鼓喧天……（《人民日报》1949年04月30日）

观察例（128）可以发现和路径位移动词（非动补结构）组合时的路径介词结构中的方所成分既可以是位置词或处所词（如 a 句中的“山顶”、b 句中的“后台”），也可以是方向词（如 c 句中的“上”、d 句中的“里”），而位移动词既可以是 II 类位移动词（如 a、b 两句中的“攀登”、“攀升”）也可以是 III 类位移动词（如 d 句中的“进”）或 IV 类位移动词（如 b 句中的“来”）。但路径介词结构同 III 类位移动词的组合有时会受到限制，

除“往里进/向外出”等以及在口语环境下可以使用的“往家回”外，III 类位移动词中的其他成员较难同路径介词结构组合，可分别对比例（130）中的 a、b 及 c、d。

（130）

- a. 校医来了，给他洗干净，绑好了布，叫他上医院。（老舍《赶集》）
- b. \*校医来了，给他洗干净，绑好了布，叫他往医院上。（自拟）
- c. 到收购站取了架子车，两人朝东门城墙去，路上五富买了四个葱花油饼，说今早咱好好吃一顿，一人两个，边走边吃。（贾平凹《高兴》）
- d. \*往收购站到取了架子车，两人朝东门城墙去……（自拟）

而路径介词结构和动补结构组合时，情况如例（129）所示。动补结构的内部组合方式既可以是“I 类+III 类/IV 类”（如 a 句的“跑去”、b 句的“走去、走过去”）的形式，也可以是“II 类+III/IV 类”（如 c 句的“升来”、d 句的“涌进”）的形式，但此时动补结构一般为两个位移动词直接组合的 V1-V2 式，带后置指示路径成分（V3）的形式很难同路径介词结构组合，可参考例（131）。

（131）

- a. 女儿嗔怪地从他手中夺过书，又轻轻地摊开在桌子上，妩媚地笑一笑，跑回灶房来。（陈忠实《回首往事》）
- b. \*女儿嗔怪地从他手中夺过书，又轻轻地摊开在桌子上，妩媚地笑一笑，往灶房跑回来。（自拟）
- c. 鸟在云际，有容有声，高高低低，可谓自若，若坠入水去，便要有翅不能飞，有爪不能划了。（《人民日报》1981 年 10 月 14 日）
- d. \*鸟在云际，有容有声，高高低低，可谓自若，若向水坠入去，便要有翅不能飞，有爪不能划了。（自拟）
- e. 这一次在她又有意地伴倒了两个男人之后，其中的一个在手肘上流出了一些血，这才满足地穿上那高跟黑皮鞋，跑上石阶来。（胡也频《到莫斯科去》）
- f. \*这一次在她又有意地伴倒了两个男人之后，其中的一个在手肘上流出了一些血，这才满足地穿上那高跟黑皮鞋，向石阶跑上来。（自拟）

我们将例（131）中 a、c、e 三句中带后置 IV 类位移动词（V3）的动补结构替换为路径介词结构与动补结构组合的格式，句子在语法上不成立。

因此，路径介词结构与路径位移动词及路径补语可以组合，但组合时需要满足一定

条件，主要表现为：路径介词结构同 II 类及 IV 类位移动词的组合相对自由，但同 III 类位移动词的组合受限，同动补结构组合时一般要求动补结构中不带后置于处所宾语中表示位移参照物的指示路径动词，即不存在 V3 位置上的“来/去”。

## 第六章 结论和研究展望

### 6.1 结论

本文对现代汉语位移表述中路径的构成、性质、差异以及不同路径表达方式在语义、构成、特征方面的异同进行了分析和对比。

我们认为，汉语中位移事件表述的路径成分中共有五种组成要素，分别为原点、终点、方向三种构成要素和动量、时量两种附加要素。原点、终点、方向三者是路径的“部件”，它们的职能是作为路径的构成要素，构成路径本身。原点是位移开始时的初始位置，终点是位移结束时的最终位置（终点有时也表示穿越性位移中位移主体所穿越的点）。原点和终点均可被视为基准点，位移主体在两个基准点之间移动的路线形成位移的轨迹。方向是位移主体的位移朝向，不仅包括如“上、下、左、右”等相对的方向和“东、南、西、北”等绝对的方向，也包括跟随性位移（跟随某人或某物移动）或描摹性位移（沿着某条路线移动）的方向。动量和时量表示位移的距离、持续时间或位移动作发生的次数，是位移表述中的可选要素。不包含动量和时量的位移可以单独用来表示位移的概念，但包含动量和时量的位移可与具体时空环境中的事件相结合。

在具体的位移表述中，指示原点的要素并非必须出现，相反在很多情况下位移的原点信息是被省略的。我们推测，这是因为时空中具体的事物往往存在初始的位置或状态，这种初始的位置或状态在实际使用时被预设为了路径的原点，因此在不需要向听话人强调出发位置时，相关的元素可以被省略。除原点或预设的原点外，终点和方向两个构成要素只需再具备其一即可确定一个位移路径（即两点或一点与方向均可确定一条路径）。由两个基准点（一般是原点+终点）确定的路径是点状的或线段形的路径，由一个基准点和方向确定的是射线形的路径。需要说明的是，我们将表示“经过”的位移（即穿越某点的位移）视为原点与终点重合，在这种位移状态下，位移主体可以任意方向穿越某一点（或在认知中被抽象为点状的空间体），动作的起始位置和终止位置是一致的。

我们按照路径中所包含的路径要素的不同将路径分为离散型路径和连续型路径两种，其中由两个基准点确定的路径为离散型路径，由一个基准点和方向确定的路径为连续型路径。连续型路径又可分为无限接近某个基准点的指针连续型路径和逐渐满足某个条件的趋势连续型路径（包括跟随和描摹）。

位移表述中用介词结构表达位移的起点，但表达位移终点和位移方向的方式存在一定差异。标记终点成分一般是“上、下、入、进、到”等带路径成分的动词（既可以充任主要动词，也可以充任动补结构的补语），而位移方向一般用介词结构表达。因此汉语中表示路径的表达方式与路径的性质之间具有一定相关性。

除构成要素（两个基准点或一个基准点与方向）和表达方式（动词或介词结构）外，离散型路径和连续型路径在与句中其他语言单位（包括与表示时量、动量的成分和方所成分）的组合关系方面也存在差异。我们将离散型路径和连续型路径的差异总结如下：

第一，在构成要素方面，离散型路径由两个基准点构成，连续型路径由一个基准点和一个方向构成。

第二，在组合关系方面。离散型路径不能和动量成分组合，在和时量成分组合时，该时量为路径外部的时量，即表示位移结束后经过的时间而非位移动作本身持续的时间；连续型路径既可以和动量成分组合也可以和时量成分组合，而在同动量、时量成分组合时，该动量、时量成分均为路径内部的动量和时量，即描述位移本身的量与持续时间。路径同表示位移参照物的方所成分组合时，离散型路径和指针连续型路径的特征一致，双方均能和场所词、普通名词以及场所词或普通名词与方位词构成的短语组合；趋势连续型路径所搭配的一般是普通名词或方向词，名词的特征受位移事件语义影响，表示跟随的趋势连续型路径中的方所成分一般为自身可移动的物体，表示描摹的趋势连续型路径一般和带线性通路的普通名词组合，而表示方向的趋势连续型路径一般和方向词组合。

现代汉语表达路径主要有四种方式：单用的位移动词、动补结构、介词结构和名词性成分。下面分别进行说明：

第一，位移动词。

单用的位移动词直接充任句子的主要动词，此时路径既可以是离散型路径也可以是连续型路径，具体为何种路径与动词的词义有关，但只有语义成分中带路径成分的位移动词能单独使用。

我们根据语义中是否包含路径信息及所包含路径的特征将位移动词分为四类：无路径位移动词、连续型路径位移动词、离散型路径位移动词（III类位移动词）和指示路径位移动词（IV类位移动词）。

无路径位移动词（I类位移动词）是语义成分中仅包含位移方式或致使动作而不包含路径成分的位移动词。它仅能表达“位移”的抽象事实并描述和位移相关的附加信息，

如自主位移事件中位移的方式、状态或致使位移事件中的致使动作即位移发生的原因。

连续型路径位移动词(Ⅱ类位移动词)是指语义成分中包含连续型路径的位移动词,位移动词中的连续型路径一般是三维世界中“上下/左右/前后”等方向。这类位移动词可按照语法特征分为三组:A组成员包括“上、下、登”等,它们能单独构成位移事件的路径,可直接与标记位移参照物的方所成分组合;B组成员包括“升、降、落”等,它们的语义中虽然也包含位移的方向,但一般不能单独使用,在位移事件表述中需要和补语“到、进、入、出”等组合或同能够表示路径的介词结构搭配才可使用。C组成员包括“上升、下降、降落”等双音节动词,它们能单独构成位移事件的路径,具备一部分A组成员的特征,但不能直接同方所成分组合,需要和路径补语共用,这一点又与B组成员相同。

离散型路径位移动词(Ⅲ类位移动词)是语义成分中包含离散型路径的位移动词,即表示“到达”、“离开”或“经过”某处的位移动词,其中以指示终点的“到达”居多,但个别成员同时兼具指示原点和终点的功能。Ⅲ类位移动词大多可单独同标记位移参照物的方所成分组合,其中一部分单音节成员也可在动补结构中充任其他位移动词的补语,参与路径的表达。Ⅰ类位移动词和Ⅱ类位移动词中的B、C两组成员必须同Ⅲ类位移动词组合后才能后接方所成分。但Ⅲ类位移动词中也存在一些只可单独做主要动词或直接后接方所成分表达路径而不可后接补语、自身也不可充当补语的成员,如“抵达、离开、经过”等,一般为双音节。

指示路径位移动词(Ⅳ类位移动词)主要是指“来”和“去”。“来”和“去”既可单独表达位移事件的路径,可以和标记位移参照物的方所成分组合,又可作为补语和表示方式或原因的Ⅰ类位移动词或带路径语义的Ⅱ类、Ⅲ类位移动词组合。从语法特征上来看,Ⅳ类位移动词和Ⅲ类位移动词相似,且从语义上来看,Ⅳ类位移动词所标记的也是位移的终点。

Ⅳ类位移动词与Ⅲ类位移动词的差异表现在三个方面:在语义方面,Ⅲ类位移动词主要描述位移主体相对于客观世界的位置变化,其选择受位移事件本身而定,是客观的;“来、去”主要描述位移主体相对于说话者的位置变化,因此“来、去”的选用可以基于说话者的“心理的立场”,带有主观性,当说话者设置的立场改变时,“来、去”有时可以互换。在句法方面,Ⅲ类位移动词在句中一般做主要动词V或V1-V2中的V1,也可做动补结构V1-V2的补语V2,而“来、去”除了可以充任主要动词V、V1及动补结构的补语V2外,也可出现在标记位移参照物的方所成分或后置的标记位移主体的普通名词

之后，即“V1 (-V2)+方所成分/普通名词+V3”结构中的 V3。在路径类型方面，“来、去”单用时一般表达离散型路径，和“过、出、进、回、上、下”组合，充任其补语时，也可表达连续型路径。

需要注意的是，位移动词并非固定地属于 I 类、II 类和 III 类位移动词中的某一类，虽然大部分位移动词有其唯一的类别归属，但还存在着一些兼属不同类别的位移动词，如“上、下、爬”等，但这类位移动词在表达不同类型的路径时的语义存在一定差异。

我们讨论了二个和位移动词“到”有关的问题，一是“到+NP<sub>L</sub>”结构中方位词的使用问题，即在表示位移的“到+方所成分”中，方所成分是否需要方位词参与的问题；二是“V+到/在+N”结构是否成立以及结构中的“到”与“在”是否可互换使用的问题。

针对“到+NP<sub>L</sub>”结构中方所成分的问题，我们发现，方所成分中方位词的使用与名词的语义特征和位移事件的性质有关。若名词表示三维空间中的物体或物体形成的封闭空间，则该名词需要和方位词组合。若名词表示场所，则方所成分的使用与名词标记的场所在认知上是否定位有关，认知上不定位的场所名词需要和方位词组合，认知上定位的场所名词既可单独充当 NP<sub>L</sub> 也可和方位词组合为方所短语。在无论是否有方位词参与均成立的情况下，场所名词单独使用时侧重表示所示场所的超空间的范围（机构的职权范围等），和方位词组合时侧重表示场所在物理世界中的空间范围。名词表示抽象概念时，如果语义为描述主体到达某一状态，则名词只能单用，若描述主体进入某一概念的范畴，则名词一般需要和方位词“上”组合，一般不可用其他方位词。我们推测其原因在于：“到”表示位移的终点，需求明确的结果，因此要求作为终点的名词在认知上有明确的位置和界限。

而在“到”与“在”互换使用的问题上。我们发现，“V+到/在+N”结构能否成立以及两种结构是否可替换、替换后是否还表达相同的事件，受动词 V 的语义特征及位移事件的性质影响。表现为：若 V 为 I 类位移动词，表达自主位移事件的动词可用“到”也可用“在”，二者语义不同，但“在”后的场所词为位移动作发生的场所范围，没有特定的路径，不是我们所说的典型的位移事件；表达致使位移事件的 V 是否可以搭配“在”取决于 V 是否是持续性致使动作，持续性致使动作只能和“到”组合，和“在”组合时表示存在状态或动作场所而非位移事件。此外，后接趋向补语“来”、“去”时只能用“到”。若 V 为 II 类位移动词，表示下降的位移可搭配“到”和“在”，“到、在”互相替换后语义相同；表示上升的位移只能搭配“到”，不能搭配“在”。若 V 为 III 类或 IV 类位移动词，V 只能搭配“到”，不能搭配“在”。当 V 为非位移动词时，若 V 为表达静态动作的词，句法和语义特征与 I



类位移动词相同；若 V 为表示朝向改变的词，则只能和“到”组合。

第二，动补结构。

我们所说的“动补结构”既包括由一个主要动词和紧随其后的补语构成的“V1-V2”式，也包括带名词后路径补语的“V/V1-V2+名词（方所成分/普通名词）+V3”式。

动补结构是一种相对自由的路径表达方式，由动词和补语构成，二者均为动词性成分。汉语中单用的路径动词只能表达自主的位移事件，在表达致使位移事件时，由于此时动补结构中的主要动词一般由表达致使动作（施动）的动词充任，因此只能用动补结构表达路径。

在表示路径的动补结构中，主要由补语（包括出现在方所词之后的“来”或“去”）承担表达路径的功能，在主要动词也是路径动词的情况下，主要动词中的路径成分也会参与到位移路径的表达中，与补语中的路径前后衔接或互相融合。在动补结构中充任补语的一般是带路径成分的位移动词。

动补结构总体的路径特征受结构的构成及结构中各成员的路径特征影响，位移动词组合为动补结构时也需依照一定规律。规律表现为：I 类位移动词组合为动补结构 V1-V2 时只能进入 V1 位置，I 类位移动词充任 V1 时，II 类、III 类及 IV 类位移动词均可进入 V2 位置，但 II 类位移动词进入 V2 时受到一定限制，仅有“上”和“下”具备这一功能，这与 II 类位移动词自身的性质相关。II 类位移动词既可以进入 V1 位置也可以进入 V2 位置，但和 I 类位移动词充任 V1 的情况一样，可进入 V2 的也仅限“上、下”两个，且当“上、下”充任 V2 时，只能由 I 类位移动词或 II 类位移动词中除“上、下”以外的成员充任 V1；在 II 类位移动词充任 V1 时，III 类位移动词和 IV 类位移动词（部分情况下）均可与之搭配。III 类位移动词和 IV 类位移动词二者均既可进入 V1 位置又可进入 V2 位置，但二者在充当 V1 时，一般要求与其搭配的补语 V2 也是 III 类或 IV 类动词；III 类位移动词充当 V2 时比 IV 类“自由”，“自由”主要表现在两个方面：第一，IV 类位移动词只能与 II 类位移动词中的“上、下”两个成员组合，而 III 类位移动词可与 II 类中的所有成员（包括“上升、下降”等双音节的 C 组成员）组合。第二，III 类位移动词中的“到”可以和其他 III 类位移动词组合，而 IV 类位移动词不可与自身组合。但 IV 类位移动词也具备一些 III 类位移动词所不具备的特征，其特征在语义方面表现在 IV 类位移动词具备指示功能，选用时带有一定主观性；在语法方面表现在它除了可以充任 V2 位置的补语外，还可以出现在标记位移参照物或位移主体的名词性成分之后的 V3 位置。总的来说，当两个位移动词组合为动补结构时，若其中一个位移动词不带路径成分，不带路径成分的位移动

词一般占据动补结构的前项，若两个位移动词都带路径成分，则带轨迹的“弱路径位移动词”一般前置于不带轨迹的“强路径位移动词”。

位移动词组合为动补结构 V1-V2 后，V1-V2 整体的路径在语义上体现出 V1 路径和 V2 路径的顺接关系，但动补结构的路径很多情况下并不是其内部两个位移动词路径的接续。除 I 类位移动词充任 V1 时由 V2 独自表达路径外，在 V1 和 V2 均由带路径成分的位移动词充任的情况下，V1-V2 的路径也既可能是 V1 与 V2 路径的接续，也可能是 V1 与 V2 的融合，在一些特殊的情况下也存在 V1 和 V2 语义相近、重复表达同一路径的情况。动补结构中的两个位移动词会依照其位置不同而被凸显语义中的不同侧面。其中前项动词被凸显位移的方式、原因或位移的轨迹，因此更容易影响动补结构与表达持续状态的语言单位的组合；V2 位置被凸显位移的终点，因此更容易影响动补结构与表达完成状态的语言单位及指示位移参照物的方所成分的组合。

需要说明的是，在四类位移动词中，IV 类位移动词较为特殊，它所表现的路径特征并不是固定的，而是与它所处的句法位置有关。当 IV 类位移动词单独使用时，它的语义构成表现为“指示路径+一般路径（非指示路径）+位移参照物”，此时一般路径为离散型路径，而由于指示性成分的语义构成中带有位移参照物信息，因此“来”和“去”单独充任位移动词时无需和表示场所的成分组合，这一特征是其他带离散型路径的位移动词不具备的。当 IV 类位移动词充当动补结构补语时，其语义构成为“指示路径+一般路径+位移参照物”，此时若 V1 为 I 类位移动词，“来、去”一般路径表现为离散路径，若 V1 为 II 类位移动词或“到”以外的 III 类位移动词，则一般路径表现为连续型路径，若 V1 为“到”，则一般路径为离散型路径。而当 IV 类位移动词充当 V3 时，其语义构成表现为单一的指示路径，此时 V3 位置上的 IV 类位移动词并不影响句中位移表述路径信息的完整性，仅提示位移过程与观察者之间的位置关系信息。

在动补结构中，V1-V2 的路径并不是动词 V1 和 V2 的简单的接续，因此 V1-V2 中的 V1 和 V2 不一定表现出明显的顺序相接关系，二者也因各自属性和位移事件特征的不同而存在先后、并列、“后先”等不同“时间顺序”。V1 和 V2 的“时间关系”受 V1-V2 所表述的位移事件为自主位移事件还是致移位移事件的影响。自主位移事件的 V1 和 V2 为并列关系；致使位移事件的 V1 和 V2 既可能是并列关系也可能是先后关系。致使位移事件中 V1 和 V2 的“时间关系”取决于 V1 是否“有界”。当 V1“无界”时，V1 和 V2 为并列关系；V1“有界”时，V1 和 V2 为先后关系。

此外，我们也对比了表示位移的“来”和“过来”的异同。二者都表示由远及近的位移，

语义和用法有很大的相似性，在一些语境下可以互换使用，但并非在所有情况下均可互换。“来”和“过来”单独充当主要动词时能否互换主要受句子是否表达制止、禁止或否定的语义及位移主体是否具有临场性影响。造成差异的主要原因在于二者概念意义的差别，表示轨迹的“过”为“过来”增加了描述位移“过程”的语义成分。若句中表示过程的信息可以省略，则“来”与“过来”可以互换，但有时不能将过程信息设置为缺省，此时只能使用“过来”。在“来”和“过来”充当趋向补语时，动词与二者搭配的情况受动词音节数和动词词义影响。音节方面，单音节动词既能和“来”搭配又能和“过来”搭配，多音节动词一般倾向于和“过来”搭配；词义方面，“典型位移动词”既能和“来”搭配又能和“过来”搭配，“非位移动词”和“非典型位移动词”和“来”的搭配则是受限的。

### 第三，介词结构。

路径介词结构是“介词+方所成分”形式的结构。介词结构所表示的路径可根据语义分为方向、跟随和描摹三类，三者均为连续型路径。表示位移方向的介词结构既可以用在主要动词之前，也可以用在主要动词之后，但表示跟随或描摹的介词结构则只能用在主要动词之前。另外位移表述中的介词结构还可以标记路径起点。从内部构成的角度来看，路径介词结构主要由介词和方所成分两部分构成。介词是指示位移起点、经过点、终点、方向又不能独立充当主要动词或动补结构趋向补语的“向、朝、往、经、随、跟”等。方所成分是表示方向或处所的名词性成分，可分为方位词和处所词两种，方位词又可再划分为单音节的单纯用以表示方向的“东、南、上、下、前、后”等和由这些单音节方向词和“边、面”等组合而成的双音节的“东边、上面”、普通名词和上述表示方向的词组合而成的“钱包里、黑板上面、车站前”等位置词。其中方向词的语法特征较为独特，有些研究者认为它具备虚词的语义特征，而位置词虽然从词义方面来看和方向词相似，但在语法组合特征以及在句中所表现出的语义特征上却同处所词较为相似。

介词结构既可以用在主要动词前也可用在主要动词后，但前置是介词结构的主要用法，只有满足一定条件的介词结构才能后置。我们以“向”为例讨论了表示路径的介词结构后置的条件，研究发现：从构成的角度来说，只有表示位移方向的介词“向/往”等构成的路径介词结构可以后置，且其中只有“向”的使用较为自由，但后置介词结构中的方所成分只能是位置词或处所词，不能是方向词。除此之外，表示跟随的“跟/随”、表示描摹的“沿/顺”和标记位移起点的“从、自”等介词结构均只能前置。从介词结构和句中其他成分的组合关系角度来说，只有当句中和介词结构组合使用的主要动词为单音节动词并且动词后既无表示位移主体的宾语也无补语的情况下，路径介词结构才可后置。介词结构

的位置不同，语义上也存在一定差异，前置的路径介词结构带有“有意为之”的语感，而后置的路径结构有“顺势而为”的语感。

一个位移事件可以由多个路径组合而成。但受制于语法组合的规律，以一个单句形式出现的简单的位移表述中一般仅能存在一个主要动词。因此，当句中出现多个表示路径的成分时，一般是一个或数个介词结构与一个带路径成分的位移动词或动补结构组合。路径介词结构与路径位移动词及路径补语可以组合，但组合时需要满足一定条件，表现为：路径介词结构与Ⅱ类、Ⅳ类位移动词的组合相对自由，与Ⅲ类位移动词的组合受限；与动补结构组合时一般要求句中无V3位置上的“来/去”。

第四，名词性成分。

在一定情况下，充当位移表述宾语的标记位移参照物的名词性成分也可以表达路径。但只有在认知上具备线性特征或在习惯中能够被认定为位移终点的名词具备这种功能。一些组合已经呈现出惯用语化的倾向，名词表路径的情况在实际使用时的能产性有限，但出于语义和语法角度的考虑，我们认为它仍区别于省略表示路径的“到”或“在”。

## 6.2 研究展望

本文对现代汉语路径表述进行了概括性的研究，研究内容涉及汉语路径的类型、各类路径的特征，路径在具体语境中的表达方式、各路径表达方式的构成和语法、语义特征以及路径类型和路径表达方式之间的对应关系。但本文所涉及的内容仅仅是路径及其表达方式中的一小部分，在位移路径研究的领域仍有许多值得继续探讨的内容。

我们认为，未来还可以在以下四个方面展开研究：

第一，从认知的角度对路径各表达方式的特征进行分析，找到各表达方式与认知间的对应关系。本文在前人的研究成果与具体的语言实际的基础上提出了汉语路径表达的四种方式，并且结合语料分析了各路径表达方式的特征。但本文的结论多是立足于对现象的归纳和总结，侧重说明汉语位移表述的实际使用情况，并没有从认知的角度对造成这种情况的原因进行充分的分析。但我们知道，语言现象和人类的认知是密不可分的，许多现象都可以从认知中找到依据，人类的某些认知规律也可以帮助我们解读一些单从语法结构和语义角度难以解读的语言现象。因此，对语言规律进行认知方面的解释不仅有助于我们更好地阐释语言现象、厘清语言和思维间的关系，同时在语言规律和人类思维的共性之间建立联系也有助于为语言习得和语言教学提供借鉴。

第二，对路径位移动词进行更细化的分类，注重研究双音节的位移动词的特征及其

语法组合规律。本文第二章对位移动词进行了专项的研究，将位移动词进行分类并且讨论了各类位移动词的特征，但本文的研究主要集中在单音节位移动词的范围内，虽然也涉及到一些双音节位移动词的内容，但总体上来说对双音节位移动词的讨论较少，对相关规律的总结也没有形成系统。这一方面是因为双音节动词的内部构成较为复杂，组合规律的差异可能会对动词的性质产生影响，使动词所表现出的语义和语法特征复杂化；另一方面是因为单音节动词数量相对有限，而双音节位移动词数量庞大，很难以本文的篇幅对其进行系统的研究，因此，我们仅在单双音节位移动词存在差异时简单提及相关内容，并没有将它作为主要研究对象。但双音节位移动词也是位移表述中重要的组成部分，为了对位移表述有更深入和更系统的理解，我们有必要将双音节位移动词的相关规律纳入到汉语位移表述系统中。

第三，对路径介词结构进行更深入的研究。我们说过，目前汉语路径研究主要集中在位移动词和表示位移的动补结构范围内，对介词结构表示路径所做的研究相对较少。本文第五章对介词结构展开了讨论，发现了路径介词结构的一些规律，但我们认为在路径介词结构研究的领域内还有许多值得讨论的课题，如对介词结构进行更科学的分类、对介词结构的构成和其与句中其他句法成分的组合关系进行更详细的分析、对介词结构之间及介词结构与其他表示路径的句法成分之间的组合规律进行全面的讨论等。

第四，对虚拟位移事件进行研究。虽然一部分虚拟位移事件可以使用表达物理性位移的表达方式，但事实上我们也发现物理性位移和虚拟位移的差异会影响具体位移表述的语法和语义特征。本文中虽然涉及到一些和虚拟位移有关的内容，但仅仅是简单提及，相关研究和结论还比较肤浅。根据此前一些研究者的研究成果，虚拟位移事件可以依照语义分为连接、朝向、发射等不同情况，不同语义的虚拟位移事件在不同语言中的表达方式也存在差异，实际情况较为复杂，并非我们的研究课题所能囊括的。但对虚拟位移事件的表达方式展开研究不仅可以构建更完善的位移表述系统，也有助于进行跨语言的对比。同时，目前相关的研究还较少，现有的研究主要集中在对表达某一种语义的虚拟位移的用例进行跨语言对比的方面，还没有形成系统的研究虚拟位移的方法，因此这一领域仍是值得我们继续深入探讨的。

## 参考文献

1. Fillmore, Charles. 1968. The case for case. In E. Bach & R. Harms (eds.) . *Universals in Linguistic Theory*. Holt, Rinehart and Winston: University of Texas, pp. 1-88.
2. Fillmore, Charles. 1982. Frame semantics. In The Linguistic Society of Korea(eds.) . *Linguistics in the Morning Calm*. Seoul: Hanshin Publishing Co, pp. 111-137.
3. Greenberg, Joseph H. 1963. Some Universals of Grammar with Particular Reference to the Order of Meaningful Elements. In Greenberg, Joseph H. (ed.), *Universals of Human Language*. Cambridge, Mass: MIT Press, pp. 40-70.
4. Jackendoff, Ray. 1983. *Semantics and Cognition*. Cambridge: MIT Press.
5. Jackendoff, Ray. 1990. *Semantic Structures*. Cambridge, MA: The MIT Press.
6. Lakoff, G. 1987. *Women Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.
7. Lakoff, George & Mark Johnson. 1999. *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Book.
8. Langacker, Ronald. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. I. Stanford: Stanford University Press.
9. Langacker, R. W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford Univ. Press.
10. Li, Yen hui Audrey. *Abstract Case in Chinese*. 1995. Ph.D.Dissertation of University of Southern California.
11. Li, Yen- hui Audrey.1990. *Order and Constituency in Mandarin Chinese*.Dordrecht: Kluwer.
12. Liu Meichun(刘美君), Tsai Hsin-shan(蔡幸珊), Hu Chia-yin(胡佳音), Chou Shu-ping(周书平). 2015. The proto-motion event schema: Integrating Lexical Semantics and Morphological Sequencing. *Journal of Chinese Linguistics*, Volume 43, Number 2, pp. 503-547.
13. Lyons, John. 1977. "Deixis, space and time" in *Semantics*, Vol. 2. Cambridge University

- Press, pp. 636–724.
14. Matsumoto, Y. 2003. Typologies of lexicalization patterns and event integration: Clarifications and reformulations. In S. Chiba, et al., (eds.). *Empirical and Theoretical Investigations into Language: A Festschrift for Masaru Kajita*. Tokyo: Kaitakusha, pp. 403-418.
  15. Matsumoto, Y. Kawachi, K. 2020. *Broader Perspectives on Motion Event Descriptions*. John Benjamins.
  16. Slobin, Dan I. and Nini Hoiting. 1994. Reference to movement in spoken and signed languages Typological considerations. *Proceedings of the Twentieth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society: General Session Dedicated to the Contributions of Charles J. Fillmore*.
  17. Slobin, Dan I. 1996. Two ways to travel: Verbs of motion in English and Spanish. Masayoshi Shibatani & Sandra A. Thompson. *Grammatical Constructions: Their Form and Meaning*. Oxford: Oxford University Press.
  18. Slobin, Dan I. 2004. The many ways to search for a frog: Linguistic typology and the expression of motion events. *Relating events in narrative: Vol. 2. Typological and contextual perspectives*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
  19. Slobin, Dan I. 2006. What makes manner of motion salient? Exploration in linguistic typology, discourse, and cognition. In M. Hickmann & S. Robert (eds). *Space in Languages: Linguistic Systems and Cognitive Categories*. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.
  20. Sun, Chaofen. 1996. *Word-order Change and Grammaticalization in the History of Chinese*, Stanford: Stanford University Press.
  21. Tai, James H-Y.(戴浩一) 1985. "Temporal Sequence and Word Order in Chinese." *Iconicity in Syntax*, John Haiman, ed., Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, pp. 49-72.
  22. Tai, J. H-Y. 2003. *Cognitive relativism: resultative construction in Chinese Language and Linguistics*, (4.2): 301-316.
  23. Talmy, L. 1975. Semantics and syntax of motion. In J. P. Kimball (ed). *Syntax and Semantics*, Vol.4. New York, NY: Academic Press: 181-238.

24. Talmy, L. 1985. Lexicalization Patterns: Semantic Structure in Lexical Forms. In: T. Shopen (editor), *Language Typology and Syntactic Description, vol. 3: Grammatical Categories and the Lexicon*. Cambridge University Press.
25. Talmy, L. 1988. “Force Dynamics in Language and Cognition”. *Cognitive Science* 12 (1): 49-100.
26. Talmy, L. 2000a. *Toward a Cognitive Semantics, Volume I: Concept Structuring Systems*. Cambridge, MA: MIT Press.
27. Talmy, L. 2000b. *Toward a Cognitive Semantics, Volume II: Typology and Process in Concept Structuring*. Cambridge, MA: MIT Press.
28. Lamarre, C. (柯理思) 2017 「中国語の移動表現」 松本 曜 (編) 『移動表現の類型論』東京：くろしお出版、95-128 頁。
29. 荒川 清秀 1986 「中国語の方向補語について」『愛知大学外国語研究紀要第10号』。
30. 荒川 清秀 2006 「“坐进来”と“送回去” — “坐” “站” “躺” + 方向補語にみられる三つのタイプ」日中対照言語学会編『中国語の補語』東京：白帝社、1-20 頁。
31. 岳 莎莎・吉田 光演 2010 「日本語の複合動詞とテ形動詞の比較—中国人日本語学習者の誤用を通して—」『広島大学大学院総合科学研究科紀要 I 人間科学研究 5 巻』、57-68 頁。
32. 島村 典子 2013 「現代中国語の逆行型述補構造について」研究論叢 (81)、141-157 頁。
33. 島村 典子 2017 「方向補語“起”の意味ネットワーク」『杉村博文教授退休記念 中国語学論文集』、217-235 頁。
34. 下地 早智子 1997 「移動動詞に関わる『視点』の日中対照研究」『中国語学』244、132-140 頁。
35. 杉村 博文 1991 「掏出来≠取り出してくる」 相原茂 他著 『中国語学習 Q&A101』東京：大修館書店、105-107 頁。
36. 杉村 博文 2000 「“走进来”について」『中国語論集』東京：白帝社、151-164 頁。



37. 杉村 博文 2009 「方向補語を伴う移動表現の意味と形式——有対立空間における転位とその動力——」  
([https://www1.doshisha.ac.jp/~cjt1210/data1/16\\_sugimura.pdf](https://www1.doshisha.ac.jp/~cjt1210/data1/16_sugimura.pdf))
38. 杉村 博文 2012 「中国語における姿勢形成と空間移動」影山太郎他編『日中理論言語学の展望2 意味と構文』東京：くろしお出版、125-143 頁。
39. 高橋 弥守彦 2001a 「趨向動詞“来”について」『大東文化大学紀要 人文科学』39、17-38 頁。
40. 高橋 弥守彦 2001b 「動補連語“走出来”について」『大東文化大学外国語学研究』2、77-88 頁。
41. 高橋 弥守彦 2002 「移動を表す動補連語“走进来”について」『大東文化大学外国語学研究』3、53-62 頁。
42. 高橋 弥守彦 2003a 「移動を表す動補連語“走回来”について」『語学教育研究論叢』（大東文化大学語学教育研究所）20、1-24 頁。
43. 高橋 弥守彦 2003b 「趨向動詞“去”について」『大東文化大学紀要 人文科学』41:225-255
44. 田中 茂範・松本 曜 1997 『空間と移動の表現』東京：研究社。
45. 辻 幸夫 2013 『新編 認知言語学キーワード事典』東京：研究社、235 頁。
46. 中根 綾子 2008 「移動事態を表す Vx 句と V 到句の意味と形式」『中国語学』255、157-176 頁。
47. 濱口 英樹 2018 「中国語の方向複合動詞について」『関西大学外国語教育フォーラム 17』、21-28 頁。
48. 方 美麗 2003 「<方向の結びつき>～日中対照分析～」『外国語教育論集』(25)、175-185 頁。
49. 方 美麗 2004 『「移動動詞」と空間表現-統語論的な視点から見た日本語と中国語』東京：白帝社。
50. 苞山 武義 2014 『日本語・中国語における移動動詞の多義化プロセスと制約—語彙的意味と構文を手掛かりに—』関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化研究科、博士学位論文。
51. 望月 圭子 2018 「日本語教育における複合動詞の習得 ～英語の句動詞・中国語の補語との比較から～」『東京外国語大学論集 (Area and Culture Studies)

- no. 96』、183-204 頁。
52. 松本 曜 2017 『移動表現の類型論』東京：くろしお出版。
  53. 丸尾 誠 2004a 「中国語の場所表現について—移動・存在義と方位」 『日中言語対照研究論集』6、35-51 頁。
  54. 丸尾 誠 2004b 「中国語の場所詞について—モノ・トコロという観点から」 『言語文化論集 25(2)』名古屋大学大学院国際言語文化研究科、151-166 頁。
  55. 丸尾 誠 2012 「中国語の動補構造“V+回(来/去)”について」 『日中言語対照研究論集』（日中対照言語学会（白帝社））第 14 号、167-180 頁。
  56. 丸尾 誠 2014a 「中国語の方向補語“下(来/去)”の派生的用法について—「量」の概念との関連から—」 『言語文化論集』第 35 卷第 2 号、83-97 頁。
  57. 丸尾 誠 2014b 『現代中国語方向補語の研究』東京：白帝社。
  58. Hsin-I Hsieh (谢 信一), 叶 蜚声 (译) 1991-1992 《汉语中的时间和意象（上）（中）（下）》，《国外语言学》1991 年第 4 期，27-32 页，1992 年第 1 期，20-28+41 页，1992 年第 3 期，17-24 页。
  59. 戴浩一 1998 《时间顺序和汉语的语序》（黄河 译），《国外语言学》，第 1 期，10-20 页。
  60. 岛村典子 2019 《趋向补语“下”的义项分析及其语义网络》，《中国語文法研究》，87-102 页。
  61. 陈昌来 1994 《动后趋向动词性质研究述评》，《汉语学习》第 2 期，41-43 页。
  62. 陈信春 1987 《“在+NP”的“在”的隐现》，全国语言学会第四次年会。
  63. 陈信春 1991 《“从+NP”的“从”的隐现》，《河南大学学报》第 5 期，75-80 页。
  64. 陈忠 2007 《复合趋向补语中“来/去”的句法分布顺序及理据》，《当代语言学》第 1 期，39-43 页。
  65. 杜静，李福印 2016 《存在性状态变化事件的词汇化模式》，《外语教学》第 1 期，15-19 页。
  66. 杜军 2016 《状态变化事件认知机制探究》，《外国语文》第 3 期，69-75 页。
  67. 范继淹 1982 《论介词短语“在+处所”》，《语言研究》第 1 期，71-86 页。
  68. 方经民 2002 《论汉语空间区域范畴的性质和类型》，《世界汉语教学》第 3 期，37-48 页。
  69. 方经民 2004 《现代汉语方位成分的分化和语法化》，《世界汉语教学》第 2 期，

5-15 页。

70. 冯胜利 2000 《汉语韵律句法学》，上海：上海教育出版社。
71. 郭春贵 2003 《复合趋向补语与非处所宾语的位置问题补议》，《世界汉语教学》第 3 期，37-45 页。
72. 郝美玲，王芬 2015 《来自不同语言类型的学习者叙述汉语运动事件的实验研究》，《世界汉语教学》第 1 期，83-94 页。
73. 何洪峰 2014 《动词介词化的句法语义机制》，《语文研究》第 1 期，15-22 页。
74. 黄良程 2013 《时间顺序原则与华文语序教学》，《华文教学与研究》第 2 期，36-42 页。
75. 金昌吉 1996 《汉语介词和介词短语》，天津：南开大学出版社。
76. 阚哲华 2010 《汉语位移事件词汇化的语言类型研究》，《当代语言学》第 2 期，126-135 页。
77. 柯理思 2003 《汉语空间位移事件的语言表达——兼论述趋式的几个问题》，《现代中国语研究》第 5 期，京都：朋友书店，1-18 页。
78. 李福印 2013 《宏事件研究中的两大系统性误区》，《中国外语》第 2 期，25-33 页。
79. 李福印 2015 《静态事件的词汇化模式》，《外语学刊》第 1 期，38-43 页。
80. 李福印 2017 《典型位移运动事件表征中的路径要素》，《外语教学》第 1 期，1-6 页。
81. 李冠华 1985 《由“上、下、进、出”充当的趋向补语对处所宾语的语义制约》，《汉语学习》第 6 期。
82. 李临定 1985 《介词短语使用漫谈》，《语言教学与研究》第 3 期，15-26 页。
83. 李天宇 2020 《汉语运动事件词化类型研究中的几个问题》，《当代语言学》第 3 期，395-410 页。
84. 李雪 2012 《移动事件类型学研究述评》，《外语研究》第 4 期，1-9 页。
85. 刘丹青 2003 《语序类型学与介词理论》，北京：商务印书馆。
86. 刘广和 1999 《说“上 2、下 2……起来 2”——兼谈趋向补语、动趋式》，《汉语学习》第 2 期，12-15 页。
87. 刘月华 1988 《几组意义相关的趋向补语语义分析》，《语言研究》第 1 期，1-17 页。

88. 刘月华 1998 《趋向补语通释》，北京：北京语言大学出版社。
89. 刘月华，潘文娉，故鞞 2004 《实用现代汉语语法》，北京：商务印书馆。
90. 陆俭明 1990 《述补结构的复杂性——〈现代汉语补语研究资料〉序》，《语言教学与研究》第1期，13-20页。
91. 陆俭明 2002 《动词后趋向补语和宾语的位置问题》，《世界汉语教学》第1期，5-17页。
92. 罗杏焕 2008 《英汉运动事件词汇化模式的类型学研究》，《外语教学》第3期，29-33页。
93. 吕叔湘 1980 《现代汉语八百词》，北京：商务印书馆。
94. 吕叔湘 1982 《中国文法要略》，北京：商务印书馆。
95. 马贝加 1992 《介词“沿”的产生》，《语文研究》第3期，37-38页。
96. 马贝加 1999 《处所介词“向”的产生及其发展》，《语文研究》第1期，44-48页。
97. 钱乃荣 1990 《现代汉语》，北京：高等教育出版社。
98. 钱旭菁，1997，《日本留学生汉语趋向补语的习得顺序》，《世界汉语教学》第1期，94-101页。
99. 任龙波，李福印，邓宇 2015 《现代汉语双及物动结式的状态变化事件探究》，《外语教学》第5期，39-44页。
100. 邵敬敏 2004 《动宾组合中的制约与反制约关系——以“进 NP”结构分析为例》，《暨南大学华文学院学报》第1期，37-41页。
101. 沈家煊 1995 《“有界”与“无界”》，《中国语文》第5期，367-380页。
102. 沈家煊 2003 《现代汉语“动补结构”的类型学考察》，《世界汉语教学》第3期，17-23页。
103. 沈阳 2015 《中国语文》第2期，105-120页。
104. 史文磊 2014 《汉语运动事件词化类型的历时考察》，北京：商务印书馆。
105. 王国栓 2005 《趋向问题研究》，北京：华夏出版社。
106. 王寅 2007 《认知语言学》，上海：上海外语教育出版社。
107. 吴建伟 2009 《英汉运动事件路径语义的句法研究》，《山东外语教学》第5期，28-32页。
108. 吴金花 2005 《处所介词“到”的产生》，《福建师范大学学报》第4期，105-107页。

109. 吴丽君 等 2002 《日本学生汉语习得偏误研究》，北京：中国社会科学出版社。
110. 邢福义 1980 《关于“从……到……”结构》，《中国语文》第 1 期。
111. 徐丹 1994 《关于汉语里“动词+X+地点词”的句型》，《中国语文》第 3 期，180-185 页。
112. 严辰松 2005 《英汉语表达“实现”意义的词汇化模式》，《外国语》第 1 期，23-29 页。
113. 杨德峰 2004 《日语母语学习者趋向补语习得情况分析——基于汉语中介语语料库的研究》，《暨南大学华文学院学报》第 3 期，23-35 页。
114. 杨德峰 2005 《“时间顺序原则”与“动词+复合趋向动词”带宾语形成的句式》，《世界汉语教学》03 期，56-65 页。
115. 杨德峰 2017 《趋向补语的认知和习得研究》，北京：北京大学出版社。
116. 杨凯荣 2006 《论趋向补语和宾语的位置》，《汉语学报》第 2 期，55-61 页。
117. 杨旭 2016 《汉语趋向连动式的构式化研究》，西南大学。
118. 俞光中 1987 《“V 在 NL”的分析及其来源献疑》，《语文研究》第 3 期，14-18 页。
119. 余志鸿 1984 《汉语前后置词混用的实质》，《杭州大学学报增刊·语言学年刊》。
120. 张黎 2003 《“有意”和“无意”——汉语“镜像”表达中的意合范畴》，《世界汉语教学》第 1 期，30-39 页。
121. 张兴 2005 《时间顺序原则与日语语序》，《解放军外国语学院学报》第 1 期，29-32 页。
122. 张亚锋 2007 《汉语是卫星框架化语言吗？》，《孝感学院学报》第 6 期，42-45 页。
123. 赵元任 1980 《中国话的文法》，香港：中文大学出版社。
124. 曾传禄 2010 《汉语位移事件的语言表达》，《对外汉语研究》，202-217 页。
125. 曾传禄 2014 《现代汉语位移空间的认知研究》，北京：商务印书馆。
126. 朱德熙 1982 《语法讲义》，北京：商务印书馆。

## 附录

位移动词的分类（动词均从本文例句中摘出）

I 类位移动词	自主	奔、冲 1（冲刺）、穿、滴、翻、飞、汇、流、迈、爬 1（爬行）、跑、飘、扑、跳、迎、游、追、走、钻、飞奔、接近、蔓延、猛扑、绵延、蹒跚、延伸
	致使	搬、冲 2（冲水）、吹、存、打、带、递、放、扶、赶、搁、寄、交、接、开、拉、拿、挪、刨、扔、洒、塞、扫、射、驶、送、抬、掏、踢、提、贴、投、献、运、横扫、载运
II 类位移动词	A 组	登、爬 2（爬山）、攀、上 1（上楼梯）、下 1（下楼梯）
	B 组	掉、降、落、升、涌、坠、涨
	C 组	跌落、落下、攀升、前进、上升、升起、推进、下降、坠落
III 类位移动词	单音节	出、到、过、回、进、经、离、入、上 2（上医院）、下 2（下飞机）
	多音节	到达、抵达、经过、离开
IV 类位移动词		来、去

## 致谢

二〇一八年那个桂花飘香的秋季，我提着行李，双脚踏上日本的土地。三年半的时光倏忽即逝，虽然甚至没发生什么值得说与人听的事，生活所留下的点滴细节却深深印在我的脑海、刻入我的灵魂。

攻读博士学位期间，每当受人之恩，我就暗自记下，打算在论文完成时表达自己的谢意。但当完稿的这一刻真的到来时，我想开口，却发现自己无法从万千思绪之中理出述说的顺序。

我一直觉得，在研究者的领域里，导师便是生身父母，我们从父母那里学会做“人”，亦从导师那里学会做“研究者”。我从我的导师古川裕教授身上学到的作为一名研究者的素质——不仅包括研究者的视野、思维，还包括研究者所应具备的人格，甚至比学术知识本身更加珍贵。而在三年的研究和论文写作过程中，我的副指导教师中田聪美副教授、铃木慎吾副教授、中文研究室的同学们，以及陈俊博士，也为我提供了诸多指导、建议与帮助。此外，还要感谢日本文部科学省和中国国家留学基金委为我来日攻读博士学位提供资金支持。

当然，我还是要把我心底最诚挚谢意送给我的父母。感谢父母给我的身躯与生命，让我经历这人世间的一切美好，承载我如今的一切所思与所为，也让我有机会发现或者创造一些有价值的东西，并把这些东西传递下去，做一个对人类和社会有贡献的人——尽管这份贡献是宛如大海中的一滴水般微不足道的，我也因此感到欣慰。

## 正误表

位置	误	正
正文第二章 2.1 节 (10 页)	路径的构型成分是一个几何复合体,它将与运动构造式中的基本参照物图式与完整参照物图式联系起来。	路径的构型成分是一个几何复合体,它将运动构造式中的基本参照物图式与完整参照物图式联系起来。
正文第二章 2.3.1 节 (22 页)	②介词和表示移动参照物的名字所构成的介词结构	②介词和表示移动参照物的名词所构成的介词结构
正文第三章 3.1 节 (32 页)	而对比 (24d) 和 (24e) 可以发现……	而对比 (24d) 和 (25d) 可以发现……
正文第三章第 3.2.1 节 (38 页)	(35) a. 大楼离地约三四丈高,一不小心,从上面掉到地上,就得跌坏,岂是当真闹着玩儿? (沈从文《一天》)	(35) a. 大楼离地约三四丈高,一不小心,从上面 <u>掉到地上</u> ,就得跌坏,岂是当真闹着玩儿? (沈从文《一天》)
正文第三章第 3.2.2 节 (38 页)	II 类位移动词可按照语法特征分为两组……	II 类位移动词可按照语法特征分为三组……
正文第三章第 3.2.3 节 (44 页)	古川裕 (2021) 指出,〈起点〉指向和〈终点〉指向具有不对称性……	古川裕 (2002) 指出,〈起点〉指向和〈终点〉指向具有不对称性……
参考文献	103. 沈阳 2015 《中国语文》第 2 期, 105-120 页。	103. 沈阳 2015 《现代汉语“V+到/在 NPL”结构的句法构造及相关问题》,《中国语文》第 2 期, 105-120 页。
参考文献	114. 杨德峰 2005 《“时间顺序原则”与“动词+复合趋向动词”带宾语形成的句式》,《世界汉语教学》03 期, 56-65 页。	114. 杨德峰 2005 《“时间顺序原则”与“动词+复合趋向动词”带宾语形成的句式》,《世界汉语教学》第 03 期, 56-65 页。
参考文献	—— (添加条目)	古川裕 2002 《〈起点〉指向和〈终点〉指向的不对称性及其认知解释》,《世界汉语教学》第 3 期, 49-59+3 页。